

あんかるわ別号《深夜版》2

松下昇表現集

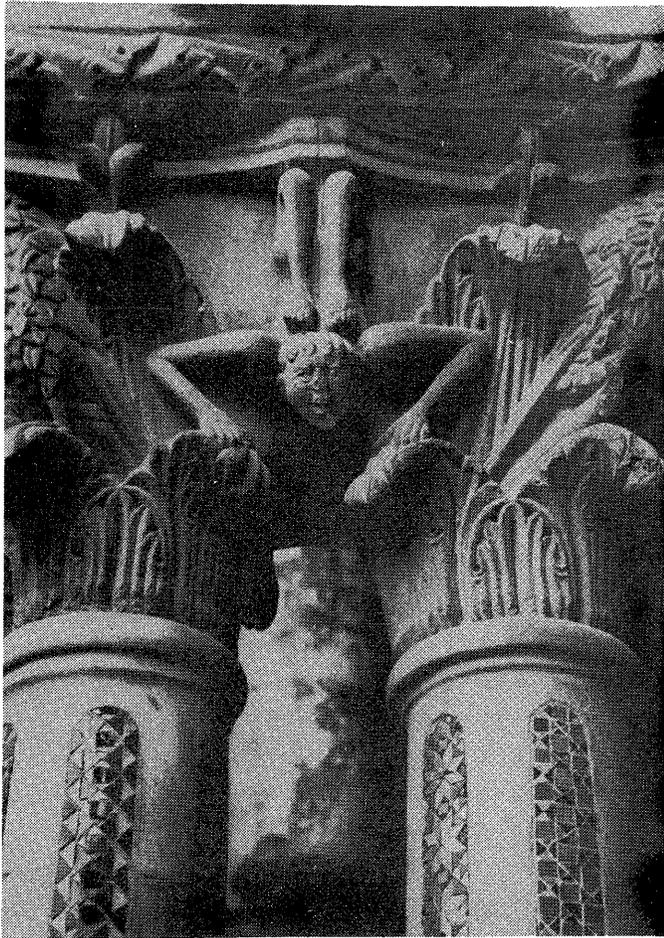
一九七一年一月

あんかるわ

別号 (深夜版) 2

1971. 1. 1

目次



松下昇表現集

第Ⅰ部 情況への発言(4) バリケード的表現(5) なにものかへのあいさつ(6)

第Ⅱ部 〈ハンガリー革命〉と〈六甲〉(11) 情況への発言〈あるいわ〉遠い夢(13)
私の自主講座運動(23)

第Ⅲ部 遠嵐(30) 北海(43) 循環(50) 六甲(61) 包囲(101)

第Ⅳ部 プレヒト「処置」の問題(134) ハイネの序文に関する序論(144)
〈第n論文〉をめぐる諸註(156) 不確かな論文への予断(165)

* 表現の時と場について(2) * 松下昇表現集について…北川透(171)

第1部

情況への発言
バリケード的表現
なにかへのあいさつ

表現の時と場について

情況への発言 1969年2月2日 神戸大学教養部掲示板

バリケード的表現 1969年8月下旬に神戸大学構内のさまざまな場に掲示、ピラ、落書として出現
なにかへのあいさつ 1970年1月3日 数名に直接配布したが、その後……

〈ハンガリー革命〉と〈六甲〉 神戸大学新聞 1966年11月11日号

情況への発言 〈あるいは〉 遠い夢 「あんかるわ」18号 (1968年4月)

私の自主講座運動 1969年12月 都立大解放学校での問題提起 「ラディクス」2号から転載

遠嵐 「試行」5号 1962年7月

北海 「試行」9号 1963年10月

循環 「試行」12号 1964年11月

六甲 序章 「試行」15号 1965年10月

第2章 「試行」16号 1966年2月

第3章 「試行」17号 1966年5月

第4章 「試行」18号 1966年8月

第5章 「試行」19号 1966年12月

包囲 (1) 「試行」21号 1967年6月

(2) 「試行」22号 1967年9月

(3) 「試行」23号 1967年12月

(4) 「試行」24号 1968年4月

(5) 「試行」25号 1968年8月

ブレヒト「処置」の問題 神戸大学「近代」36号 1964年8月

ハイネの序文に関する序論 神戸大学「論集」2号 1966年3月

〈第n論文〉をめぐる諸註 「ドイツ文学論集」1号 1967年3月

不確かな論文への予断 神戸大学「論集」7号 1969年3月

情況への発言

〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君ノ、二月一日の団交は評議会が〈寮問題〉に
関する解決能力を持っていないことを暴露した。

しかし、これだけをスト続行か中止かの基準にしてはならない。まして〈時間〉が切迫
しているからといって、〈しけん〉のための秩序に復帰してはならない。

〈スト〉に入る契約自体よりも、一ヶ月以上にわたるスト持続によって、一切の大学構
成員と機構の真の姿がみえはじめ、同時に、自己と、その存在基盤を変革する可能性がう
まれていることの方が、はるかに重大なのだ。

〈神戸大学教養部〉の全ての構成員諸君ノ、このストを媒介にして何をどのように変革
するのか、そして、持続、拡大する方法は何か、について一人一人表現せよ。

少なくとも、この実現の第一歩が、大衆的に確認されるまで、〈私〉は旧大学秩序の維
持に役立つ一切の労働（授業、しけん等）を放棄する。

この問題提起に何らかの共有性を発見する諸君は、自己にとって最も必然的な方向を創
り出して闘争に参加せよ。

一九六九年 二月二日

〈六甲空間〉にて

バリケード的表現

全学集会↓封鎖解除↓授業再開という反革命過程にぬりこめられている犯罪性は、大学
の枠をこえて階級社会と人間存在のあらゆる原罪性へいきつく。

国家権力、右翼秩序派、スターリニストの見事な統一戦線を見よ。私たちは微笑しながら、
かれらを出現させている世界（史）的な関係に対立し、打倒し、止揚していくであろ
う。

敵でも味方でもない、ある圧倒的な力によって問題提起の正しさが湾曲していくのでは
ないかという一瞬おとずれる感覚のむこうに、はじめて、ほんとうの闘争がはじまっている。

いま自分にとって最もあまいな、ふれたくないテーマと、闘争の最も根底的なスロー
ガンと結合せよ。そこにこそ、私たちの生死をかける情況がうまれてくるはずだ。

私たちは、バリケードから、全ての人間たちの真の姿を見てしまった。そしてバリケー
ドの影は、全ての人間の時間と空間をおおいつくしている。この上、何を怖れることがあ
ろうか。

.....

一九六九年八月へにて

なにものかへのあいさつ

私が、年代や情況の表面的な変化とは関係なく格闘しなければならぬテーマは、私が、この数年間追求してきたテーマ、 α ・不可能性表現論、 β ・情熱空間論、 γ ・仮装組織論（連続性論）などを、包圍し、つきうごかすようなかたちで訪れてきている。それは、いますぐに、ここで展開させるものではない。むしろ、私は、それらの星雲状の総体からやってくる波動を、この紙片でうけとめることによって、私のように闘争とかアピールから最も遠い位相にある人間を最前線に押し出してしまう何ものかの残酷な力と対抗しようとしているのだろう。それゆえ、残りの数十行に私が断片的に、一気に埋める言葉は、純粹に私だけのものである。しかし……いや、やめておこう。時は迫っている。

この世界で最も幻想性にあふれた領域で、固有のスローガン、戦術を媒介として問われているのは、おそらく、つぶやきからゲバルトをへて国家、さらには宇宙に至る全ての表現の根拠の変革である。とりわけ、表現の階級性の止揚。死語のなだれ、自己と他者に本質的な死をもたらす沈黙への怒り。倒錯した現実へのなしくずし感覚の根底にある自然さを、どのように粉砕するのか。報復と一行の詩。汝の表現論を示せ。汝の原罪性がそこに、ひっそりと息づいているはずだから。

橋を、広場を、部屋を、かんたんに通りすぎるな。権力にも、寄生虫的な参加者にも視

えない空間が存在するのだ。汝はなぜここにいるのか。もはや、ここから脱出することはできない。ここに集中してくる全てのテーマを一人でも生涯かけてひきずっていく力を獲得するまでは。何よりもまず、バリケードとか、占拠とかという言葉を汝だけの言葉に変化させ、その方法の追求ないし総括の場が、そのまま闘争となるような場を創りださなければならぬ。

風のヘルメットによる恒常的武装。火焰ピンを投げつけざるをえない関係そのものへ火焰ピンを投げよ。真の断絶をこえた連続性。憎悪の対象や愛のしぐさが固定しているとき、汝は汝の敵のものである組織論を内部に育てている。日付けを越え、政治を越え、一片の綿毛に生命を吹きこみつつ、最後の日付け、最後の政治へたどりつこう。固有の、不可避の闘争としてだけでなく、それを無視するほど巨大な闘争の不可避の応用として。

一九七〇年一月三日

第Ⅱ部

〈ハンガリー革命〉—〈六甲〉

情況への発言 〈あるいは〉 遠い夢
私の自主講座運動

〈ハンガリー革命〉——〈六甲〉

の年表をさらべても一九五六年のところを開くと〈スターリン批判〉の次あたりに〈ハンガリー動乱〉とか〈ハンガリー事件〉とか〈ハンガリー問題〉という文字にぶつかるだけである。これは、殆んどすべての文献からジャーナリズムに至るまで一貫した現象である。この現象は怖しいことではないか。そして、この現象に気付かないのは更に怖しいことではないか。私のこの問題提起は、トロツキーの文献や、反スターリン主義の方針とは別の位相でなされている。ある発言を現存のアイデアオロギーや組織の枠に還元するのは私たちの

えらぶべき態度ではない。

私自身は、この不可解な歴史的事実を〈革命〉とよびうる根拠と資料をいくらかもっているが、いま強調したいのは次の諸点である。

〈革命〉に立ち上ったものも、鎮圧にあたったものも、自分が、いまなにをしつつあるのか分らなかつたこと。この歴史的事実をどのよう判断するかによって現代史の評価軸が転倒してしまうこと。そのような契機をはらんでいるのに、もしも放置しておけば事実の集積の中へ埋没していくこと、などである。

十年前の秋、それを〈帝国主義者の陰謀〉だと信じこんでいた私は、その後いくつかの闘争に参加する過程で、それを〈革命〉だと評価しなおさざるをえなくなった。

エピソードの一つ。その後、私は、デモに行けば、機動隊員から〈ソ連・中国の手先〉といつてなぐられ、デモから帰れば〈前衛〉党

〈ハンガリー革命〉は、私たちのほとんど耳にしたことのないことばであり、〈六甲〉は、親しすぎるくらいのことばである。いま、ここで、この関係を転倒させ、〈ハンガリー革命〉を私たちの内部へとりこみ、〈六甲〉をはじめてみるまざしでとらえるのが、この小論の意図である。従って〈〉をつけたことばは、いわば、この紙面から別の位相へはみだし、ゆらめき、舞い上ろうとされていると考えてよい。表題の二つのことばの動きや、相互の対応のあたりを追求する前に、まず、それぞれのことばが、最初に私たちに与える手ざわりをたしかめておこう。

〈ハンガリー革命〉——私たちは歴史年表の中に、さまざまな〈革命〉の文字をみるけれどもそれを支持するか、しないかにかかわらず、一つの記号のようにみなしている。ところで私たちは、歴史年表の中に〈ハンガリー革命〉という文字をみいだすことができない。ど員から〈米日反動の手先〉といつて非難された。：そして、私は神戸をへたよりにならない〉大学をもつ港町だと思つていた。安保以前のことである。私の〈個人的な体験〉からいえることは何か。すべてのものは、この〈ハンガリー〉に対する十年間の評価の変移を検討し、そこに含まれるドラマをいかみまよ。それを無視したりなくしにする態度は、戦争責任を無視したり、なくしにする態度と同じである。このことを私は決して倫理的な踏み絵として持ちだすのではなく、このような重層的な手続きなしには国家権力の構造に沿つて、二つの体制圏をつなぐ斜面をなだれ落ちていく危険があると考え

るのだ。

十年前の体験をもたない人も、現実を科学的に主体的に変革するための保証は何か、という問いをさまざま活動を最大限に展開しつつ自らに課することによつてこの〈体験〉を共有するのである。私が〈ハンガリー革命〉を一回性の事実としてではなく〈関係〉として、すなわち、これからも生起しうるものとして語っていることはいふまでもない。

次に〈六甲〉をはじめてみるまざしでとらえるとは、どういうことか。今年の春以来、神戸大学の学生諸君十数名によつて制作されてきた映画〈六甲〉が完成に近づいている。いや正確にいえば〈未完成〉に近づいている。私たちはまもなく、その映画をみることになるだろうが、必ず、いままで自分のもつていた六甲のイメージが動揺するだろう。この映画は地理的空間としての六甲に陶醉した作品ではなく、六甲の空間を歪んだまま提示し、それによつて私たちの意識の歪みをとりにだそうというねらいをもっており、たとえば次のようなナレーションがひびいている。

——風が吹く。六甲が揺れる。

その複数の揺れの中に

六つに割れた神戸が姿を現わす——

私たちが、複数のことなつた〈六甲〉のイメージをもつことは世界の構造の歪みを暗示しているのだ。

そして、このことは制作者たちが、さまざまな重要なことばを発音するとき、ある〈恥しき〉をかんじはじめていることと無関係ではない。この映画がとらえているのは風景だけではなく、撮影の活動をしているものが撮影されていたり、シナリオを批評する手紙が朗読されたりする。タンポポの綿毛の間から突出する巨岩、油コブシ、そして制作者たちの味わつた〈不平〉や〈不快〉も重要な登場者である。

映画〈六甲〉は、実をいうと私が雑誌〈試行〉に連載している散文〈六甲〉と無関係ではない。しかし、私は映画の制作について指導はしなかつた。残念ながら資金カンパも。私がいなくても同じ問題意識によつて何らかの表現をつくりだす段階に近づいていたのであるから。ただ私がうれしく感じたのは、私が個人的な表現の場で模索するときの位相と、集団が、さまざまな技術をはじめて使用し、経済的制約に苦しみながら表現していくときの位相を比較する機会を得られたことである。映画〈六甲〉は私たちが、未踏の、複雑な現実過程を変革していくときに出合う困難を、この〈美しい〉六甲空間の中で萌芽的にはあるが先取していると考えられる。もちろん、その萌芽を私たちの一切の苦闘と結びつけ、時間の中へ組織化していくためには、これからの持続的飛躍的な努力が必要である。

ともかく、このようなフィルムからこぼれ落ちる何ものかを〈制作者〉がみるために映画〈六甲〉は制作されてきた。一方〈観客〉とし

しての私たちも、映像の未完成の領域を想像力によってとりだし、対話し、論争し、その領域をどこまでも下降していくとき、〈六甲〉の登場者として〈六甲〉をつくりだす問題に入っていくことになる。

（ハンガリー革命）が含む戦車のような重さと、〈六甲〉が含むタンポポの綿毛のような軽さ——その婚姻のときが迫っている……と私はふと考えてみた。革命者と制作者は、互いに結合されつつ論じられているとは知らずに存在しているとしても、私に〈ふと〉そのように考えさせる力が〈ハンガリー革命〉にも、〈六甲〉にもあることは確かなのだ。両方を結合関係——共通点をあげてみよう。

○ 個々の時間、空間に規定されながら、それによって逆に、普遍的な時間、空間へ出ていく契機をつくりだしている。

○ 敗北、未完成という事態が、そのために一層あきらかに、状況や存在の危機を告発している。

○ 意識の平衡が転倒するほど現実過程の中でたまたまい、模索しているときに、はじめて手に触れてくる。

○ はじめのヴィジョンが、何かの力によって、みるみる変移して自分を追い越していく怖しさを当事者に与える。

○ 対象を変革する（表現する）だけでなく、変革する（表現する）方法そのものを対象の中に加えていく必要を感じさせる。

○ このような関係——共通点の確認は、私たちに何をよびかけるのであろうか。私はその声を次のように聞く。

局所的地名としての〈六甲〉を、この世界のどここの場所と置換してもよい。ただ〈ハンガリー革命〉的な発想と最も遠い距離にある〈六甲〉は、その〈おくれ〉を逆用して現存するすべての思想——組織を最初にのりこえて行く光栄を可能性としてもっている。

情況への発言〈あるいは〉遠い夢

不安にかられて私たちは支えを求めるが、多くの場合、古くなったものに対しては若すぎ、まだ存在していないものに対しては老いすぎている。
（リルケ〈オルフェウスに寄せるソネット〉から）

私にとって〈羽田闘争〉は遠い夢に以ている。その原因の一つは、私が〈参加しない〉固有の事件としてのヴィジョンが、国家権力、マスコミ、さまざまな位相にある政治組織によって引き裂かれた評価を与えられ、余剰のみが屈折しながら私を訪れ、時間と共に変質していることにある。けれどもそれだけが私に遠い夢だと思わせる原因ではない。

どのような事件も情況に深く突きささるほど、全過程が見えなくなるようにしか存在しないのではないか。この疑問は、全ての判断主体にとって同じ意味をもつ情況などは存在しないのだ。という直感と反響しあう。むしろ私は、一見〈羽田闘争〉を遠い夢としてもとらえないまま生き続ける膨大な人々のように、沈黙したまま、しかも、それらの人々から遠いところで闘争の深さと、沈黙総体の深さが対等に岐立するような支点をみつけないべきなのだ。

また、現代史の時間の構造にくいこんでいる〈ハンガリー革命〉をどのようにささやかな情念のざわめきと置換してもよい。私たちは、生ぬるい怠惰な世界の中で極限まで生き抜こうとするとき、一瞬ごとに〈革命〉と触れ合うことになるのだから。

つまり、現実から逸脱しているようにみえるこの〈幻想性〉は、世界最初の反戦ストや新しい創作理論や、やさしい愛などと、必ずどこかで交差し、それらを支え、おしすすめているのである。

ここまできいてきたとき、はじめて巨大なテーマ群が、はっきりとみえてきた。この小論は、それらの巨大なテーマ群（例——仮装組織論、不可能性表現論、情熱空間論）をひきずり出すための媒介となっていくことに、いま私は気付いている。しかしながら、よく考えてみれば、これこそ、まさに〈ハンガリー革命〉や〈六甲〉が無意識のうちにもっている存在の様式に他ならない。

しかし私は沈黙しようと思いつつも、すでに沈黙についてかいてしまっており、無視しようとしても、呼吸のように私と〈羽田闘争〉の間を流れるものがある。〈遠い夢〉のよな力が私にかくことを強いているのかもしれない。この場合、羽田の固有性へ吸引されるのではなく、逆に、それから最も遠くへ、できれば全ての〈……闘争〉〈……戦争〉〈……革命〉のおとす影が全く消え去るようにみえる〈未来〉へ私の〈闘争〉を仮構し、この過程でうまれる問題を、どもりながら表現していくことが、いまとりうる正当な道だといえる。

という気がする。そして、にもかかわらず、すでに私は、〈羽田闘争〉を論じる〈私〉に仮装しながら、私の〈道〉の上へ〈なつかしい〉速度で舞い降りてくるものへむかって手をさしのべている。
いま私には、形式のむこうにある自己の位相と衝突しない全ての〈声明〉（ある条件をこえて、〈表現〉一般についていいたいのだが……）は、支持であろうと非難であろうと〈対等〉に不毛であるとしか考えられない。

まず、自明のあいまいさの確認から。この文章をかくこともそうであるが、人間の行動は、いかに非日常的にみえようとも、その下に日常性をひきずっており、変化の急激さや、組み合わせの異和のために、

非日常性とよばれることもあるというにすぎない。

羽田の時間＝空間へでかけた人々は、非日常的な行動をしていたのであろうか。いつも生活の場でしているのと同様に、時刻、地形への配慮、対話、笑い、経済的暗算や生理的欲求、この瞬間とは全く無関係な感覚の断片……などにみだされて行動していたはずである。そして、この（日常性）の急激な変化を自らつくりだしながら、その流れの中で、進み、傷つき、のがれ、あるいは逮捕されているのである。すぐとなりにいる人間を遠い夢のように感じながら。

かれらは、自己の論理を日常性として集団的に主張するとき、秩序を維持する権力の日常性と、最も異和感をうみだす組み合わせとして交差せざるをえなかった。羽田闘争に示される非日常性は、私たちの状況のもつ日常性が非日常性の集積であることを明らかにし、同時に私たちがヴェールのように覆う日常性をはねのけようとするれば、いたるところに潜在している非日常性が現われることを示している。しかし、これは羽田闘争によってのみ示されているのではない。（ヴェールのように覆う）構造をとらえ、（はねのけよう）とする行動を別の状況の中へ、羽田闘争と（無関係に）つくりだしていくこともできるのである。

その場合、任意の動作（X）を、羽田への（参加）に至らないものとして測定せず、逆に、羽田への（参加）を任意の動作（X）に至らないものとして測定しようする想像力の往還が必要であろう。任意の動作（X）と羽田への（参加）は、双方を制約する状況へぶつかる激しさにおいてのみ真に連帯しうるのである。この方向を通過することなしには、根底的な変革運動のヴィジョンは成立しない。むしろ、この方

てのみ動かされたのではなく、膨張していく独占秩序と腐敗していく反体制秩序のすきまで、自己の展開すべき幻想性の展開条件が絞殺されるのを（阻止）しようとしたのである。（このことばどおりを意識しているかどうかは、いま問わない）幻想性が絞殺されても直接に肉体まで死にはしないけれども、それは現実の共同的な湾曲条件を正確な比喻としてとらえうるし、本来私たちの歴史は、現実の物質過程と幻想過程の交差としてのみ成立している以上、この幻想性（それ自体はプラスでもマイナスでもない）を必然的な媒介項として扱うことなしには、いかなる情況分析も戦略も不毛になるだろう。

湾曲した幻想性は、どのようなかたちへ展開していくのか……この問いへの答えを（石）と化しつつ荘甲車のむこうへ投げつける人が羽田には存在した。そして不可視の（羽田）にも。すべての（羽田）にいる人をとおりすぎている共通の情念は、怒りのみであるとはいえない。むしろ、当面する（敵）が、複雑であるため、その（敵）は、別のものに交換可能ではないか、交換可能な領域の極限には、おそらく国家の壁もそびえているだろうか、それらを全体として、どのように乗り越えていけばよいか……という（わからなさ）の感覚において共通していると私は考える。

すべての（羽田）が、いまだどこまで戦線を拡大しているかは、わからないにしても、事実としての羽田闘争のみを論じる人を私は越えていく。まして現象面から論じる人。

羽田では、もっと有機的なゲリラ戦術がとりえたのではないかとか、投石、放火、ヘルメット、角材による実力行動は是非かとい

向の、はるかな遠くが最も近いという予感をことばと行動と現実に化すべき段階に私たちは到達しているのではないか。このような方向が、（羽田）へ至る道ではないか。

羽田闘争が可視的な外部に与えた影響は重要であるが、ここでは、それと同じ量だけ幻想領域で生じる問題にふれよう。すべての可視的な集団行動へ参加するものは、次の問いへも参加しているだろうか。アジェーション、歌、叫び、呻き……と変動する表現の運動の極限に何が現われるか。衝突の直前と直後で大きな落差をもつ風景や組織や意識の極限に何が現われるか。これらの問いかけのむこうへはみだしていくとき、ことばにならない苦痛（とは限らないが）をかかえて、しかもその（苦痛）を対象化しえないでいる存在（大衆だけでなく、機動隊員や自己もふくめて）が現われてくるのではないか。

羽田闘争は、ある国家の支配階級の代表者が他の国家の支配階級の代表者と会いに行くことを阻止する行動としておこなわれているが、その場合、スローガンを量や有効性や影響に還元して論じることは、指導者→支配者の論理に至る危険をはらんでいる。その行動にぬりこめられたものを切りすてずに包括しつつ、（阻止）という行動が、現在の資本制社会と個々の存在との関係において、どのようなかたちで他の力（物理的にだけでなく幻想的な力）とぶつかりあうことになるのかということを確認する必要がある。もちろん、（学生）とか（大学）という概念を転倒し、この確認をもっとも自発的になしうる人間や場所を、いまは（学生）とか（大学）と呼んでおくだけにしなければならぬ。（労働者）や（生産点）についても同じ方向で別々に考えてみたい。

羽田へ、やむをえず参加した人たちは、スローガンや危機感によつて風に技術的な位相にしばって評価すると、たとえ部分的に支持する場合にも、破防法を適用しようとする国家権力と同じ論理的水準に落ちてしまう。また、いまの段階での行動を武装闘争ということばに固定して、いまその条件があるかないかという問題へ猪突するのは、実力行動の不連続性（装備は決して直線状に国家の所有する軍事力まで上昇しない）への無知と、発想者の政治意識の貧困を示している。

眼にうつる参加者の実力行動は、それが評価者の水準からすれば仰天するほどであっても、決して闘争の主要な特徴とはならない。このように（うつる）行動をする個人や組織が、なぜ出現してきたのか、それに注目する自己の立場は何かという問題を現実過程の中からさぐり、更に、どのような行動も行動者の外部だけでなく内部へも同量に作用するものであるという二重性を考慮して追求すべきである。

私は羽田へ出発するデモ隊員が、（服装）とよんだ方がいいような（武装）をしながら、奇妙な恥らいつけい感のために微笑していたと確信する。その表情は、機動隊の装備とデモ隊の装備に、決定的な（物理的な、ではない）ちがいのあることを示しているのだ。機動隊の行動は、支配階級の意志としての法の適用に支えられ、たとえ弾圧しなくても暴力装置として日常的に存在しているのに対し、デモ隊の行動は、情況の尖端へむかって集団として介入する瞬間にのみ固有の時間＝空間の条件に規定された方針と最大限の装備（極めて初歩的な、生活に密着した）をしているにすぎないからである。（この服装でどこまで生き続けるか……）

ここで、かりに国家権力の論理を同じ水準で逆用してみれば、デモ

隊が、これまでの苦い教訓によって、警棒をさける帽子の変形としてのヘルメット、手の変形としての角材を用いるのは、私たちが雨の降るとき傘をさすように（当然な）ことである。デモ隊の（服装）に仰天するものは、雨が降るとき傘をさしながら同じ角度で天を仰げばよいだろう。

とはいえ、デモ隊員の表情に浮んだ微笑は、国家権力の論理水準を無意識のうちにせよ越えているからこそ生まれている。なにもものをも怖れない変革者から、戦慄する弱々しい青年にいたる無数の他者をかかえこんでいるかれの幻想過程に現われてくるであろうヴィジョンを私があえて政治的な位相のことばにすれば次のようになる。

参加者の全てが死のむこうへかけ抜けようとする行動から完全な非暴力直接行動に至る闘争形態のうち、いまこの（服装）をとおりすぎる自分。階級対立の仕方そのものが暴力であり、その暴力を止揚しきれない既成左翼や同じ行動に立ち上れない大衆がいま自分にこのような（服装）をさせている。より正確には自分でこの服装をえらびとろうとしたのだ。理論的な確信の上で……一瞬かすめる討議や宣伝や妨害の情景。もしも自分だけで、これらの全ての装備を入手し配布すると仮定したときの困難さ。分派闘争で、すでにこの（服装）が使用され、訓練され、しかもいまかれらと合流して羽田へむかっている複雑な感慨。孤立や非難は覚悟しているけれども、この行動によってしか到達できない領域と、この行動によってでは到達できない領域の境界線を（すでに）通過しているという直感。四方を閉塞されたとき、この方向へ跳躍するしかない。論理はあとからやってこい。（次）が分らなくなる瞬間を、できるだけ速い状況をまきこみながらつくり

同一水準に行きつくのである。いま、かれらがかりにここ数年日共から離れつつあるとしても、それは自己の論理の歴史的責任に盲目なまま一切を情勢の変化のうちに求める習性の現われであるにすぎない。

個々の戦術は、しばしば、それからはみだす深淵をいかみさせるものである。デモ隊は（飛行機）が日本を去ってからなおも機動隊と衝突したのはなぜか、という批判に対して、警備をとかず逆に四方から襲撃してくる機動隊があり、死者の出たことが判明したデモ隊としては、前進する他なかった、と答えるのは容易である。かれらは装甲車をのりこえながら、いわば直線状の時間軸をのりこえ、国家権力にうばわれた時間をとりもどす姿勢への可能性を持つようとしている。

闘争の期間が長くなったとき、この可能性は一層あきらかになるだろう。ただ、この姿勢が、国家権力の誘発する枠の内部で、それに対応してとられている限り、また、物理的にのりこえるかたちをのりこえない限り、うばわれている被支配者階級の時間＝空間や権力＝関係をうばいかえす契機を見出しえない。

また、いまおこなわれている闘争を七十年安保への前哨戦としての面を強調すると前述の直線時間軸による逆規定になる。どのような闘争も一瞬ごとに幻想過程と現実過程の最深部からの変革として企てられなければ、つねに客観情勢と勝敗に左右され、（政治）を克服しえない。

いままでは羽田闘争の幻想過程に重点をおいて論じてきたけれども、それは、手足を動かしてさえいれば（実践）だと錯覚する観念論者が多すぎる状況への関心からである。

だそうとすることか……頭蓋骨を砕かれるとき装甲車の上から汚れた川へ落下していくとき、催涙ガスに傷ついた眼にレモンの切片をあてているときのヴィジョンと留置所や病室で持続するヴィジョンとを遠い夢としてでなく結合するのはだれか。

私たちは羽田の（服装）に異和感をもつとすれば、その異和感自体が一つの服装なのであり、もしもデモ隊が、ある打撃を（敵）に与える場合、逆に同量だけ自己の幻想領域にも傷を与えてしまうことに気づくべきである。この感覚を、さまざま（羽田）で持続し組織化し、ふと気がついてみれば、かれらとちがった服装をしていたというやり方では羽田で演じられたドラマの内部をいかみみることも引きうけ発展させることもできはしない。（雨）は、まだ降り続けている。

予感のようにしかいえないけれども、有効性とか大衆の共感を獲得するという次元をはるかに越えたところで、いままでの行動形態（およびその根底にある思想）に対する評価（私による評価を含めて）の転倒が生じるかもしれない。その場合も、やったこと、やろうとしたことを公然と対象化して、転倒の振幅と、個の情念から世界の構造に至る領域をできるだけ深く正確に対応させながら、転倒させていくことが必要であろう。

より民主的な、長期的な展望の中でスクラムをくんで政策転換の闘争をしたらどうか、という声が、デモを（見物）していた人々の中から生じるのはこれもまた当然であるとはいえ、かれらが前述の内部のドラマから遠いこと、（民主主義）とか（デモ）とか（政策）とかのことばを一度も根底から疑っていないことを示している。かれらの論理を逆行させてみれば、安保闘争における国会突入を妨害した日共と

支配階級が、第一次より第二次の羽田闘争の方が悪質であると評価した背後には、参加人員、労働者の比重装裂備が上昇したこと他に、圧倒的な非難のキャンペーン（死因のデッチ上げを頂点とする）にもかかわらず、自らの時間秩序へ挑戦するものたちの時間把握の可能性が深化したことへの恐怖があったにちがいない。

ばらばらに切り離された個々の幻想過程が、国家の幻想過程を直接にくつがえすことはできない。ここで個々の時間＝空間へ集団的に現われて国家意志と対立する組織の問題が浮び上ってくる。この場合、既成左翼は国家体制の補完物に転化してしまっていること、更に羽田への参加者が、羽田へ行くという行動形態において孤立しているだけでなく、どの組織をえらぶかという参加の仕方によっても孤立していることを見落してはならない。三派、革マル、反戦委……という風なレッテルはりの発音によっては、せいぜい動員数や指導部の方針の比較を既成の政治意識によっておこなうことができるだけであろう。どのような闘争も、あいまいさをかかえこんだまま最前線と敵と直面する下部大衆の情念と力量に支えられているのである。

ただ誤解されてならないのは、下部大衆の眼でとらえた闘争は（つねに）正しいとはいえないことである。指導部は確かに逃げ道をつくってしまう関係へ追いやられているし、多くの場合当然のようにそうしてきた。しかし、その逃げ道を補完するかたちで下部大衆にも別の逃げ道が存在しうるのであって、この二つの（逃げ道）は、メヴィウ

スの環のようにつながっているのではないかと私は想像している。安保闘争を下部大衆として通過した私は、この「環」をうちくごきたい衝動を感じている。

そのために、いま、現場にいる指導部や下部大衆から、できるだけ遠ざかってみよう。

第一次羽田闘争において、デモ隊が三つの橋から空港への突入を試みたのは、決して戦術的な方針の結果ではない。橋と橋は相互に遠い夢であったのだ。羽田闘争をへて潜在していた分派闘争が表面化したことは、それぞれの組織の羽田へのかかわり方が深かったこと、抗争史の軸にかかわるほど重要であったことを示しているが、私は対立の構造を現象的にみようとすると代りに、ここでも羽田闘争や諸組織の抗争史にとつての遠い夢であるハンガリア「革命」をみようとする。

革命に「」をつけたのは（この論文において「」をつけた全体的なことばに私は意味の転倒を意図している）、革命と判断する基準そのものが、羽田闘争をふくむ反体制運動の評価軸の位相を揺り動かすからであり、同時に、羽田へ出かけた諸組織は、ハンガリア「革命」を、どのように位置づけるかによって分裂してきているからである。そのことばを明確に発音するかどうかは別に重要ではなく、むしろ私は、そのことばをなしてそれをこえる状況へ介入しうらば、その方がよいとさえ考える。ちょうど羽田ということばをなしてそれをこえる状況へ介入しうらばよいように。

いまは、羽田についてかく私に、やむをえず介入してくるハンガリア「革命」を個人的な体験からかいてみよう。

一九五六年（スターリン批判の年）の秋、砂川基地闘争で、はじめ従って、安保闘争は国際共産主義運動なるもの影響下にはなく、それをのりこえようとする方向でおこなわれた。ハンガリア「革命」とついに発音せず、「動乱」とか「事件」ということばにいいかえて（敗戦を終戦と、安保闘争を安保騒動といいかえる論理と比較せよ）そのことばすら、殆んど口にしなかった既成左翼の指導者は、安保闘争で擬制の終焉を公開した。その後の「反革命」的役割は詳述するまでもない。本当に闘争しようとする人なら知り抜いているはずだから。私は、このハンガリア「革命」に対する責任を戦争（後）責任と（垂直に）岐立しうらものと考える。そして、日本の戦後史を安保だけで区分するのは片手落ちであり、「安保」→「ハンガリア」の軸で再構成する必要があると思う。

これは個人の思想的な変化や日本の戦後史についてばかりでなく、一九五六年以前を含めた現代の歴史と思想総体の再検討をうながす。何度もうくりかえさなければならぬが、これらの転倒はハンガリア「革命」という固有の事件を軸にしてのみおこなうのではなく、「革命」と評価するに至る過程の方法自体を適用することによっておこなうのである。「転倒」の契機を与えた「事実」が、主体の構想力によってばかりではなく、むしろ、社会的生命力の増大と矛盾のために生じており、構想力が、それをあとから「追いかけている」という「恥かしさ」を内包しつつ。ハンガリア「革命」を暦と等速度に忘却し、革命運動の問題を反日共の枠内でのみ論じる諸党派は、さまざまに闘争の「成果」をなしくずしに、非主体的に利用することしかできず、すでに状況から訣別されている。

物理的な国家権力にふれた私は、その直後、社会主義圏の一角、ハンガリアで人民の内部で策動していた帝国主義者が反乱し、共産政権の代りに労働者評議会を樹立したというニュースを聞いた。私のまぶたには、襲いかかってくる機動隊と、反乱した陰謀者の姿が、二重うつしにされた。なぜなら、ソ連、中国を完全な社会主義（国家）「（平和）」のとりで、と信じていた私にとって、反乱者はすべて最悪の敵にみえたのである。だから、砂川で、日共の最左翼として最も戦闘的であった全学連が、ハンガリアの反乱を鎮圧したソ連軍を最も熱烈に支持したのは偶然ではない。その後、伝えられる断片的なニュースによって、反乱者にも正当な理由があるとおぼろげに感じて、その動揺をおさえ、忘れ去らうと努力した。目前のさまざまな闘争に没入することによって。

ところが、日共の方針に沿って闘争すればするほど、全学連や労働者の運動はいきづまり、マルクス主義の古典を再検討すればするほど、現在の社会主義国のやり方が奇妙にみえてきた。この「（分らなさ）」を異和的に内包したままジグザグの模索をしていた学生、労働者は、「幸運にも」、日本においてスターリン主義批判を何かのかたちで続けていた少数の理論家、思想家にふれあい、すこしずつ、しかし、確実に既成の左翼から離れていった。そして、すべてを疑う態度を持し、意識が転倒するほど現実過程へむかって跳躍したとき、既成の組織や現代史への評価軸が転倒され、ふと気付いてみると、ハンガリア「革命」ということばを発音していたのである。（私個人については、このように見事な転倒がおこなわれたわけではない。一周期おくれうけられた「軽さ」を感じている。）

この転倒が組織的に前面へ出てきたのは安保闘争以前のことであり、かつてのハンガリア「革命」への「参加者」が、現在どのような状況にあるか直接に知ることはできない。しかし少くとも日本において、参加せず、むしろ最大の非難を浴びせた人々たちの中から、「革命」の意味を継承し発展させようとする組織が現われたということ（それをトロツキズムとよぶのは自らがスターリンニズムの徒であることを告白するに等しい）、そして帝国主義、独占資本との闘争においても最も根底的なとりくみをしつつあることは、私たちに怖い暗示を与える。参加は、そのまま意義の継承とならない。逆に直接に体験しなくても責任は残る。ある状況の突端がふれようとしてふれえない領域へ持続的にかかわって、状況の転換と内部ヴィジョンの転換を一致させつつ転換の受動態を能動態にかえて、次の局面へ実現していくことこそが「参加」の意味であり、それは羽田闘争についてもその他の無限に微少な価値転換についてもいえるのだ。ハンガリア「革命」後の課題を現実過程に適用する困難さが、羽田へ参加した複数の組織に象徴されている。この分裂のスキマから現代史がみえるといってもよい位だ。しかし、そのようにしてスキマを「みる」位相が、すでに、もう一つの裂け目をつくってしまったという感覚を持ちこたえて新しい裂け目のむこう側へ入らうと私は思っている。

分派闘争は、それなりに状況の尖端にふれる場で生じているのであるから、妥協や休戦によって中断されるべきでないし、またされえない。自己と組織の行動をつねに現実の中で検証しながら「（あいまいさ）」（例。分裂を必要とした要因が、いつのまにか先験的な「事実」へ下降する）を切りすてず、自己と他者の幻想過程をふくんだ分裂闘争をやり抜き、その極限で、現存する組織をこえる「組織」を自己と結合する方法はないだろうか。少くとも、現存する組織を前提として、その

中からどれをえらぶか、というやりかたは、問題が可視的になってから闘争方針をきめるやりかたと同様に受動的であり、情況の枠を突破できないだろう。私は、すでに六甲（一試行）に連載で暗示しておいた〈仮装組織論〉を、別の機会に新しい未知の段階で発展させていきたい。

一切の組織論は、つねに自己否定の契機を内包しているべきだと私は考える。そのための必要条件の一つとして、さまざまの〈政治〉用語を標識にして自他を区別せずに、その用語が発生する根拠、流通する範囲、変化する条件を〈闘争〉の中でとらえなおす必要がある。

ここで、ハンガリア〈革命〉や〈羽田〉闘争を論じる場合に〈必要〉な例として〈スターリニズム〉ということばにふれておこう。スターリニズムとは何か。この問いへの答は多岐にわたる。

スターリン個人の悪の体系、異端を包括しえない硬直した正統派の発想形式。帝国主義に包圍されたソ連がとった二国社会主義などの政策。民族主義的偏向と二段階戦術。革命運動における矛盾を本質といいくるめる官僚主義。議会主義とセクト主義のジグザグ。大衆啓蒙主義の組織論がたどりつく形態。ファシズムの双生児。ルネサンス以来の人間主義の袋小路……………。

これらの答えは、それぞれの解答者の現代へのかかりかたを示しており、それだけで情況論の枠がきまってくるほどである。〈私〉は、どのように答えればよいだろうか。いまひらめくものを列挙すると……スターリニズムということばへの意識は反体制運動の本質へのかかり方と対応した深さとひろがりをもつ。

そのことばをめぐる混乱、解釈の渦巻きをなるべく卑小な実体へ収束させようとする力の総体が、スターリニズムの概念が運動する空間である。時間としては現実、政治、実践の先験的優位を疑わない力と

〈羽田闘争〉は、この方向から総括すれば、全く未踏の情況を切り開く条件と、表層的な現実過程へ収束していく条件の双方をもっている。うまれている可能性と、応用されている可能性の落差を最大に湾曲させている力が〈どこかに〉あるにちがいない。

いま、ふと気付いたのだが、この〈総括〉は、私の〈闘争〉としての叙述にも、〈遠い夢〉の軸を媒介にしてあてはまる。このようにかいてきたことが一つの原罪なのだ。しかし、この〈原罪〉を逆転して次のような試みが可能ではないか。

即ち、〈羽田闘争〉や〈私の表現〉と共通の限界をもつ、さまざまな〈情況〉を、潜在する全ての時間—空間から発見し、いや創りだしていくこと。そして〈—〉が占拠する領域を、可能な限り〈遠い夢〉へ拡大していく、この〈世界〉を〈占拠〉すること。この進みかたを阻止する力と持続的に対決すること。そのとき、あるいは無数の〈—〉における共通の限界ものりこえられるのではないか。誤りを怖れずにいえば、この方向が私の意図や共有の場へもたらすべき目標から湾曲しているとしても、その湾曲した領域の極限に私の本当の〈敵〉（共同性や非共同性の問題を含めて）と対決する戦場が、そして〈遠い夢〉のようにこちらの模索する手と対応して〈敵〉を包圍する〈手〉がみえてくるのである。

いつ、どこで、どのようにして戦闘を開始するか—それをきめるのは〈私〉であり、それを要求しているのは〈—〉の声である。この声が、そのままのかたちで〈私〉に理解されないとしても、それを自明の条件として私は更に歩き続けなければならない。

して作用し、労働者大衆の自立過程を阻止する。
スターリニズムは、他者や固有の個人、歴史の属性ではなく、自己や自己の属する組織に絶えず発生しうる前述の傾向としてのみ語りうる。

このように語りうるためには少くとも現実的には〈反スターリニズム〉に仮装していく過程が要求され、政治的には、二大陣営という世界像を粉砕しつつ資本制社会の矛盾と擬制の社会主義をめざす運動の矛盾に対して同時にたたかう課題をばなすことはできない。（次第に自分のことばでなくなっていく不快さ—その手ざわりは私の内部のスターリニズムを暗示するのか。しかし何でも〈スターリニズム〉の責任に帰するのは一つの怠惰である。）

私にとって自然な位相で羽田闘争をうけとめようとしながら、はじめの意図よりもずいぶん遠くまで進んでしまったようだ。それは私の恣意からというより、羽田闘争と私の位相が強制したのだ。

さまざまなことば、とくに〈夢い遠〉ということばを用いることは、羽田闘争と私の関係において不可欠の条件ではない。それは、〈羽田〉闘争にヘルメットや角材を用いることが不可欠の条件ではないのに似ている。しかし、そのことばや装備を用いないにせよ、それらを生みだす根源への突入は一瞬も中断されてはならない。乱用されている〈遠い夢〉を相乗化していこう。

私たちが〈羽田〉闘争にかかわるとき、遠くで一瞬の呼吸のような〈未完了の完了〉につきうごかされるときを結合し対等に岐立せしめよ。そのとき相互の関係は支え合い逆転の運動を開始するのである。このささやきが正しいという保証はない。これ以外のやり方も無限にありうる。だからこそ、私は、この〈ささやき〉をとらえる。

言葉が言葉である以上それはある程度の他者との伝達性を持っている。僕はこれがいやだ。（山崎君のノートから）

註記

○ この論文は一九六七年十一月下旬にかきはじめ、十二月末までに私の勤務先である神戸大学の雑誌「展望」に発表される予定であったが、羽田闘争と遠い夢のようにかかわりあういろいろな事情のために編集部や他の執筆者の方針が混乱し、予定通りの期日、内容による発行が不可能になってしまった。これを知った北川透氏の熱心なすすめにより「あんかるわ」に転載しようと決意したけれども、その決意に〈—〉をつけておく責任も感じるもので、ここに註をつけておきたい。

○ はじめの予想では、一九六七年に「展望」に発表され、そのあとで第三の〈羽田闘争〉と称される佐世保の闘争がやってくるはずであったのに、時間のくいちがいを思い知らされた。もちろん私は、第三だけでなく第四、第五、第六……………第n番目の〈羽田闘争〉がやってこようとも、ここにかいている方向（矛盾や未熟さは別として）を變更しないだろうが、この時間のくいちがいが、原稿の位相と活字の位相のズレがみえてきたことは事実である。

○ このズレは同時に、私が、六甲空間の枠内で統者を想定していた

ことを別の眼でみなおす契機を与えてくれた。私は〈国家〉公務員ではあるけれども、それを最大限に逆用しうる場としてのみ私の職業をとらえている。表面上、私は最も無能で、あまいな教師として評価されているだろうが、ほんとうの姿は、この論文からかいまみてもらう他ない。

○ それにしても、私が北川氏の好意によってせよ「あんかるわ」に転載してもらうことは、人のフンドシですもうをとる苦痛を与える。「試行」に寄稿していることについても同じである。これらの自立誌が存在しない状況で、私が一個の無力な大衆として何かをかくとすれば、発表の機会はもっと縮小され、何かをかく気迫も減ったことであろう。だから私は〈北川〉氏の好意に感謝しながらも、そのとき感じる苦痛を失わずにいたい。

○ この論文を一応かき終ってから「あんかるわ」へ送るまでの期間にうまれた、いくつかの問題を私への暗示として上げておくと……

a この論文が、何かの遠い夢であるとすれば、その反世界性や、叙述の屈折（全体の構成についても、個々のことばについても）がどこからくるのか。

b 対応的な発想が、ある力によって閉じられた枠内での模索（それ自体は否定されるべきでなく、むしろ応用されねばならない）私は考えるが）であることを対象化したい。

c 記号へは、一個もつかいたくなかったのだが、同時につけられるものなら、全ての〈ことば〉につけてみたかった。この排反的なジグザグ・デモは、どこへ行きつくか。

d

このような分らなさをかかえこんだまま、いま私はこの論文を〈この論文〉のむこう側へさしだす。

私の自主講座運動

詩というものが無数の表現方法をとるように、闘争にも無数の方法があると思いますから、私も自分の軌跡について、ひとまず報告しておきたいと思います。

ここへやってきたのは、さきほど菅谷君もいったように、たんに報告するとか、講演をするためではありません。菅谷君はもともと、神戸大学で一諸にドイツ語を教えていた仲間です。数年前から我々をとりまく状況をなんとかして突破しなければならぬと考え、そのために、我々は様々な目にみえない闘争をすでに開始していたのです。いま、場所的に離れてはいるけれども、私のやっている自主講座運動と菅谷君のやっている解放学校とがいわばへへのように状況を包囲する形で現実化しようとしています。そういう時にあって、私自身も六十年代に自分がやってきた事を総括する意味をこめて、今日、ここへやってきたわけです。

私（たち）の運動の特徴を六つの項目にまとめてみました。

一番目は、二月二日に私が出した「情況への発言」に示されていますけれども、大学闘争における表現の階級性粉砕を主要な根拠にしています。例えば、権力を持っている者の表現と持たない者との表現とは、文字として、あるいは声として同じであっても、それが現実を持つ意味については全く違ってきます。そして闘争の契機自体よりも、闘争過程において各人が表現にたいして持っている責任を追究する形で、闘争が持続しているわけです。

具体的には、この問題について全ての人が私に対してこたえるまで、大学の秩序に役立つ労働を放棄するという形で授業や試験やその他の旧秩序維持の労働を拒否しているわけですが、同時に、単純な拒否でなく、自分の出来る範囲で攻撃的に粉砕してゆこうと考えました。大学によってそれぞれ条件は違うと思うけれども、我々の場合には、自主講座運動がいわゆる全共闘運動を包囲している形で展開されており、また単に闘争者がやっている運動というよりは、この運動にかかわる人間がたとえ我々が敵対する場合でも、自主講座運動に無意識的にも参加しているのだという確認を前提としています。たとえば、我々の自主講座に大学当局や民青や、さらには機動隊がやってくる場合も、彼らを平等な参加者とみなして運動を続行してきました。二番目は、創造（想像）的なバリケードです。全国的に目に見えるバリケードが撤去されている段階において、本当のバリケードの意味

はこれから、追求され始めるであろうと思います。そのための条件として、目に見えるバリケードの中に何を、いかに形成してきたかということがあります。神戸大学の場合でいうと、大学措置法成立後、もっとも早くバリケードが解除されましたけれども、バリケード形成以前から一貫して自主講座運動を続けていたために、解除されたということがそれ程打撃にならなかったのです。そればかりか、最後までバリケードで徹底的に活動したのは自主講座運動であったし、またその後の授業再開、試験強行にたいしてもっとも戦闘的に反撃したのは、我々の運動でした。

我々が活動する空間がそのままバリケードになってしまふ。例えば、この教室を授業で使うとしますと、ここを占拠して、自分達の問題提起をおこなう。別にロッカーとか、机で封鎖しなくても、我々の存在がそのままバリケードに転化していく。しかも、移動可能なわけですから、いたるところに出没して、ゲリラ的にバリケードを運動させていくわけです。これは不可視の領域へまで拡大していくべきだと思います。

三番目は、我々の自主講座運動のテーマはどういうものか、ということ。これは明確に定義をするのは不可能だと思ふのです。むしろ、不可能である様な運動を目ざしているのです。まず、明確な規定をして、これこれに近づこうという風な運動論はもはや破産したと思います。我々が創り出しうる最も深い状況に我々自身が存在すること、そのことによって引き寄せられて来る一切のテーマが自主講座運動のテーマであるし、その時やって来る全ての人間が自主講座運動の参加者になるわけです。だから、毎日、過渡的なテーマはかかげておくけれども、そのテーマどおりに進行するかどうかは分からないわけです。

で大学闘争に参加しているといえるに過ぎないのであって、決して私は、大学闘争が正しいからやっているのでもなければ、学生諸君が正しいから支持するのでもないのです。そのような方向性を持続化することが、ある意味では大学闘争にもなり、それをこえていくという関係だろうと思います。

五番目は、これは一年におよぶ闘争過程でつくづく感じたのですけれども、報復とはなにか、復讐とはなにかという問題です。目の前でたくさん全共闘の学生諸君が血を流す。これはもちろん本当に許せないことです。しかし同時に、それと一見関係ない場面でどこかに会議をしている、あるいは仮病を使って家で寝ている、あるいは海外に留学と称して逃亡している、そういう一見流血と関係のない、政治性とも関係のないような場にいる人間の存在形態が最終的に血をあふれさせざるにすぎないのです。ですから、私自身の感じる憎悪は、単に流された血を見て感じるのではなく、それを生みだした諸関係総体に、皆の目が向けられないということに対する憎悪なのです。単純に、なぐられたからなぐるとか、殺されたから殺す、そういう関係だけでは決して本当の報復は出来ないのです。むしろ、それらと一見無関係な場所で行なわれている惨劇に目を向けなければ、決して真の報復は出来ないだろうと思うのです。まさにそういう関係が大学という空間で最も象徴的な形で展開されているにすぎないのです。大学という空間はこの社会において、もっとも幻想的な空間であろうと思います。たとえば工場労働者が労働を拒否するといえば、すぐ解雇処分になるでしょう。ところが、大学の場合は現に私自身がそうであるように一年近くたって、まだ処分するかどうかでもめている。それは普通のブルジョア社会の空間で行なわれている現象よりも非常にゆっくりと、

テーマをかけることによって、そのまわりに変化が起ります。そして様々な力関係でこの部屋ならこの部屋に問題が殺倒してきます。反論や撤去命令や機動隊導入など。その様な変化がそれ自身、持続的体系的な自主講座のテーマに合流するのです。そこにはじめて、学ぶことの怖しさが何重にも予感されてきます。いまのところ初期にくらべて、目に見える意識的な参加者はおそらくここにおられる人数よりも少ない場合が多いと思います。しかし、目に見える参加者が多いとか少ないとかいうことをそれ程、気にしないで良いと思うのです。少なくとも二人いれば、永續出来ると言ふ確信がありますから。

四番目は、いわゆる全共闘運動が崩壊した、ないしは危機的状況にあるといわれています。これは確かにそういう面もあるとは思いますが、けれども、私は全共闘運動という概念そのものを飛躍させる時期に来ている、飛躍させる人にとっては決して崩壊してはいないし、今やまさに始まろうとしている段階だと思ふます。全共闘運動という概念は、自分にとって必然的な課題と、状況にとって必然的な課題とを対等の条件で共闘させるということではないでしょうか。従って、何かを粉砕するとか、打倒するとかはそれだけでは、スローガンになり得ないのです。必ず、それと対等な自分のスローガン、自分だけの言葉によるスローガン、それがうまく表現できるかどうかは別として、そういう自分のスローガンを対等に結合させない限り、決して或るスローガンを荷いきることは出来ないし、まして命をかけることは出来ないだろうと思います。

私にとっては、それは、ご承知の方もあるかと思ふすけれども、いくつかの作品、たとえば、〈包圍〉とか、〈六甲〉とか、そういういた作品を本当に時々空間の中に生かしていく、そういう作業が別の面スローモーションのフィルムを見るように、きわめて緩慢に展開されることを示しています。ある意味では恵まれていてもいえませすけれども、別の意味でいうならば、人間の幻想性の運動が最も詳細に歴史的な問題をえぐり出しつつ展開されてくるのです。つまり、人間にとって知識とはなにか、文化とはなにか、そういった一切の問いが個々の階級的存在に対して、大学闘争を契機として問われているのです。だから、それをただ単に単純に階級闘争の前段階であるとか、あるいは安保闘争と結合すべき課題であるという水準で捉えるならば、決して大学闘争は捉えきれないと思ふます。大学という言葉に、記号へをつけて〈階級闘争がもっとも幻想的に展開される空間〉という風によみかえない限り、決して大学闘争は捉えきれないと思ふます。ですから、私自身は大学に居るときは大学でその問題を追求しているにすぎないのです。家庭にしよう、工場にしよう、どこにしよう、幻想性を媒介にした問題は我々すべてにとって既成の概念や行動では捉えきれない危機的な状態に達していると思ふますから、大学闘争の課題は実は全ての人間が現在つき当っている課題を、最も拡大して、最も深刻にえぐり出しているにすぎないのです。そういう特殊な条件を徹底的にとらえ直さなければ、大学闘争の真の生命力をすててしまふことになると思ふます。

報復ということから少し離れたかもしれませんが、報復は最終的には一行の詩を書かせることではないかと或るとき、ふっと思つたのです。相手をなぐることもなければ、殺すことでもない。或る状況に原罪性をもってかかわっている全ての人達が一行の詩をかかざるを得ない様な現実的条件を作りだす、それが本当の報復になるであろうと思ふます。だから団交にせよ、ゲバルトにせよ、それらは一行のまだ表現

されない詩へ向かつての行為であるし、あらねばならないのです。そうでないようなゲバルトはおそらく自分自身にはね返って、マイナスの面しかもたないだろうと思います。

六番目の問題は、一番目の問題とかかわってくるわけですが、我々が打倒しなければならぬのは、決して体制だけではないし、機構だけではないということです。それと同時に、我々自身の表現の根拠、我々自身が表現するときの根拠をも含めて変革しないかぎり、何一つ始まらないだろうし、それは古い形の階級闘争に還元されてしまうと、思います。いいかえると、闘争過程において自分がどのような言葉をつくり出したか、どのような言葉にひかれて、それをになってきたかという問題です。常に人の言葉で戦い、人の言葉で死ぬということは、本当に戦うこと、死ぬことになり得ないと思います。ですから、先程もいいましたように、情況によって最も必然的なスローガンと同時に、自分にとって最も必然的なスローガンを作り出さないかぎり、本当に戦えないし、戦いを永続化できないでしょう。ということは、自分をそのように表現させる世界の根拠を、自分が叫び声をたてざるを得ない根拠というものを徹底的に追求することであって、それは政治という領域をはるかに超えた行為だと思ふのです。そして、それこそが真の政治性のはじまりでしょう。

私がいや応なしにとらえ、同時につきうごかされているいくつかのテーマのうち三つのものについて語っておきます。

最初のテーマは表現の階級性という問題です。一つの文章、一つの言葉があると、それがどこで表現されたかによって、全く意味を変えてしまいます。たとえば、教授会の中でAという発言がなされ、学生諸君の集会でAという発言がなされるとします。言葉としてはまかりケードが解除されてもなお、運動が存続しうるとすれば、そのような不可視のバリケードをとらえた度合だけ、運動は存続すると思うのです。ですから、封鎖解除された瞬間にがっかりするならば、恥じるべきだと思います。むしろその瞬間から自分にとってのバリケードの意味が問われ始める。自分にとっての闘争が開始されるのです。それをどこまで荷って続けるかということは未踏の状況における一人一人の問題であるけれども、それを荷って行けないならば、実は今まで何も戦って来なかったのだということになります。我々の模索の一つの応用例としていうならば、これぐらいの教室を占拠し、六ヶ月以上、毎日毎日、日曜日も含めて、自主講座運動を展開して来たし、ゲリラ的に様々な教室、或る場合には街頭や風景に、出没して、体制側にとっては全く手のつけられないような存在になっているわけですが、我々はその事を理想的な形だと決めているわけではありません。むしろ、自分でマンガ的な行為だと思ひ、笑いながらやっているのです。闘争には笑いが不可欠な要素だろうと思ひ、最もよく笑った者が大学闘争の勝利者ではないかと、此頃、思ふのです。決して、深刻な、不気嫌な顔をしてやるものではなくて、いわば大学祭を永続化しうる力量だけが闘争を支えていくのだと思ひます。

三番目のテーマというのは、連続性の問題です。これは具体的には二月三日、神戸大学の教授会が私の処分を検討しはじめた日、我々自主講座実行委員会が会議室へ突入し、一人一人を徹底的に追求しました。それ以後、教授会は開かれていませんが、いつ学内で、機動隊に守られて、私の処分を強行するかわからないのです。したがって、その時間も、場所も、議題も不確定になった教授会というものにたいして、我々は常に準備してはなりません。つまり、今までは闘

ったく同じであるにもかかわらず、それが現実過程において持つ意味は決定的にちがいます。それは階級闘争の問題であると同時に、言葉の本質にかかわる問題でもあるわけです。このことは沈黙についても言えます。教授会の中で決して発言しない、あるいは団交で追求されても決して発言しない、責任追求されても決して発言しない、そのような沈黙が問題である場合、意味はゼロかというよりはむしろそうではないわけですね。沈黙もそれなりの階級性をおびてしまうのです。これは階級性という言葉ではおおいつくせない、むしろ原罪性という言葉が問題だろうと思ふのですが、そういう問題が本質的に提起されたのは大学闘争においてだろうと思ひ、この点をはっきりさせておかないと、我々の語る言葉は全て死んでしまうと思ひます。

二番目は空間性に関する問題ですが、これは闘争の過程にしたがって多少、変化してきます。最初の段階では、権力を持たない者は空間を持つことができるという形で提起しました。そういうテーゼによって、我々のバリケードが開始されました。その次の段階は、バリケード空間とはなにか、つまりバリケードという概念をどこまで飛躍させるのかという問いです。物理的封鎖がバリケードそのものではない。むしろ、我々の置かれた本質的な断絶の一つの断面が封鎖であるにすぎない。我々がこんなにも断絶していたのだ、こんなにも階級性の中に置かれて来たのだ、ということの影にすぎないと思ふのです。とすれば、バリケードというものは決して大学だけに存在するものでなくて、家庭の中にもあるし、人間関係のなかにもあるし、国家という国境をもつバリケードもあるし、() という記号としてもあるし、その他無数に存在しうるのである。つまり、無数に(バリケード)が存在しうることを明らかにしたのが、目に見えるバリケードにすぎない。

争というものには日付があつたわけですが、何月何日には、これこれがあるから結集せよ、闘争方針もそれから逆規定されて、こうしようという形で、闘争が組まれました。しかし、もはやそういう段階は終わったと思ふのです。不確定な連続闘争の時代が始まったのです。これは大学闘争に限らず、一切の政治闘争、階級闘争についてもそうだけれども、日付の闘争というものはもはや終わったと思ひます。日付をこえた連続闘争に真の意味で武装して行かないかぎり、敗北は決定的でしょう。この場合、武装というのは単に軍事的な武装ではなく、闘争の本質をいかに引き出し得るか、闘争をいかに飛躍させ得るか、という暴力的な問いかけです。だから、今連続性を日付を超えるという表現で語つたけれども、それは同時に今までの闘争の枠をはみだす、最終的には闘争という概念をすらはみだすという意味での連続性をさしています。大学闘争は決して大学だけに止まるものでなく、全階級的な問題にひろがっていくだろうし、個人の生活の二十四時間をおおっていきだろ。決して、バリケードに入ったときとか、デモに行ったときだけが闘争ではなく、二十四時間をおおいつくす連続闘争になるだろうと思ひます。そうでなく、あるときには闘争し、あるときには眠る。その眠りは夢の組織論から切り離された眠りであつてはならないと思ひます。なお、ここでいう夢は、睡眠というよりは、私の表現でいうと、(状況から最も遠い夢)を志向しているのです。三つのテーマ、即ち、階級性、空間性、連続性について、舌たらずにしゃべりましたが、三つとも全部(性)がついており、なにかセックスに関係があるかもしれないなあと思ひたりするのですが(笑)、それは今後の追求課題の一つとして残しておきます。

第Ⅲ部

遠 北 循 六 包
嵐 海 環 甲 圍

6

時計台の見えるこの教室には、西側にしか窓がないので午前中は暗い。ゼミナールは続いた。

「研究の方法論として、社会科学の立場をどうと、美中心の立場をどうと一向にかまいません。しかし、しいていえば、前者は量に、後者は質に問題をしぼることになるでしょう」老教授がそういつて眼鏡ごしに見渡すと、幾人かの学生たちは、うやうやしくうなずいた。前川は（クソッ／＼彫像たちめ）と思った。だから、「ロマンチズム」に関する討論が再開した時、背筋にやや寒いものを感じながらも、次のように発言した。

「文学の研究や創造を、質と分量とかで区別するのはおかしいのではないのでしょうか。根本的な条件は、現実や表現に対する責任のとりかたであると思います」

「では君は、たとえば……君たちの推奨する社会主義リアリズムにも賛成しないのですか？」

「勿論です」と前川は答えながらも、室内の異和感を呼吸していた。（こいつらに、これ以上説明しても分るはずはない）沈黙して天井をみつめた彼は歴代の教授たちの肖像画に目をやり、昨夜のソヴェト大使館での試写会のことを思い出していた。彼は、ふとした機会から、招待状をもらったのであった。（俺がまだ黨員だと思っている……）

彼が入っていった地下の小会場には、玉突き台があり、その前には白い幕がたれていた。すでにフィルムは動き始めていて、たどたどしいロシア人の日本語が後方から聞えた。

「彼は、この工場の党書記です。（入口から二人の労働者が、タップ・ダンスをしながら入ってくる……君たち、気でも狂ったか（二人は止めない）。」結末は、労働者の新しい生活感情を理解する別の人物を書記に選出することであった。二人の労働者は、それぞれ恋人と幸福な生活に入る。

電灯がつくと、部屋の四隅に、四枚の肖像画のかけてあることに気がついた。マルクス、レーニン、フルシチョフ、ミコヤン。

三木は、彼が現在属している唯一の会合に出席するため、ベッドから下りて靴をはこうとしていた。靴ひもを結ぶためにかがむと、頭の左方に踵でも置かれたような圧迫感を受けた。（一年前の負傷は、まだ直り切っていない。これからも直るかどうかわからない）

「帰りは何時ですか？」と看護婦がきく。

「そう、友だちの家に寄れば夕方までかかるな」病院の玄関にある時計は十時の近くで二本の針を重ねていた。

ゆっくりと歩いて都電の通りまで出た時、目の前の停留所をバスが通り過ぎた。いつもならば次のバスを辛抱よく待つのだが、三木は、この日は魔でもさしたのか、次のバス停まで走りたい衝動を感じた。バスに復讐するために。彼は、ワッショイ、ワッショイと口ばしりながら坂をかけ登って行った。その間に、少女歌手は三曲も歌い終わっている。次のバス停の標識が見え始めた時、うなり声と共に次のバスが追い抜いた。

「待ってくれ！」と彼は叫んだが、車掌は乗降客がないものとみなしたのであろう、バスは殆どスピードを落さずに走り去った。

三木は、突然（待つことは最大の冒険だ）と思い、吹き出す汗をぬぐった。シャツもすっかり濡って、身体全体がかゆい。頭が又もや痛み始めて、重心をとるのがむずかしかった。（待つことは最大の冒険だ）彼は、今日の会議で新しい動議を提出する決心をした。

十時すぎの大学の地下食堂は、まだ朝の雰囲気を残している。青山が納豆とみそ汁の食事をすませた牛乳売り場へ歩いて行くと、中島に出合った。

「オス」（納豆のねばりが舌に残っている）

「オス」

「最近どうしている？」

「え？」

「何して暮している？」

「……旧約聖書を少し読んでいます」

中島は傍のいすに腰を下しながら、いすの硬さを意識していた。彼は毎晩おそくまで、自宅のソファに寝ころんでぼんやりしているのである。そのソファには、以前は全学連の幹部たちが宿泊していたこともあった。

「今日、出るかい？」

「え？」

「被告団会議さ」

「うん……しかし、ファイトないな」中島は眼を閉じて答えた。

「俺だつてないけどさ、ともかく弁護士との打ち合せもあるんだし、出ようよ」

「青山。何もしたくない時期、いや何もできない時期があるってことを考えてみたことはないかい。裁判闘争というが、向うのペースに引きこまれるだけだしな」

「桎梏をバリケードにしなければ駄目さ。睡眠の季節でもあるまい」

中島は、ピクリと肩をふるわせたようだった。相変らず、食器を乱暴に片付ける音や、調理場からのおいが立ちこめている。

「俺は講義に出るから……」中島は立ち上り、少し笑顔をつくると歩み去った。

「革命運動をやるのにゲルの保障など不要だという奴は、資本論をよみ返せばいいんだ。中共から国民会議に送られた五百万円を日共が横取りしたとさわぐ前に、かれらのフンダクリ精神をみならわなくちゃ。安保で日共は黨員を倍増した。つまり資金源を倍増したことになるんだ」

北村は、そういつて興奮したかたい表情で煙草をすった。弁護士事務所の一階は、十数人の被告たちで一杯になっている。もう一人が口を開いた。

「君が財政で苦しんでいることや、雑務がある場合には闘争より神経を使うものだってことも分るさ。しかし、その肉体性ばかり追って行けば、スターリニストの組織論になってしまふぜ」

「全然見当ちがいだ。我々の弁護士にしたって……」北村はしゃべるのを止めた。階段を上って来た弁護士が、次の公判の予定を話した。事務的な打ち合せの後で彼は語りつづけた。

「現在までの公判の過程でも明らかのように、検察側の証人たちは、学生の行動に関しては詳細な陳述をしているにもかかわらず、国会南通用門の衝突における警官の暴行には一切口を閉ざしております。これはフィルム・カットにも示されている一貫した態度であり、不当な起訴事実と共に我々に怒りを感じさせるものです。第十三回公判の物証調べの際に裁判所の中庭につき上げられていた石塊、靴、旗などを想起していただきたい。安保闘争はまだ終っておらず、これからも諸君の影のよう

について行くでしょう。弁護士としても、正当防衛と正当行為の線を貫徹するために努力したいと思えます」

「もうすぐ六・一五の一周年だなあ」という声が数人の口からもれた。

「闘争を感傷的にふりかえることは止めようじゃないか」と前川がしゃべり出した。

「安保闘争の結果は共産同とスターリニズムの崩壊だったんだ。ブルジョアジーは益々繁栄の一途をたどっているぜ。裁判の時だけ政治活動している気ているのはナンセンスだと思う。政防法は強行突破されそうなんだ」

「反対だノ。バスに乗りおくれることを恐れていたら全てを失ってしまう」と三木は今朝の出来事を思い出して叫んだ。

「日共、構造改革派、革共同などは、みんな既成の三流バスに過ぎない。まず我々自身を奈落の底まで突き落せ。三流から四流、五流と下向することが超一流への道なんだ。そうだ、俺はこの裁判で有罪をかちとる決議をしたいと思う。今日は、そのためにやってきたんだ」部屋の中は一瞬静まりかえったが、前川は、いら立ちながら反論した。

「そんなニヒリズムのたわ言は止める。君は去年の今頃は武装闘争を主張していたじゃないか。スターリニズムの母斑を背負いこんで敗北・分解した自分を合理化するな。革命への問題設定能力を持ち、反帝・反スターリニズムの組織を作り上げることが現在の運動にとって最も重要なんだ。俺は、それを唯一の価値判断の基準にする」彼の心には、またもや彫像がちらついた。

「君は闘争の後で、スコラ哲学の理念をネタにし、転倒した方法で現実を裁いているだけだよ」と三木も応酬した。

「ブルジョアジーの新しい攻勢がプロレタリアートに向けられているのに感傷にふけることこそサロン・マルクス主義だ。俺は、これから闘争委員会に出るから帰るぜ」

前川が階段を下りかけると、しばらく前に来ていた青山が呼びとめた。

「待てよ。君はさつき問題設定能力が全てを決するといったね。だけど、それは指導部の論理だぜ。指導部の論理は下部大衆の論理には勝てない。勿論、それが物質化された場合だが……」

「戦わないものは敵を利用するのみ、だ。口実は何とつけようと君たちは戦線逃亡者だ。プロレタリ

アートは一秒毎に独占資本のコンクリート・ミキサの中へ魂を投げ込んでいる。前川は、そのまま階段を下りて去った。

気まずい沈黙がしばらくつづいていたが、急に三木が、何かに脅えたように立ち上った。

「おい……消してくれよ」事務所の一階にあるラジオから、ベートーベンの「英雄」が流れている。最弱者のヴァイオリンがトレモロで属和音を奏していると、突然ホルンが主和音を噴出させた。

「なぜだい？」と傍の一人がきいた。

「消してくれ。俺は聞きたくない。樺さんが死ぬ前日、一語にピラを作っていた時、彼女はラジオからもれるあの曲をいやがったんだ」青山が下へ行ってラジオを止めた。

「君は星をつかみたいとわめく赤ん坊に似ているぜ」しかし、三木はそれが聞えないかのように窓の外をみつめた。

翌朝、ソファーでまどろんでいた中島は電話のベルで目をさました。家には誰もいないらしい。受話器をとり上げると、北村が興奮した声でどなった。

「衆議院で政防法が強行採決されたぞ」中島の身体を（しまった）という自責の念が突き抜けた。

「すぐに国立劇場建設予定地へこいよ」

彼はテーブルの上の夏みかんを一個ポケットへ入れたまま家を出た。（俺は、現実から遠ざかっていた。また、不等式にはまりこんでいた）彼は、政防法に関しては新聞でかすかに気づいていたに過ぎなかった最近の自分の感覚を苦い思いでかみしめた。

六月の空は、なまあたたく首都をつつんでおり、国会の近くにある草原には、例の如く国民会議の群集が祭典のように旗を林立させ、数カ所にとりつけられたスピトカーが絶えず不協和音を吐き出していた。

平和像が立っているあたりで中島は北村に会った。二人は力弱くあいさつした。鉄条網を乗り越えて、草原を見渡せる場所へ登っていくと、労働者たちが二、三人ずつ立小便をしている。雲が去ったので、日ざしは急にきびしくなった。某の長いタンポポが何本か咲いている。それを見つめている時にも、議事堂の白い影が視界に侵入してくるのだ。

二人は黙ったままアカシアの樹の下にすわり、六月、という言葉や痴呆状態のように思い浮べていた。労働者のデモはすでに始まっているらしく、遠い方の出口へ旗が少しずつ揺れていく。一方、二人がすわっている場所の近くにある別の出口で、小ぜり合いが起きていた。

「出口を一カ所にしぼるつもりだな」中島は立ち上りながらつぶやいた。鉢巻姿の労働者たちからは、時々、「ポリ公どけろ」、という声もするが、全体として穏やかである。その時、ざわめきの焦点が機動隊の背後に移った。

「全学連だ」という叫びが起る。

「革共同は何人動員できたかな……」

「三百……いや二百五十位だ」二人は、すばやく目で計算した。学生たちは出口の外から圧力をかけている。機動隊は挟撃された形になった。しかし、労働者たちは、「ワッショイ、ワッショイ」と声援するだけで動こうとはしない。二、三分後に別の機動隊が警視庁の方からやってきて、学生たちを平和像の下へ押しやった。包囲されたまま集会が開かれている。

「……今日は、七万の労働者が……ブルジョアジーの攻勢……抗議の行動を……」早くもアイスクリーム売りが現われて、すわり込んでいる学生たちの間を歩きまわり始めた。

国民会議のデモが殆ど草原を去った頃、全学連のデモ隊は包囲を切り抜けて動き出した。

「参議院側の道路で追いつけるかな」二人は別の道から国会裏へ出てみた。労働者たちは整然と歩いている。国会議員たちは赤だすきをかけて手を振っている。五分ぐらいすぎた頃、学生たちのシュプレヒコールが聞えてきた。

その声に命令されたかのように待機していた機動隊が、国会へ通じている道の曲り角を埋めた。（労働者から徹底的に分離する方針だ）中島は、以前の自分たちが指揮したいくつかの場面を想起して胸の中がカッとあつくになった。（今なら左方向へ押せば突破できる）

押し合いが起きたが、制服の壁はかたい。労働者のデモが一時途絶えた。機動隊は学生たちを右側の道路へ引きずり出し始めた。スクラムを切られた学生たちが放り出されてくる。デモの先頭が分解

すると、あとは加速度的だ。

「テレビ塔の下へ再集合だノ」とさっき平和像の下で演説した学生が叫んでいる。

三十分たつて、学生のデモ隊は同じ道をやってきた。機動隊は、今度は国会横の道路に少し空間を作つて、学生のデモをそこへ移動させた。後から労働者のデモがつづいていたからである。しかし中島と北村は、後をふりかえつてみて驚いた。道路は百メートル以上も、制服によって左右に区分されていたのである。労働者たちは整然と右側を歩く。学生たちは、一応左へ通されたが、ジグザグを始めると忽ち制止されてしまった。労働者のデモの最後尾が百メートルほど向うに去つた時、機動隊は前面と側面から学生のデモを強力に反対方向へ押しまくつた。

「畜生ノ 警察は進歩したぞ」北村が口惜しそうにいった。学生たちは国会からどんどん突き離され、都電の通りまで来て、やっと解放された。旗は大部分折られてしまった。

二人も、歩道をデモ隊と平行して歩いた。日比谷公会堂が見えている。機動隊は姿を消したので、デモの隊列は、かなりゆるんでいた。

「おい、パトカーからポリが降りたぞ」北村が中島の肩を突いた。公会堂横の樹々の間から制服警官がデモの背後に忍び寄つて行く所だった。デモの指揮者はメガフォンをぶらさげたまま、デモの後方五メートル位の所を歩いている。

「危いぞノ」と北村が叫んでかけ出した。私服の手が学生の肩をつかまえた。メガフォンが落ち、学生をかくすように密集した警官たちは、パトカーの方へ走り出した。

一方北村、の声にふりかえつたデモ隊は、瞬間とまどつたが、何人かの学生が、「バクられたぞノ」とどなって追いかけた。警官たちは交叉点を対角線の方向に走ろうとしたが、車の流れに妨害されて動きが鈍つた。百人近い学生たちは、それを包囲するように走つた。トラックやタクシーは一斉に停止する。プラタナスの樹の下で学生たちは追いついた。北村は、バス停の標識を倒すようにして私服をなぐつた。別の方から石が飛ぶ。(アスファルトの街路にも石がころがっている)額から血を流した私服が、恐怖の表情で突立っているのを、中島は元の場所から見た。制服が警棒を抜いてふりまわした。目つぶしのため、学生たちは砂を投げつけたので、あたりには黄色いほこりが立ちこめた。

「機動隊だノ」という叫びで包囲の輪はゆるんだ。制服をのせたトラックが私服とデモ隊の間に割り込んできた。

再び機動隊に押されながらデモは続いた。方々で興奮した声が聞える。

「バクられかけた奴は助かったのかな？」

「だめだったらしい。それに、バス停の標識でなぐつた奴もバクられたぜ」

六月十四日、第十六回公判の開廷が宣された直後、被告代表は発言を求めた。

「六・一五事件の一周年を明日にひかえて、同志権美智子のために一分間の黙禱を捧げたいと思ひます」

「異議なしノ」という被告団の叫びと、

「裁判所は、そのような行為は許しません」という裁判長の声が入り乱れた。看守も一斉にかけ寄つてくる。

「黙禱ノ」被告団は起立して目を閉じた。中島は(あの広場での黙禱以来、俺は彼女の死を生かすような行為をしてきたか?……してこなかった)という思いに胸をえぐられていた。看守たちは被告団の周囲に群がったが、手を下せない。

「君たちは自分たちの意見を通すために、死んだ人を引き合いに出すのか?」裁判長の声が怒りに震えている。答えはなかった。

「黙禱終りノ」そして被告の一人が答えた。

「彼女は我々の同志だった。彼女は永遠に我々の傍にいる」

「では、死んだ人から黙禱を依頼されたのかね?」と裁判長は嘲笑した。

「その通りだノ」と被告団は叫んだ。目をそらした裁判長は、証人調べを始める、とつぶやいた。

前回の公判にひきつづいて、警視庁公安一課の巡査が証人台に登った。彼は検察側の質問には完全な同意のみを示した。次に弁護側の反対尋問に移った。

「証人は当日の午後五時から七時まで、国会南通用門の内側にいたとの証言をされましたが、そこで何をしていたのですか?」

「全学連宣伝カー付近で指導者たちが協議しているのを監視していました」

「特に誰かの行動に注目しましたか？」

「私は上司から中島を見張るように指示されました」

「第一次衝突が始まるまで同じ場所で見張っていたのですかね？」

「そうです。しかし、中島が宣伝カーから離れて門の右側へ歩いて行ったので、私も構内を彼と平
行して動きました」(……そうだ。俺は南通用門の左側にいる突入の先頭部隊の指揮をわりあてられ
た。……しかし意志は強くても行動がともなわなかった。俺は、後続の部隊と打ち合わせるといつて
歩き出してしまった。その直後、トラックを引き出した先頭部隊は、広場の中へ、スクラムを組んで
入って行ったのだ)

「第一次衝突が起った時、機動隊は、どのような行動をとりましたか？」

「私は中島の行動に注目していたので、心ここにあらざれば」というたとえの通り、具体的な印
象はありません」

「武装警官が上げた叫び声を聞きませんでしたか？どのようなことばを口にしましたか……」

「聞いたことは聞きましたが、何といったかは分りませんでした」(俺は、ブッコロセノとか
ヤッチマエノとかいう叫びを耳にした)

「衝突の際に死者が出たことを知りましたか？」

「知りませんでした」(いや、俺は、殺されたぞノ」という恐ろしい叫びを聞いた)

「中島君を逮捕した時の状況を説明して下さい」

「彼は歩道の舗石を砕いて前方へリレー式で送るように呼びかけ、自分でも投石してました」
(勿論、石は何十個となくガツン、ガツンと警官のヘルメットに命中した。警棒をふり上げ、密集し
て門から外へ突撃してきた機動隊はひるんだ。……だが、俺は警棒でなぐられないために、後退の口
実をみつけるために、投石を呼びかけたのだ)

「中島君を何人で逮捕したのですか？」

「彼が門の右側三十メートル位の付近に来た時、まわりの学生が少数だったので、私と外の三人で
検挙しました」

「その時に、あなたの方のとった態度を説明して下さい」

中島に加えられた暴行をめぐって質疑応答が続いたが、証人は否定した。そして中島の耳も、それ
以後のことばのやりとりを通さなかった。(投石は、俺自身の卑怯さに対する断罪だった。俺が先頭
部隊のスクラムに加わらないで門の右側へ歩き出した時、俺は門を境界線として死者と別れたのだ。
俺は広場へふみこむ意志を持ったが、行動は広場から逃亡することだった。……意志と行動の不等式
……それ以前にも、組織化の任務やゼネスト支援の闘争などでも、力以上のものに耐えられなくなる
と俺は逃亡した。俺は二重の被告だ)

彼は、今はすっかり元通りに生えている人さし指の爪をぐっと握りしめた。

青山は六月のいちよう並木はあまり好きではない。もやのような緑の空間も、黄金色をした薄片の
乱舞も今は存在しないからだ。黒ずんだ緑は、ほこりや強烈になりかけた日ざしを浴びてあえいでい
るように見える。アーケード下は相変わらず暗い。ここは、いつもデモ隊の集合地点になる。

「六・一五記念集会、二十五番教室」という立看板が数カ所があり、白いビラが灰色のアスファル
トの上に散らばっていた。

教室には昨年ほどの人数は到底なく、どこか空虚さが支配していた。知っている顔も殆どない。医
師による死因の説明、被告団代表の報告などが行われている。

「裁く主体の逆転」と代表は叫んだ。次に死者の父親があいさつした。青山は、時々、大学構内
の池のほとりを歩いている彼とすれちがうことがあった。

「……全学連の内部分裂は、一面から見れば、主体的な組織化への希望を感じさせます」青山に
は、この教室が、息苦しかった。彼は、この場所の使用が許されるような時期には、闘争が衰退期に
入っているのだ、と考えたのである。集会はなかなか終わらない。日比谷での中央集会は、すでに始まっ
ているので、国会で合流することになった。

南通用門と通路をへだてて反対側にある地下鉄の出口から青山たちの一行が出て来た時、中央集會
からのデモ隊は、まだ二百メートルばかり離れた所にいた。一年前、激しい戦いが展開された広場へ
の門は、六十万円をかけて新装されている。武器庫であった歩道の舗石も、きっちり修理され、新
旧のモザイク模様を見せていた。青山は白い舗石に視線を集中していると、突然、舗石は黒くなった。

首相官邸の方向からやってきた機動隊が、デモ隊が行動に移る前に、素早く門の前に隊列をしいたのである。彼は他の学生たちと共に、行動を急ぐように主張したが、デモの指揮者は、それを押しとどめた。

「日比谷からの部隊が来るまで待とう」

全学連の宣伝カーが、ゆっくりとデモの間を縫うてくる。その間に、門は閉じられ、外側の制服の壁は一層厚くなった。

「では宣伝カーを先頭に出発します」とスピーカーが叫んだ。しかし、車が動き出した途端に、車とデモ隊は機動隊によって分断され、車は首相官邸の方へ押しやられてしまった。デモ隊は門へ接近しようとしたが、道路を半分も横断しないうちに機動隊に制止され、コンクリート塀に押しつけられながら車の方へ動いた。

「とまれ！ 黙構さえできないのか！」と青山たちは前方へどなったが、宣伝カーは、すでに官邸横の十字路を曲って坂を下り始めていた。後方のデモ隊が、ワッショイ、ワッショイと門に突き進んだが、数分後には青山たちと同じ方向へ歩み始めた。

夕闇の街路。暗い気持のデモ隊は、歩道と機動隊の間の細い空間を歩いた。ジグザグは物理的にも不可能に近い。交叉点にくる度にデモの前部と後部は断ち切られ、追いつくために走り出すと、機動隊が罵声を浴せながら制止した。

東京駅をすぎ、鎌倉河岸のあたりまでくると人通りも灯も少なくなった。ヘルメットをつけた新機動隊が待機している。今夜、記念集會が開かれる共立講堂への曲角は、なかなかやってこない。囚人の列は脅えたように、歌もシュプレヒコールもなく黙々と歩いた。

講堂にいた時、集會はもう始まっており、満員の席の方を、死者の生前の写真が見下していた。文化人代表があいさつしている。

「……日共は彼女をアメリカ帝国主義の手先だと非難しましたが、中共は民族的愛国者だと讃えました。共産党にも本物と偽物があるのです」青山は（そんな意識でよく追悼のせりふを語れたものだ）と思った。

やがて場内は暗くなり、演劇人による六・一五再構成劇が始まった。小ぎれいな身なりの労働者

たちが右翼のなぐり込みから逃げまわっている。一人がプラカードで応戦のジェスチャーを示すと、「本当か？」という野次が飛んで笑い声が上がった。

最後に全学連の闘争を形象化したと称するフィルムが上映された。場内の人々は息をこらして見つめたが、六・一五以前のシーンがモニタージュ風な数個の仮面のうめきの間に数瞬とび出してくるだけだ。

「ナンセンス、ナンセンス」場内が明るくなると青山は大勢の学生たちと一緒に叫んだ。司会者が、このフィルムは悪しきモダニズムに侵されているが、我々はこれを事前に見る機会がなかったのだと弁解した。

しかし、三階後方の席で仮面の呪いのことばを聞いていた前川は、フィルムの評価とは別に、あの「彫像」の意識がこみ上げてくるのを感じていた。彼は場内にうずまくインターナショナルの合唱を聞きながらロビーへ出た。（死者も彫像の一つの形式だ……）彼女の詩の一節が、前川の今まで意識しなかった領域に浮び上ってきた。

いつまでも笑わないだろう

いつまでも笑えないだろう

彼はハッと立ちすくんだ。背後では拍手がまき起り、潮のようなうねりは、高まり、次第に弱くなり、そして扉が開いて人の波が外へあふれ出てきた。彼も一緒に階段を下り、暗い街路を、彫像の意味に心を奪われながら歩いた。何分も、何十分も。

（俺は、今まで彫像のもつかたき、その古典的な残酷さを意識してきた。彫像を見る時の俺の視線は、全ての混乱と平和的ムード、意志の交流の欠如に対する怒りに燃えていた）彼は、数年前、画集の中でみたあるギリシャ彫像の頭部写真を思い出していた。眠るフェーリア。彼女の閉じた眼は影を帯び、のびやかな直線が額から鼻筋に走り、頬と唇は触感を予想させ、たくさんの束になった髪は軽くうねって流れ落ちていた。

(そうだ。あのフューリアを発見した頃、俺は愛の投企に失敗していた。そして人間の持つ彫像のような残酷さに打たれたのだ。その後、政治活動に入って、制服とコン棒の壁につき当り、スターリニストの鉛のように鈍い論理に妨害された時、俺は現代の革命を流産させているものを彫像としてとらえ始めていたのだ。つまり、存在の硬化として。しかし、俺自身も又、一つの彫像だ。数年間、仮面をとりかえてきた俺の責任は消えない。自己批判と転換の連続だった。……俺は、ハンガリー事件の後で日共黨員となり、共産党が破産した後で革共同に参加した。俺の中の彫像を破壊しない限り、俺は存在することを許されない)

地球は自転を続けた。その次の日、午前十時すぎの大学の地下食堂は、まだ朝の雰囲気を持っている。青山は食器を片づけてから、壁にはっである商業紙や機関紙を読んでいた。

「失礼ですが……」という声にふりかえると、見知らぬ学生の顔がある。

「アカハタを購読していただけませんか……」

北海

(六月の正門は、鉄からできている。おれは、それをくぐって中へ入る。昨夜の夢にも、やはり鉄の門があったが、おれは、そこから出たのだ。今、いちょう並木は、門の内側にあるのに、夢の中では、門の外側にあった。昨夜の並木道は、運河のように水で満たされ、樹葉の尖端だけが、わずかに水面から上へ伸びていた。おれは、非常な空腹を感じながら、水に流されて門から外へ出たような記憶があり、おれの妻と子供を助けようとしてもがいていた。二人は、水底近くにおいて、一種の楽し気な表情で、手足を動かしていた。おれは、切迫する心臓の鼓動に気がついたので、二人を水面上に引き上げようと、両手で抱きかかえたが、かえって沈んで行くようだった。少し苦しくなったおれが、大切に肺の中へためておいた息をブクブク吐き出すと、おれのまわりの水が青く染まった。おれは、自分の上の水面へ、煙草の煙のような青が立ち昇って行くのを驚いて眺めた。その時、おれの足が、いちょうの樹の根元につかかったので、おれは、それ以上たしかめるのを中止した。何とかして、妻と子供を、水のない所へつれて行かなければならない。おれは、二人を両手にかかえたまま、水底を、浅いと思われる方向へ、並木に沿って歩きはじめた。おれの足は、ふだんの何分の一かの速さでしか進まない。息は苦しくなってくる。おれは、それをまぎらすために、水底で光がつくっている様々な揺れる模様をみつげながら、少しずつ動いた。上の方を向いていた子供が、お魚が泳いでいるよ、といった。おれも、そちらへ眼をやると、何か青ざめた巨大なものが、水面に浮いて、おれたちに、ものすごい圧力をかけているような気がした。おれが舌を出して水を味わうと、しびれるような冷たさがあり、しかも塩からい。ここは海なんだ、あれは氷山だよ、とおれは、思わず叫んだ。まさか、木の葉が浮いているんでしょ、と妻はいつて、ねえ、……ちゃん、と子供の方へふりむいた。何という名前だったかは思い出せない。おれは、なぜ三人がこんな所にいるのか、なぜ水の中で話ができるのか、いや一体、おれに妻や子供があったのだらうか、などという疑問を少しも起こさなかった。おれは、今にも倒れそうになっていた。二、三步だけ、よろよろと進むと、実際に倒れてしまった。そして、そこが、やっと水際だったのだ。たしか、そこには、いちょうの樹が、境界線を示すかのようには立っていたように思う。ぼんやりとかすんだ頭を、水面から出すと、眼の前の風景が青一色だった。おれが、激しくせきをした途端に、一斉射撃の音が響き渡って、おれは、頭蓋骨を粉碎されたな、と

直感しながら、再び水の中へ沈んでしまったのだ。……今、おれが歩いている並木道は、昨夜の並木道だろうか。少しは違っているようだが、水の中で見たのだから、それも当然なのだろう。この樹のあたりで、水がなくなったような気がする。この樹は、門から数えて何本目かな。一本、二本、三本、四本目か。丁度、夢の中の水際が交叉点になっている。地獄の四丁目交叉点。行きかう亡霊たち。おれは、この並木道を、スクラム組んで出て行ったこともある。友人を、効果的に権力へ引き渡すために。おれたちは壊滅した。広場の門から脱出したおれたちは、線となって並木道を過ぎ、点となって巷へ散った。もう、ずい分前のことだ。おれが入っていた組織は勿論、おれの中の組織も溶解してしまつた。今日も、何かのストライキが行なわれるらしいが、おれには反応を起こさせない。スローガンは知らない。まして、情勢分析や行動方針は知らない。おれは、北へ行くのだ。青をつきとめに行くのだ。亡霊たちをみんな、このざわめきの中へ残して。ピラ、パンフレット、そんなものはいらない。これらの紙片のどの一枚をとり上げても、数年前に、或いは更にその数年前に日付けをかきかえると、そのままおれの文章になってしまうという屈辱。うす暗い地下室の廊下から数年をさし引くと、そこにはおれが、秘密会議の興奮から覚め切れぬままに、しゃがみこんで、デモの出發を待っているという差恥。同志諸君、組織の防衛措置を嚴重にしてくれ給え。……おれの眼の前が、青くかすんでくる。おれの眼は、青しか映さない。おれは、並木道を奥へ歩き続ける。……あいつが話しかけるぞ。オス……いや、おれは、北の海へ行くのだ。青をたしかめに。さよなら。……あいつは、変な顔をしている。おれは、歩き続ける。あいつが口を開けば、政治的用語を矢継早に発音することは分りきっているからだ。けれども、もしあいつが、青い時間派とか、青い空間派とかいう言葉を、ちらとでも口に出したならば、おれは、何のためらいもなく、あいつと一緒に歩き出していただろう。……あいつが、このような言葉を使うはずはない。おれも、今ふと考えついたらばかりなのだから。あいつらは、人間を組織し、かり立てることに熱中している。啓蒙によって、誘惑によって、策謀によって、暴力によって。おれの眼は、あいつらの組織が、時間派と空間派に青く分裂しはじめているのが見える。時間派は、運動を時間的に止揚しようとする。空間派は運動を空間的に止揚しようとする。勿論、これらに運動というものがあれば、という条件が必要なのだが。そして、おれの眼にだけ、そう見えしているのかもしれないが。……この両派の対立は、政治の領域だけではなく、生活の隅々にまで及んでいる。そして、あいつらの組織の存在とは関係なしに、全ての人間をまきこみ、全ての人間を舞台にしながら、その中で絶え間なく生起している。この激しい対立は極限にまで到達せずにはいないだろう。しかし、あいつらの組織は、この状況に気付いていないし、対立を止揚する力もない。おれ自身も、自分だけの思考でたまたまかかったことは、これまでに一度もなかった。おれは、自分の文法をほしいのだ。青の文法、その時称変化や人称変化を考える時間と空間をほしいのだ。おれは、ポケットにあるノートと鉛筆の外に、金の入った財布の重さを意識している。以前、おれがポケットに手を入れると、笛や機関紙にふれたものだが、今は、金にふれている。おれは、北の海へ行くのだ。六月の並木道を過ぎて。汚れた旗が、数本、壁に立てかけてある。メガフォンで叫んでいる者がある。あちらをむいてはならない。耳を傾けてはならない。並木道のむこうに、高い塔がそびえている。あの時計台の文字盤を読んではならない。 Teppanまで開放しないような塔は、爆破しなければならぬ。……おれは、これらの風景を眼の中で整えようとするが、いつも二重映しになってしまふ。いつも相反する叫びが、のどの奥でからまる。どんな物象からも、一連のイメージが、のたうちながら流れ出てくるのを感じるが、まもなく、切りとられたトカゲの尻尾のように動かなくなってしまふ。おれのまわりでは、今も、見えない死者たちが、続々と倒れている。自分のやったことのために、自分のやらなかったことのために、続々と倒れている。歩いてるのは亡霊たち。かれらも、まもなく、トカゲの尻尾のように動かなくなるだろう。おれも、その一人だが……。おれが、動かなくなる前に、一つのロマンを書くとしたら、その構成をどうしようか。現実のクライマックスを描写して、突然、亡霊の静止した像を、同じ密度で接続する……。いや、それとも、まず冒頭で、亡霊が二人、長々と対話し続けている時に、現実の描写を割り込ませようか。対話の流れを拡大するために、亡霊は、人間だけではなく、動物や植物の亡霊も作ろう。……ここで又おれのイメージは立ち止まる。おれも、立ち止まって空を見よう。こんな抒情詩はどうだろう。いちょう揺れ、われ一人アスファルト踏む、かなたの空は青き眼をして。北の空だけが、晴れているようだ。それにしても、なぜ、おれの眼は、青しか映さないのだろう。なぜ、青しか見えないのだろう。太陽をみつめすぎたのでもないし、瞳孔を手で圧迫しすぎたのでもない。全ては、北の海で明らかになるだろう。では、なぜ、おれは、北の海へ行くのだろう。一つだけ、分っていることがある。おれが、夢の中で再び水の中に沈んだ時に、恐る

ブレヒト『処置』の問題

統制合唱隊

進み出よ、汝らの働きは成功し、この国にも革命が行進し、戦士の隊列もとのえられている。
我々は汝らを承認しよう。

四人のアジテーター

待て、いわねばならないことがある。一人の同志の死を我々は報告する。

統制合唱隊

かれを殺したのは誰か。

四人のアジテーター

我々がかれを殺した。我々はかれを射殺し、石灰抗に投げ込んだ。

統制合唱隊

かれは汝らが射殺するに値するどんなことをやったのか。

四人のアジテーター

しばしば正しいことをおこなったかれは、数回の誤りを犯し、結局かれは活動を危険に陥し入れた。かれは正しいことをなそうとして失敗したのだ。我々は判決を要求する。

統制合唱隊

事件がどのように、いかなる理由で起きたのかを示せ、そうすれば汝らに我々の判決を告げよう。

四人のアジテーター

我々は汝らの判決を受け入れるであろう。

ブレヒトの教訓劇「処置」(“Die Massnahme” 一九三〇年)は、このような導入部によって開始される。ミステリーが殺人の発生を冒頭におき、それをめぐる多くの仮定推理の未だ犯人を指敵するとは全く逆に、ここでは、まず殺害者が登場し、行動を再現することによって殺害の理由を示し、判決を要求するのである。「処置」は、『試み』第四号に入っているが、その前後に発表された第三号の「三文オペラ」や第五号の「屠殺場の聖なるヨハンナ」に比較すれば、その紹介や上演は極めて少ない。その理由の一つとして、党規律の厳格さを扱ったこの作品が、政治主義的あるいは人間主義的立場からは評価しにくく、一種の当惑から避けてしまうのであろうことが考えられる。このことは逆に、「処置」の中に、ブレヒトの表現の連続性を支える思想的・方法的な問題点が含まれているのではないかと想像を生むのである。

表現の特徴に留意しながら筋を追ってみたいと思う。一〇六五行から成る「処置」は、権威の所在を示す数十人の統制合唱隊と、アジテーターを演ずる四人の独唱者(男三人、女一人)による劇的カンタータである。音楽はハンス・アイスラー、初演は一九三〇年十二月十一日、大ベルリン労働者合唱隊によっておこなわれた。

一九二〇年代の世界革命が進行している状況が、この劇の背後にある。モスクワから中国へ潜入しようとする四人のアジテーターは、国境直前の党委員会事務所で、一人の若い同志に案内する任務を与えた。この若い同志は、アジテーターの一人によって演ぜられる。かれらは非合法活動を開始するにあたって仮面をつける。仮面の使用は、ブレヒトが他の作品でもおこなっている疎隔化の一方法であるが、ここでは前衛党员的の均質性、没個性を示し、それは、劇の後半で、若い同志が指令に反逆する際、仮面をはぎとり破り捨てる行為によって強調される。

語れ、けれども

語り手を隠せ。

勝利せよ、けれども

勝利者を隠せ。

死ね、けれども

死者を隠せ。

(統制合唱隊による「非合法活動の賛歌」から)

上部からの論理は、「……せよ、けれども……」という形で下降する。下部のアジテーターは「……」と受け入れるだけである。一方、アジテーターは、若い同志のいくつもの質問には「……」の一語で答え続ける。

中国への潜人後、若い同志は、非合法活動において、四回の誤りを犯す。一、米を運ぶ舟を引くクーリーたちの苦しみを減らすために、足の下へ石をしく工夫を教え、かれらの反乱を遅らせた。二、工場でピラを配布した際、無実の労働者が配布の容疑で捕えられるのを黙視できず、その警官を襲撃し、アジテーターたちを追求の的にした。三、帝国主義との斗争で武器を調達するために、民族資本家と交渉した時、相手の愚劣さに腹を立て、交渉を挫折させた。四、餓死に瀕する失業者を見て、時期尚早の蜂起へ突入し、党の指令と活動を破壊した。

プレヒトは、感性的な政治活動が引き起こす危機を、かれなりに四つの型に分けて構成しているが、ここには、一九二〇年代におけるドイツ革命の敗北や、中国革命の迂回も間接的に影響していると考えられる。

四つの誤りが報告の形式で演技される度に、アジテーターと統制合唱隊の間で討議がおこなわれ、後者の「我々は了承した」ということばと共に次の場面へ移る。舞台の上には、四人のアジテーターだけがおり、かれらが交互に、クーリー、監督、工場労働者、警官、実業家、若い同志を演ずるのである。

さて、蜂起の最中、アジテーターたちは、官憲の追求から逃がれるために、すでに正体を暴露してしまった若い同志を消してしまうことを決定する。若い同志も、しばらく沈黙した後、この処置を了承する。そこで、アジテーターたちは、かれを射殺し、石灰抗に投げ込む。

統制合唱隊は、以上の報告を演技によって示され、「汝らの処置を了承する」という判決を下す。最後の合唱の部分は、イタリック体で印刷されており、次の二行を含んでいる。

けれども、汝らの報告は又、我々に示している、どんなにか

世界を変える必要があるかを。

この教訓劇の評価において特徴的なことは、プレヒトが結末において若い同志を死に至らしめているという点に関して論議が集中したことである。しかも、政治的立場によって正反対の評価がなされた。プレヒト自身は、死後に出版された戯曲集第五巻に入っている「教訓劇についての註」で次のようにかいている。

「作者は、『処置』の上演を許すことは、それから学ぶことができるのは、若い同志の俳優だけであり、かれも、それ以外に、アジテーターの一人を演じ、統制合唱隊に参加した場合にだけ学ぶことができるので、何度も拒否してきた」。

ここから、教訓劇という形式を媒介として作者の意図、作品の構成、上演の効果が、どのような偏差を生むかという問題が出てくる。この問題を追求するために、まず論議の焦点である「組織の中の死」から入っていきたい。そして、プレヒトの「処置」は、ドストエフスキーの「悪霊」、サルトルの「汚れた手」との対比において検討すべきであろう。それは、これらの作品によって表現されている思想状況が、それぞれ典型的な意味をもっており、同時に、革命組織の論理究明が、三者の創作契機になっているからである。

ドストエフスキーは、秘密結社のオルガナイザー、ネチャーエフによる同志惨殺事件に衝撃を受けて「悪霊」(一八七一年)をかいた。かれは、憤激のあまり、最初は、作品の構成が犠牲になるのを覚悟して、パンフレット式の読物を作ろうとしたが、創作過程において巨大な小説へ転換させた。ネチャーエフを映した人物ピョートル・ヴェルホーヴェンスキーは徹底的に戯画化されており、そのためドストエフスキーは、その後長く反動的作家として非難された。

サルトルが「汚れた手」(一九四八年)をかいた時期は、かれが労働者階級の自由の回復を考察し始めた時期と重なっている。暗殺者ユゴーの行動には、目的と手段の矛盾が、政治参加に先立って解決されるべき問題として提起されており、又、権力につくための党の論理を描くサルトルのペンの裏側には、帝国主義戦争と反ファシズム斗争の現実が付着している。この作品に関しても、さまざまな評価がなされている。

ドストエフスキーとサルトルは、「組織の中の死」を、どのように表現したか。「悪霊」のピョートルは、五人組の仲間の一人を密告者に仕立て、かれを殺害することによって組織の連帯性を強化しようとする。「尤も、

諸君の御随意に行動し給え。もし諸君が決心しなかつたら、この結社はこなごなに粉砕されてしまうのだ。それ
もただ諸君の反抗と、裏切が原因なのですぞ。……どうか僕が諸君にしっかりと結びつけられて、などと思はな
いでくれ給え……尤も、そんなことはどうでもいいや」(米川正夫訳) ドストエフスキーは、この事件を契機と
して暴露された状況の腐敗を、ルカ伝第八章の引用によって弾劾し、かつての自由主義者スチエパン氏に次のよ
うに告白させる。「……私たちはみんな悪霊に憑かれて、狂い廻りながら崖から海へ飛び込んで、溺れ死んでし
まうのです」そして、その後、「永久に愛し得る唯一の存在」としての神が、ロシアを高みから照らすにちがひ
ない、とドストエフスキーは確信している。

「汚れた手」において、サルトルは、かつての暗殺者ユゴーが「回収可能」かどうか判定されるために、以前
の事件を説明するという構成を与えている。党指導者の一人、エドレルは、政策上の対立のため、ユゴーの手で
暗殺されるが、その後の政策転換のため、暗殺の意味は逆転し、ユゴーは危険人物になる。外部から見たユゴー
の価値は逆転するけれども、ユゴーは自らの殺人と、エドレルの死に固執し続ける。「エドレルのような人間は、
偶然によって死にはしない。彼はその思想のため、その政策のために死ぬ男だ。自分の死に責任を持つべき人間
だ。もしぼくがみんなの前で、あれはぼくの犯罪だと主張し、ラスコーリニコフという名をもういっぺん要求し、
必要な償いをする事を承知するなら、そのとき彼は、彼にふさわしい死にかたをしたことになるんだ」(白井
浩司訳) 劇の結末で、エドレルは、「回収不能だ」と叫んで肅清される道を選んだが、ここにサルトルは、実存
的論理における暗殺と、政治的論理における暗殺のくいちがいを示している。

ドストエフスキー、ブレヒト、サルトルの作品系列においてとらえられている組織の論理にまず注目したい。ド
ストエフスキーは、萌芽期の社会主義秘密結社における権力意志の根元をえがき、ブレヒトは世界革命のプログ
ラムが進行する際の規律違反者の処置をえがき、サルトルは、権力奪取前の派閥力学から個人的投企がはねとは
される関係をえがいている。更に被害者について考えれば、「悪霊」においては、共犯者の思想内容は多種多様
であり、正反対の場合すらある。「処置」においては、組織構成員の均質性と論理の一方交通性が特徴的である。
「汚れた手」においては、暗殺者と並んで、被暗殺者にも力点が置かれ、論理的優位性を示す瞬間さえある。

以上のように、三つの作品のテーマは、それぞれの歴史的状况に支えられた連続的な独自性ともいうべきも
のをもっている。その場合、政治的論理は、創作過程に至る必然的契機をどの程度はらんでいたであろうか。ド
ストエフスキーは、「組織の中の死」を契機として更に多面的なテーマに進んで行き、ニコライ・スタヴローギ
ンを生み出し、サルトルは、ユゴーやエドレルをえがくことで、逆に自らの意識に何ものかを加えて「弁証法的
理性批判」にまで至っている。一方、ブレヒトは、「処置」をかいた年に共産党へ入党し、党の論理を教訓劇に
仕立てたのであるが、奇妙なことに、このテーマはブレヒトの他の作品のテーマと断絶しており、「組織の中の
死」そのものを再び正面からとらえる試みはおこなっていない。その理由として、ブレヒトは、「処置」におい
ても、「組織による死」をテーマに選んでいなかったのではないかと考えられる。ドストエフスキー
やサルトルにとって、芸術が主体的関係であるのに対し、ブレヒトは、芸術を客体的関係としてとらえていた。
ここにブレヒトへの誤解と、ブレヒトの芸術的孤立の原因があるのではないか。

ブレヒトが、この教訓劇によって提起しなかったのは、党規律はいかにあるべきか、という問いであったはず
である。しかしながら、この作品は、発表後から現在に至るまで、正反対の評価の深淵に宙吊りされたままであ
る。一方では、スターリンの肅清裁判を予言するものとして、その射程有効性を高く評価され、一方では、政治
的に有害であるとして上演を不可能ならしめられている。この双方の評価は、共に、ブレヒトの作品の意味を結
末通りにとらえていること、また、政治的基準を介入させていることによって二重に誤っている。「処置」の評
価は、一、効果を生む全体的構成が、どのような創作意図から出発しているか、二、それが、かれの創作理論の
方向においてどのような位置をもつか、の二点においてなされるべきであろう。

ここで、ブレヒトが、この教訓劇に、カンタータという形式を与えているのに注目したい。劇と音楽の新しい
結合の可能性を模索していたブレヒトは、「三文オペラ」においても「美食的なオペラ」に、社会的、意識的な
機能をもたせようとしているが、「処置」の場合にも、カンタータ形式において状況の関係を明確にし、教化に
役立てようとする意図がうかがえる。カンタータは、オペラと共に十七世紀初頭に現われた形式であり、ブレヒ
トは、このパロッド期にみられた、対位法への反対、自由リズムによる実験的な言語解釈という特徴を、自らの
試みへの手がかりにしたのであろう。アンドレ・オデルによれば、「カンタータは、いくつもの部分からなる
抒情的場である。これは演奏会あるいは教会用のものであるから、正確にいえば劇的動作を含んでいない。…
…伝統的カンタータについて次のようにいえることができる。即ちそれは一つ一つ別々になった多くの形式を組織
しつつ、一つにまとめた複合形式である」(吉田秀和訳) このカンタータ形式は、ブレヒトの実験的な試みを助
けたであろう。「処置」をかいた時期のブレヒトは、V効果、叙事詩的演劇論を中軸とする創作理論を構築しつ
つあった。一例として、ブレヒトが現在までの戯曲的形式に対して叙事詩的形式の対比表を作っているので、か

れの主張する項目をふりかえってみよう。そこには、「物語りつつ／観客を観察者にし／その能動性を喚起し／決断を要求する／世界像／観客は筋に配置される／論証／感動が認識へ駆り立てられる／観客は対立し学ぶ／……」という項目が並んでおり、いずれも「処置」の創作意図と一致していると考えられる。同時に、プレヒトは、演技者と観察者の意識を、流動的に客体化しておく方法「疎隔化効果（Verfremdungseffekt）」をつくり出そうとした。「処置」の註にも次のような意見が付け加えられている。「劇の進行は、簡潔で、無味乾燥でなければならぬし、とくに活気とか、表現ゆたかな演技は余計である。演技者は、事件の了承と判決を得るための四人の動作を示すだけにしなければならない。……上演する者（合唱隊と演技者）は、学びつつ教えるという任務をもっている。ドイツには、五十万人の労働者合唱隊員がいるのだから、合唱する時に何が生ずるかという問題は、聞いている時に何が生ずるかという問題に劣らず重要である」。

次に作品の構成、筋の設定を分析してみる。「処置」は、四つの誤りの再現を、報告の過程の中に含んでいる。プレヒトは、かれをとりまく政治状況から一定の影響を受けながらも、かれが誤りと考える一般的な四つの型をフィクションとして設定したのであろう。この四回の誤りを報告するために、四人のアジテーターが必要になったものと推定することができる。そして、事件に関係する全ての登場人物を、この四人で代行することによって、報告の密度が一層高められた。

このような構成、筋の設定は、基本的には、かれの初期創作理論の展開線上に位置するけれども、意図と構成、構成と効果の間には、明らかな偏差が生じている。プレヒトが、効果を重視したために、状況を反映する構成よりも、効果を生むための構成を選んだことは当然である。この視点から見れば、「処置」は、それと同時期にかかれ、共に「試み」第四号に入っている「然りをいう者」、「否をいう者」と極めて類似した構成をもっているのに気付く。言葉や文体の簡潔さ、病気に倒れて旅を続けられない者を殺すかどうかの問題、登場人物による疎隔化された対話、合唱……。しかも、「然りをいう者」と「否をいう者」は、筋において同一でありながら、結末が正反対になるという逆転関係を示している。従って、この対比から、「処置」においても、逆転した結末を予想することは可能であろう。「場」の変換の可能性を示すことが、プレヒト理論の基本なのだから。しかし、「然りをいう者」と「否をいう者」に関しては、プレヒトが、相互の結末と正反対の方向へ観客の想像力を導こうとしているのに対して、「処置」の場合には、筋を想像力によって逆転させようとする意図と、ある論理を教化しようとする意図が分裂している。「処置」の後でかかれた「母」（原作ゴリキ）では、後者の意図が統一

的に働いているのに、「処置」では、双方の意図が、奇妙な共存関係を保っているのである。プレヒトは、ここで、若い、未熟な、感性的な活動家を否定させ、より権威的、理性的な党論理を肯定させようとしている。結末において、若い同志が殺されるのは、この効果を促進させるための手段であって、プレヒトの本意ではない。かれが、粛清を予知したと評するのは逸脱であると思われる。かりに、予知した、とみるためには、下部組織からの公開的報告を、上部組織による秘密な処置に「逆転」し、その上、誤りの系列を、年齢に関係ない、本質的な組織論の問題に「置換」する操作が必要となる。これは外在的解釈であり、作品の構成に含まれる完結性を破壊してしまう。

このような、意図と構成と効果における偏差は、プレヒトの政治参加「共産党入党と創作理論の構築が、同時に起こされたこと」に起因する。「処置」においても、統制合唱隊が「ソ同盟への讃歌」、「党への讃歌」が、カンタータ形式でアジテーター達の対話を覆い、プレヒトが、たとえ自己の理念におけるヴィジョンとしてであり、当時の革命勢力と前衛主義を肯定していたことは明らかである。この作品の最後で、統制合唱隊は、処置を了承しながらも、先にのべた二行を付け加えているが、プレヒトによるこの補足も、「組織の中の死」は、資本主義体制が存在する限り止むを得ないから、死を免れるためには未熟さを脱せよ、という教訓を必然的に導く。

「処置」を一つのミステリーと考えれば、若い同志を殺したのは、プレヒト自身ではないだろうか。プレヒトが確信していた芸術の政治的有効性という基準からみれば、「処置」は、教化に失敗したのと同じ理由により、同じ程度だけ、粛清を生む政治的論理の暴露にも失敗している。かれは、極端に相反する評価に接した時、微笑しつつも当惑したにちがいない。「組織の中の死」は、「処置」のテーマではないのだから。だが、そのためにプレヒトにおいては、ドストエフスキーやサルトルにみられたような、他作品への思想的連続性が断絶する。一方、大衆が自己のおかれた関係と、その可変性の認識へ到達することを意図した方法そのものは、いよいよ独自の成熟を示して行く。けれども、晩年に、「未熟な、感性的な規律違反」ではなく、革命運動の再検討を迫る事件——一九五三年の東独暴動——が起きた時、かれは、自らの方法そのものから糾弾され、次のような詩を、ひそかにかかなければならなかった。

「悪い朝」

昨夜私は夢の中で、何本もの指が私を指すのを見た

まるで癡病の者を指すように。それらの指は節くれ立っていた

それらの指はねじ曲っていた。

知らないんだ、と私は叫んだ

罪を自覚しながらも。

では、ブレヒトの「処置」をとり上げることは、作品系列におけるテーマの孤立、相反する評価の誤りを指摘するだけの意味しかもたないであろうか。この作品には、教化を目ざしてはいるが、その意図を越えて、重要な方法上の試みがおこなわれている。そして、この方法が思想的に極限まで追いつめられず、孤立していることが本質的な問題になってくるのである。ブレヒトは、『試み』第四号への註で次のようにかいている。「四人の演技者の各々は、一度は若い同志の所作を示すべきであるし、従って、各々の演技者は、若い同志の四つの主要場景のうちの一つを演ずるべきである」この註と、戯曲集第五巻への註を比較すると、ブレヒトは、「処置」の上演を主張する時にも、拒否する時にも同一の理由を持ちだしていることが分る。これは、政治主義的解釈に対するブレヒトの自己防衛的なアイロニーであろう。しかし、より重要なのは、かれが作品において、若い同志の役を、四人のアデテーターに、次々と交代に与えているという表現方法そのものである。この表現方法は、特定の個人ではなく、組織内の全成員が、「自己の中の若い同志」を殺してしまうことを意味しうる。ブレヒトは、その意味を、自己の理論や教科の視点から把握するように、即ち、一人一人の演技者が、感性的未熟さを捨て、理性的な党の論理に入っていく過程を把握するように要求したのである。その場合かれは、感性的↓理性的という変化は意図したけれども、その変化が次々に循環して行く関係をそれ以上追求しなかった。従って、役を循環させ、自己の教化方向を貫徹させることによって、役を循環させる力が何から発しているのかの問題を深化させ得なかった。しかし、ブレヒトの表現方法は、政治的関係の極限におかれた存在が、無意識的に、ある力のために循環しはじめることを暗示し、それゆえ、我々の表現方法や思想への示唆を含んでいる。

本来、主体的関係である芸術を、ブレヒトは自己の資質と政治的立場から、可能な限り、客体的手段として提出した。表現における美の一つである喩は、かれの場合には、作品全体が社会的存在に対する喩となり、矛盾を感じうる能力としての想像力を刺激することによって、社会的存在と芸術の分裂を限界提示したのである。ブレヒトの方法のうち、たとえば、ここでとり上げた循環方法は、我々の自己史の重量を対象化し、その無意識的な、

抗い難いようにみえる循環の突破口を、表現の上で先取する道を与えるかもしれない。その時、この創造過程は、手段であると同時に目的になるであろう。ブレヒトの方法は、有効性の立場から導かれたために、いわば思想的に固定されたまま、その影を未来に落している。逆説的にきこえるかも知れないが、我々が、芸術の政治からの自立を確認するためには、ブレヒトの声なき呻吟を聞き、又、自らも混迷の季節に呻吟する必要があるのだ。そして、さまざまな死者たちのために我々の口からもれるこの呻吟こそ、我々の内部意識を変革する形象を生み出すであろう。

ハイネの序文に関する序論

いままで親近した詩人が自分の当面する問題から離れつつあるのを予感するとき、私たちは、はじめてその詩人を総体的に理解し得る最初の契機を手に行っているのかもしれない。私が、私たちの意識や戦後史の歪みを描こうとしている過程では、ハイネのことは遠い夢のようにしか思いださないのであるが、私が行き詰っていると、うつろな休息の上に、(ハイネの作品には、なぜ序文が多いのであろうか)という疑問が影を落すのである。ハイネが多くの序文を書かざるを得なかった必然性をさぐることによってハイネの表現の本質へ迫りうる一つの道が開けるのではないか。この疑問の双生児として別の疑問がわいてくる。序文という、いわば作品に外接する文学空間から表現の本質に迫りうるのであろうか。もし作品の表現過程が完結性を帯びているのであれば、序文から作品の内容を裁断するのは邪道ではないか。この二種類の疑問をひきずりながら私はいま次のような計画を立てている。ハイネの自己作品に対する批評を系列的に確認すること。また、ハイネという動揺にみちた詩人の表現を序文という、作品外へゆらめき出つつある空間の系列でとらえ、いわば相乗作用によってハイネの特質を見出していくこと。私がハイネの序文群に固執する要因をもう一つかいておけば、さまざまのハイネ論において、序文の引用される度合が極めて多いにもかかわらず、それらのハイネ論が序文そのものの構造の分析にまで突き進んでいないという不満である。それゆえ私は、作品Aの序文↓作品A、作品Bの序文↓作品B、作品Cの序文↓作品C……という方向とは直角に交差するような、作品Aの序文↓作品Bの序文↓作品Cの序文……という方向をとってみたい。

序文群の年代別の表は左記のようになるが、死後発見された原稿で年代不明のものがあるので、他の資料によって補足する必要がある。後記、結語、追記も、表現次元の上で序文と共通性をもつので表に加えた。

作品	年代	序文
「旅の絵」第一卷	一八二六	同上への序文
「旅の絵」第二卷	一八二七	「旅の絵」第一卷第二版への序文
「歌の本」	一八二八	「旅の絵」全巻への結語
「旅の絵」第三卷	一八二九	「旅の絵」第二卷第二版への序文
「旅の絵」第四卷	一八三〇	同上への序文、および序文への序文
		同上第一部への序文
		同上第二部への序文
		同上第一巻への序文
「ドイツ宗教哲学史」	一八三四	「旅の絵」第四卷・第二版への序文(草稿)
		同上への序文
「フランスの状態」	一八三二	「旅の絵」フランス語版への序文
「ロマン派」	一八三三	「ロマン派」フランス語版への序文
		「歌の本」第二版への序文
		「歌の本」第三版への序文
「サロン」	一八三七	「告発者について」(「サロン」第三卷への序文)
		同上への序詩
「新詩集」	一八四四	

「ドイツ・冬物語」	同上への序文
「アッタ・トロル」	一八四六 同上への序文
「ロマンツェロー」	一八五一 同上への後記
	一八五二 「ドイツ宗教哲学史」第二版への序文
	一八五五 「ロマン派」フランス語版第二版への序文
「ルテツィア」	同上フランス語版への序文(三月)
	同上への序文・草稿(六月)
フランス語版詩集「詩と伝説」	同上への序文

このリストを一応の手がかりとして、ハイネの序文群が無意識のうちにひきよせている問題へ接近してみよう。いうまでもなく、序文は、問題提起の出発点である序論とは異なり、我々の前におかれた作品の冒頭にあるといえ、表現過程では、包括の過程として、結果として現われるのであって、決して出発点としては現われない。この確認は、ハイネにおける長い序文の多さ、一八三〇年代前半における序文数の多さ、同一作品に時間をおいて複数の序文を与えている事実と共に、ハイネの特質を論じることの意味を重くしているはずである。私は、ハイネの文学空間の動揺性の検討を個々の作品についておこなう前に、序文という形式をとりながらハイネの意識内部においても生成し崩壊しつつある過程的なものを追求していきたい。そうでない限り、評価の軸を思想におくか表現におくかに関係なく、ハイネの作品論は、私たちの現在到達した段階から、補完的な枠を設定し、ハイネの欠陥を測定するという空虚なものに収斂していくのではないかという危険を感じる。

ところで、ハイネに多くの序文を要求した条件を想定すると、大体次の三つになる。これらは複合している場合が多いのは当然であろう。

- 一、ドイツ語の作品をフランス語で翻訳出版したとき、またパリからドイツ語の作品を書き送ったときに、フランスとドイツの状況の差を考慮に入れて書く。
 - 二、作品が書かれた時期の発禁・検閲による圧迫や出版者の修正・削除について何年か後に言及する。
 - 三、自己の批評的立場、思想の軸が変化したことを、以前の作品発表時と現時点の関係において表明する。
- 具体例を追っていくと、まず、一八三〇年の七月革命の後にパリへ移住したハイネは、異国の新しい読者へ作

品を手渡しながら、次々と序文を添えている。

「文体、思考の連関、推移、着想、特殊な表現方法——要するにドイツ語原文の性格は可能な限り、一語一語、フランス語訳『旅の絵』に移されている。」

この序文は、当然のことをのべているようであるが、逆にパリでかかれた作品がドイツで出版される時、大きな制約を受けたことを考えれば、ハイネの解放感をうかがうことができる。この解放感「私は七月革命後、私の表現方法にある変化を与えようと考えた」という方法上の解放感をひきおこし、また、次のように、状況への没入という形さえとるに至る。

「もう、これ以上書いていられない。窓の下の音楽が、私の頭を酔わすのだ、リフレインがますます力強く響いてくる。」

Aux armes, citoyens、市民よ、武器をとれ、」（「旅の絵」への追記・一八三〇年十一月）

これとは逆に、ハイネがドイツの読者へ呼びかけるときはどうか。

「ドイツの思想の上にその黒・赤・金の旗を掲げよ。この旗をもって自由な人類の旗じるしとせよ。そうすれば私は喜んで自分の心臓の血を捧げよう。どうか安心してほしいが、私は諸君に劣らず祖国を愛している。いや、この愛のためにこそ私は十三年間流適の生活を送ってきたし、またこの愛のためにこそ、ぐちもこぼさず、いやな顔もみせず、おそらく永遠に流適の生活へ帰っていくのだ。」（一八四四年「ドイツ・冬物語」への序文）やはり、特定の状況にある読者への呼びかけという姿勢がうかがわれている。この目的性は、読者の反応に対する配慮へ至る場合が多い。たとえば、一八三二年の「フランスの状態」への序文でハイネは「一にぎりの田舎貴族たちは、この国民を、しかも火薬と印刷術と『純粋理性批判』をつくりだした国民を瞞着しようと妄想している。この序文を中心にして激しくドイツの支配者を攻撃したが、その直後「序文への序文」を更に書き加えている。この「序文への序文」という発想自体、ハイネのゆらめく未完性と自己増殖性を暗示し、たとえば「批判の批判」という風な発想との差異を考えさせる。ハイネはこう付け加える。

「私はいま『フランスの状態』の序文について更に書き加えるけれども、私が現在のドイツの権力者を特に刺激し、傷つけようと意図していると思っはしくはない。私はむしろ、私の表現を、真実を損なわない限りやわらげようと試みたのだ。だから、あの序文は、ドイツではいまのところ激烈すぎるといふ批判を聞いても、殆んど苦にしない。」

しかし、ハイネが、反響や検閲という条件によく関心をもっていたのは勿論である。一八四〇年代にパリからアウグスブルグ一般新聞へ送った通信文をまとめた「ルテツィア」をドイツ語で出版した後に、ハイネは直ちに仏訳を出しているが、その序文には次のような意図がのべられている。

「多くの教養あるフランス人においてさえみうけられるドイツ語理解力の欠除のために、我が同胞の一部の男女が、私が著書『ルテツィア』で全パリを罵ったとか、フランス人に尊敬されている人物や事物を陰險な冗談でこきおろしたと多くの人々に信じこませる結果を許したのである。従って、できる限り早いうちに私の著書のフランス語訳を出すことは、私の強く願うところであった。ハイネの読者に対するこのような配慮は、たとえバヘルダーリンが「ヒューベリオン」への序文で読者への配慮から作品構成を変更しようとしたことへの恥しきの表明と対照的であって、ハイネの特質を逆照明している。

ハイネの表現における目的性、現実への関心は、同時に表現を規制する外的な力への意識となって現われてくる。序文に示されたものをいくつか年代順に上げていこう。

「尊敬すべき検閲官の色々な要求を避けるために、私はしかたなく、一定量の錫を鑄物の中へ投げこんだ。」（「旅の絵」への結語・一八三〇年）

「私が最初に発表した雑誌『文学の欧州』では、いま私がここに印刷しているうちの数ヶ所が欠けている。雑誌の経済が数ヶ所の省略を要求したのである。」（「ロマン派」第一版への序文・一八三三年）

「次の詩を私は今年の一月パリで書いたのだが、当地の自由な空気は、本来私が好む程度以上に鋭く、多くの詩句の中に吹きこんでいた。私はすぐに、ドイツの気候に耐えられないと思われる箇所を柔かく書きかえたり、削除したりした。」（「ドイツ・冬物語」への序文・一八四四年）

「この詩の内容と形式は、その雑誌（注・ラウベ編集の『エレガント・ヴェルト』のおだやかな要求に応じなければならなかった）ので、私はまず印刷を許される章だけを書いていったのだが、それもかなり書きかえられた。」（「アッタ・トル」への序文・一八四六年）

「この本の第一版が印刷を終えて私の手元に来たとき、削除されたあとが至るところに見出されたので少なからずおどろいた。ここで形容詞が、あそこで挿入句がぬけ、論述過程などおかまひなしに、まとまった箇所がはずされ、その結果、意味だけでなくしばしば意図そのものが分らなくなっていた。神への恐れ以上に、地上の皇帝への恐れが、削除という行為をまねいたのだ。」（「ドイツ宗教哲学史」第二版への序文・一八五二年）

「読者の公正な判断によって、この書簡が最初に印刷されたときに著者がたたかわなければならなかった場所的ならびに時代的な困難さが考慮に入れられることを期待する。……場所的な困難というのは検閲に、しかも二重の検閲にあるのだ。というのは『アウグスブルグ一般新聞』の検閲はバイエルンの役所の検閲以上にきびしかったから。」（「ルテツィア」フランス語版への序文・一八五五年）

一八三五年のドイツ連邦議会によるハイネ以下、青年ドイツ派の著書発禁決議に集中的に示されているように、ハイネは表現を制約する力に直面せざるを得なかった。かれは、いまから見れば微細な事象をくわしく論述し、さまざまな比喩や寓話を試みている。表現を制約する力への直面ということでレーニンを想起すると、かれは「なにをなすべしか」への序文で、微細な対象に関する論争も状況の根源をついていけば意義をもつと語り、「帝国主義論」への序文では、検閲を通過させるために例証を日本に求めなければならなかった苦痛のべている。ハイネの文学的活動についても、これと同じことがいえるであろうか。ハイネは当局と出版社の二重の検閲とのべているけれども、実は三重の、つまり著者そのものの動揺という内部的検閲も無意識のうちに存在したのである。ここにこそ、ハイネが序文という作品に外接する空間において外部的検閲にふれながら、いつの間にか思想変化を告白してしまう事態の要因がある。

「私自身が神の慈悲を必要とするようになってから、私は全ての私の敵たちに特赦を与えてきた。身分の非常に高い人々や非常に低い人々について書いた多くのすぐれた詩も、それゆえこの詩篇には入れないことにした。いくらかでも神そのものに対するあてこすりを含んでいる詩を、私は不安にかられて火の中に投じた。結構なことに、詩は三文詩人よりもよく燃える。」（「ロマンツェロー」への後記・一八五一年）

「正直な人間には、どんな場合にも自らの誤りを公けに告白するという永久に意味をもつ権利が残っている。そして私もこの権利を恐れずに行使したい。従って私は包みかくすことなしに、私がこの本のうち、とくに神という大問題に關している部分は全て誤っており、考えが足りなかったことを認める。」（「ドイツ宗教哲学史」第二版への序文・一八五二年）

ハイネの転向として、よく引用される箇所であるが、ここでいう神を神学的に解さず、「現実ともつれ合い、からみ合い、いわばその中に閉じこめられている」と思われた、ハイネの内部意識の荒野への怖れと解すべきであろう。表現された言葉の表象にとらわれさせなければ、ハイネの全ての表現は一つの大きな動揺の告白の連続であったということもできるのだ。しかし、ここで誤りの告白が、序文という公開の空間でおこなわれている

のに注目すべきである。それはハイネの公正さを示すようであるが、実は、ドストエフスキーが「地下生活者の手記」で言及しているように、ハイネは生涯にわたって「公開の告白に真実は含まれていない」という考えを抱いていた。(例。アルフレッド・マイスナーなどの談話) いくつかの重要な問題に対するハイネの批評は、その後の自分自身に対して最も適確にあてはまるという奇妙な関係が私たちを驚かせるのであるが、この場合もそうである。ハイネも、この奇妙な関係を予感していたにもかかわらず、全ての表現に、あえて公開的な性格をもたせようとしたために、一種の無理が生じたと考えられる。自らの動揺を他への顧慮なく追求する態度が、無意識のうちに減殺され、同時に、そのために、公開された表現が不十分なままで放置される結果を招いている。現代の私たちも、意識の根拠の変移を、自己弁護のかたちで表明するのではなく、眼にみえない領域で、沈黙のまま、なだれのように崩壊し、表現にならないまま消え去ろうとする自己の中の呻きに耳を傾けつつ、他への顧慮なく表現していかなければならない。

ところで、私は、ハイネの序文群を必要ならしめた条件について考察してきたが、先に上げた三つの条件は、互いに他を導きながら循環していると考えられる。告白の場としての序文群で下降的崩壊という形をとっているハイネの表現の特質は、革命直後の序文群で上昇的高揚という形をとっている表現の特質と方向は異なっても同一の流れに属しているからである。もしそうであるとすれば、私は、この循環の底にある表現の特質を追求してみたい。

ハイネの表現における特質は、付加性、断片性、変化性ということが出来る。まず、かれの作品の詩篇、散文のいずれもが付加性を帯びており、序文群においても、序文という概念を無視したような饒舌が続き、とくに著しい例は、「旅の絵」結語(一八三〇年)における投獄された皇帝マキシミアンを慰める道化クンツ・フォン・ローゼンの話、「ドイツ宗教哲学史」第二版への序文(一八五二年)における「ヘーゲル学派の門番」ルーゲへの言及などである。ハイネの饒舌は、光彩を放つ名文になるかと思えば、不必要なほど低空飛行するが、この揺れがハイネの思想的、方法的な転機に立つとき現われてくることは注目すべき事実である。そして、序文という形式がすでに付加性を帯びており、ハイネの付加的に開かれた表現意識に適合していたことも重要であるが、いまは紙数制限のため、序文群の全文を訳出して検討することができない。またハイネの断片のままに終わっているいくつかの小説(例。「バッハ・ラッハの師」Der Rabbi von Bacherach)や、断片性を逆用した警句風の散文群についても別の機会に論じてみたい。

付加性は表現の核心において断片性への傾斜と交差している。ハイネ自身も、断片性を自覚していくつかの序文の中でふれている。そのうちで興味深いのは「ドイツ宗教哲学史」の第一版、第二版のそれぞれに、自らの作品の断片性に言及しながらも、その断片性の評価、これからの取り扱いに関する方向が全く相反することである。

「……出版社からの催促、出版社の財政の悪化、研究資料の不足、フランス語を使いこなせないこと……などのために、ここにある本は、みかけのまとまりにもかわからず、より大きな全体の断片であるにすぎない。」(「ドイツ宗教哲学史」第一版への序文・一八三四年)

「ここにある本は、断片的なものであり、断片のままにとどめるべきものである。正直に言えば、この本を印刷に付さないで置きたらと思う程だ。この本の第一版が出てから以後、多くの事柄、とくに神についての私の考えがずいぶん変り、いまのよりすぐれた確信と矛盾しているからだ。」(「ドイツ宗教哲学史」第二版への序文・一八五二年)

また、自己作品の未完了性に関して、微笑を浮かべながら語っている文章がある。

「そして『アッタ・トルル』も、ケルンの大寺院や、シェリングの神や、プロイセンの憲法などのようなドイツ人の全ての大事業と同じような目があった。——つまり、それは完成しなかった。」(「アッタ・トルル」への序文・一八四六年)

ハイネの断片性は、かれの思想・表現における不安定さと深い関連をもつけれども、あらためてハイネの序文群を見渡すとき、問題の根底にあるのは、表現主体の動揺・変化性であるのに気付く。この特質を、ハイネの空想意識、時間意識から追求してみよう。手がかりとなるのは、すでに引用した「ルテーティア」への序文における次の文章である。

「……著者がたまたまかわなければならなかった場所的ならびに時代的な困難さが考慮に入れられることを期待する。」

表現の自立性にあくまで固執せずに、困難を考慮に入れよというのは、ハイネの弱さであろうが、かれも本質的な地点では、この言葉にかかわらず不敵な、かつ祈りに満ちた貌をしていたであろう。私はただ、ハイネのとらえた「場所的ならびに時代的な困難さ」の意味を考えてみたい。それがハイネの表現意識を決定していると思うからである。

先にのべたように、ハイネは、場所的な困難ということ、当局および出版社による二重の検閲であるといっ

た。具体的な調査をしていないので、その程度がどの範囲にまで及んだかは論じることができないが、かりに、これらの二重の外部からの困難がないと仮定した場合に、ハイネの表現はどうなったであろうか。私は、やはり民主的原理という、ハイネの終生抱き続けた理念が、付加的・断片的な幻想と相乗されて作品を生み出していったであろうと想像する。問題は従って、ハイネの内部的な困難さ、つまり、自らの民主的原理や幻想性自体の批判的な対象化へ、かれの力が注がれなかったことにあるのだ。

「私は、愛撫や陰謀によっても、脅迫によっても無智や誤りへ引き裂かれぬ勇氣をもっていることを誇りとしている。自分の心臓が要求し、理性が許す限界にまで歩めない者は憶病者であるし、自分が望む以上に歩むものは奴隷である。」（「フランスの画家」への補遺・一八三三年）

たしかにハイネはこの意味では憶病者ではなかったけれども、それゆえに奴隷に近ずいたのではないか。「サロン」第一巻への序文（一八三四年）において、ハイネは、「私は自由の奴隷である」というロベスピエールの告白を引用しながら「理想が我々をつかむ」ときの抗いがたい力について語っていた。その圧倒的な力を受けとめることができたのは、当時のドイツの水準をはるかに越えたハイネの運動性をもつ抒情のありかたに要因をもっているのであるが、

「……海が、その秘密をもらしたら、世界を解く言葉を心臓にささやいたら、休息とはお別れだ、静かな夢とはお別れだ、私がすでに、あんなにうまく書きはじめて、いまずぐにでも続きをかいていこうとしている小説や喜劇ともお別れだ。」（「サロン」第一部への序文・一八三三年）

という風に、内部の表現意識の連続性が、外部状況の変化によって断絶してしまう。外部の革命的状況にのりうつつで発想することの空しさは、現代の私たちも深く自戒しなければならぬ。ハイネの言葉をかりれば「自分の心臓が要求し、理性が許す限界にまで」歩み、かつ「自らが望む以上に」は歩まず、いわば、この限界線を平面ではなく垂直に上昇・下降しながら、外部の状況と内部の抒情をつなぐ関係を究明すべきであろう。ハイネの表現方法における移行は、国境を越えるほど容易ではなかった。その象徴的な苦しみが、「新詩集・序詩」に現われている。

ハイネがのべている場所的な困難さは、必然的に時代的な困難さと結合しているけれども、

「一般に、私の最近の意識から生じる作品は、つねに時間的狀況に制約されている。」（「ロマン派」第二版への序文・一八三五年）という文章に示されるように、ハイネの意識においては、外部からの時間が、主体的時間

よりも優位を占めており、そのことへの自覚のあいまいさが、思想過程におけるかれの批評主体の未確立と対応しているといえよう。

ハイネは一八三〇年の七月革命を軸として、時間概念の区分を意識し、「Periode」期間、時間、時代」という言葉をししばしは用いている。

「この作品を、私は決して孤立した姿においてでなく、一個の生活期間 *Lebensperiode* の終結であり、同時に世界期間 *Welperiode* の終結と一致するものとして提供する。」（「旅の絵」第四巻への序文・一八三〇年）

「最近まで愛國的頑迷の期間に in der Periode einer patriotischen Beschränkung ौरゆる方向から聞かえていた中世の残響」（「旅の絵」第二巻第二版への序文・一八三二年）

「ドイツにとって、否定の期間 *la periode des négations* = *die Periode der Verneinung* は、まだ過ぎ去っていない。それは、やっと始まったばかりである。」（「旅の絵」フランス語版への序文・一八三四年）

この用い方は、ハイネがゲーテを批判するときの「芸術時代の終り」*Das Ende der Kunstperiode* という用い方と同じである。状況の転移と、表現方法の転移を短絡させてしまったところに、ハイネの悲劇があるのでないか。なぜなら、表現史の転移は、外的に強制されるのではなく、状況と表現主体を結ぶ関係が、言語造成の総体的把握を必然的に変化させるときに生じるのだから。表現史に限らず、一個の主体の思想史においては、内部変革に媒介されない限り、いかに状況が決定的な転換の意味を内包していても、表現者自体の内部で、*Periode* をおしすすめることは不可能なのである。

ハイネにおいても、後進ドイツでの苦しみから一八三〇年の七月革命の成果へ、そのまま乗り移ったこと、しかも低次の市民革命の段階の中に、革命の究極的ヴィジョンを錯覚してしまったことが逆に、一八四八年の二月革命の敗北後、ひたすら後退をくりかえした結果として現われている。かれは、状況と表現方法を短絡させていたため、傷はより深かった。しかし、これによってハイネの文学的活動の意義が消えるわけではない。先にのべたように、ハイネは自らの表現が過渡期における、ある根源的な要因に根ざしているのを自覚していたし、後世の読者が、ハイネのたたかいたを、かれと同時代人々が怪物や巨人に対する原始人のたたかいたに対して感じると同じような微笑をもって眺めるであろうことさえ知っていた。この条件・限界をみつめつつ、それを逆用して自己の抒情をのめりこませていった点にハイネの意義を認めたいと私は考える。このこととハイネにおいて、ししばし本文よりも序文ないし後記の方がすぐれているという逆の現象が生じることの間には深い関連があるので

はないか。

その要因をいくつか考えてみると、まず、ハイネの資質からいって、本文がつねに未完、断片の傾向を帯びているため、全体を見通せる序文空間に立つとき、全体への統覚が、より強く機能する。また、同一作品が、異なった条件の下で再版される場合も、自己の表現史をふりかえる機会を与えられる。これらの外に、ハイネが状況と内部意識の緊張関係を明確に追跡し、言語の意味が外部の指示にとまらず、いわば言語の内部に滲透して行くように書きはじめる比率が、序文を書く場合に大きいと考えられる。

にもかかわらず、ハイネは、序文群にゆらめきでる抒情の力学をとらえつくすことはできなかったようである。このことを象徴する文体を対比してみよう。

Ich weiß nicht, welches wunderliche Gefühl mich davon abhält, dergleichen Vorworte, wie es bei Gedichtesammlungen üblich ist, in schönen Rhythmen zu versifizieren.

(自分にもよく分らない不思議な感情が、詩集をつくるとき普通であるように、美しい韻律をもつ詩句によって序文を書くことから私を制止する。——「歌の本」第二版への序文・一八三七年)

Ich weiß nicht, welche sonderbare Pietät mich davon abhält, einige Aus rücke, die mir bei späterer Durchsicht der vorstehenden Blätter etwas allzu herbe erschienen, im mindesten zu ändern.

(自分にもよく分らない奇妙な畏敬の念が、書きおえた草稿に後で目を通して、少しきびしすぎると思われる数ヶ所の表現をいくらかでも書きかえることから私を制止した。——「旅の絵」第四巻への追記・一八三〇年)

構文のみならず、何ものかを予感する、ハイネの抒情のかたちまでが驚くほど類似している。とくに書きだしの言葉は、一八二〇年代にかかれた詩「ローレイ」の冒頭の句「なじかば知らねど、心わびじ」*Ich weiß nicht, was soll es bedeuten, daß ich so traurig bin;* を想起させる。この句が、ハイネの全ての表現の核心に秘められており、表現主体がある危機に面したとき、さまざまなかたちをとって言語の表面へ上昇してきたのではないか。この論理化を中絶したままで「何ものか」を語るのは、ハイネの根源的な特質である。序文や後記には、とくにそれが著しい。

「哀れな、幽閉された国民よ、困苦の中にあっても絶望するなかれ！……」

私の胸から氷の堅い殻が溶け去り、奇妙な憂愁が私にしのび寄る。——それは愛であろうか、本当にドイツ国民に対する愛であろうか。あるいは、それは病気であろうか。」「旅の絵」への結語・一八三〇年)

「たくさんの人々、たとえば私の母が、祖国で私を愛してくれた。——しかし、私は何故か知る由もなく、ただ、そうせざるをえなかったために出かけたのである。……その後、私は疲れて気が沈んだ。」「サロン」第一巻への序文・一八三三年)

「勝ち誇るプロレタリアートが、全ての古いロマンティックな世界秩序と共に亡びるのであろう私の詩を脅かす破壊のことを考えるたびに、言語に絶する憂愁が私をとらえる。」「ルテツィア」フランス語版への序文・一八五五年)

詩から状況参加の散文へ向かわせたのも、未完の断片的な本文から序文をはみださせたのも、共にハイネのこの根源的な特質に由来している。あるいはいい方をすれば、ハイネとは静的な抒情を、状況を媒介として、そのことがひきおこす欠陥を半ば意識しながらも、止むをえず運動させていった文学的事件なのである。さまざまな時期、内容、意識の境界線を、分裂しながら走り抜けていくハイネ的な表現主体を、現実過程の歴史と幻想過程の歴史のある交差点が要求し、かれを通じて語りかけていくように思われる。「ローレイ」のひびきが、大衆の中に生き続けているように、ハイネの文学的苦戦の呻きを、一段と困難な過渡期にいる私たちは意識的に受けとめ、発展させなければならぬ。その際、ハイネの *Ich weiß nicht* の構造と、私たちの *Ich weiß nicht* の構造の関連、力学の分析が必須の課題として浮び上ってくるのであるが、その作業の展開は、この序論とは別の空間と時間に属している。ここまで書いてきたとき、新しい疑問が刺のように突きささってくるのである。序論というかたちでしか書けない段階があるのではないか。もし、そうであるとすれば、その意味を追求していくことなしには、序論を書く意味もなくなってしまうのではないか。

最後に、ハイネの序文から次のものを引用しておく。

「……このような未完の形で、恐らくは内心から生じるのではない欲求に従って、私はいまこれを読者の手にわたす。」「アッタ・トル」への序文・一八四六年)

〈第n論文〉をめぐる諸註

第n論文に〈〉をつけたのは、それを強調するためでもなく、いつか未来にかく予定だという意味でもない。第n論文が、仮構の位相にあることを示すのである。

またnというのは、いままでかいてきた論文の順序を示す数であるが、第n論文では、他者の作品の分析をするのではない。たとえ結果としてそうなくても、主眼は、この仮構の論文をかかせる何ものかの力を追求することである。諸註とは、このことを示している。

いま、ここで第(ロー)論文までの文章を構想すると共に第(コ)論文以後の文章に註をつけていくとすればどうなるか。

この仮定をするとき、第n論文以外のすべての論文に〈〉がつけられ、それは、第n論文が意識的に、また必然的に〈〉に入り、論文系列の位相から逸脱した結果として可能になっている。

〈第n論文〉をめぐる諸註が、既成の研究論文の枠内に、どんな影をおとすか。枠をこえて発散するか、枠の中で収束するか、枠をつくっていくか……。

さまざまの〈私〉たちが、これに似た情念をかすめて通りすぎているとき、私〈私〉ではないは、プレヒトに関する三番目の論文(以下B3論文と略す)をかこうとしていた。しかし、どうしても、かく気にならないので、その情念の構造をかいてみようという試みにのめりこんだ。

反小説に対応する反論文——と称してもよいが、むしろ、その発想から遠ざかるうとして〈B3論文〉と題する十数枚のメモを構成しはじめ、〈〉の記号は、原則として、私が、ある言葉の位相を転倒ないし変革しようとする場合に使用(私用)することにした。

そのときまで私はプレヒトに関する論文を二つ(以下、B1論文、B2論文と略す)かいていたのであるが、〈B3論文〉のメモは、はじめのうちB1論文、B2論文をよみかえして、〈B3論文〉をかこうとする瞬間の私にとって、未熟、不足、欠陥とみられる表現傾向を指摘して、その原因を明らかにしようとする作業が中心を占めていた。

これを中断したのは、感覚的に耐えがたいためというよりは、それ以上に、指摘の基準自体が揺れ動くことに気付き、その作業を閉じられた形でなく開かれた形で発展させる契機が見出せなかったからである。

〈B3論文〉のメモは中断したけれども、破棄したり、忘却したりしたわけではない。他の仕事をしながら、むしろ、時と共に、〈未完了〉への責任が増大するのを感じながら時間が経過し、再びメモを手にとることになった。

以前のメモの方向と、いまとり上げようとする手の方向はラセン状の深淵(そこには、いくつかの記憶すべき〈死〉も横たわっている)を越えて不変の位相を保っており、私に〈ここから出発せよ〉とささやきかけてやまない。

〈註〉という形式が引きよせられてくるのは、そのようなときである。註は〈枝〉のように、みかけは非連続で、任意の長さで突出しているようであるが、枝の契機を〈逆行〉していくと、〈樹〉の総体が必然の方向に浮

び上ってくる。

未完了の〈B3論文〉を、いま、ここで、ある完了形へ導くものとしての〈註〉をかいていこう。しかも、〈B3論文〉と〈註〉にはさまれている間隙を縫い合わせ、過去の固有性へ収束するのではなく、逆に、その間隙のむこうに存在しうる全ての問題、ヴィジョンをとらえるために。

六つの項(六項↑↓六甲)でかきたいが、どうやら、はみだしそうな気配である。

ある必然性をもって対象としてはじめてた文学者の全作品を山系へ分け入るようにたどりながら、たとえば、否定の方法とか、テーマの類似とか、描写の背景にある自然とか、動作空間について思いをめぐらせたいという気持がありながらも、〈岬〉についてのみ触れざるを得ない場合がある。

〈岬〉は、韻律や、構造や、美的陶醉や、有効性などとしても存在しうるが、私は、これまでB1論文、B2論文で、ブレヒトを(一九五六年)以後の状況の視点を含めてとらえようとした。

私はブレヒトの固有の表現には一瞬ふれたものの、いま考えて、ほんとうにかきたかったのは、それにむかう契機や手続きであった。いまここで、(一九五六年)に関して、わずかな註をしておくことによって、私がブレヒト論からある表現へ接近する場合の必要条件をのべておく。

〈一九五六年〉は、たんにブレヒトが死亡し、その直後にハンガリア〈革命〉がおきた年ではない。資本主義社会と変質した〈社会主義〉社会を相関的に変革する方法を暗示している〈年〉なのである。〈進歩的〉な視点から〈西〉の代りに〈東〉をえらぶことは不毛である。(〈現代〉)にかかわる論争点の殆んどは、無意識のうち(一九五六年)以前におしこめられている。(一九五六年)は、他のことばに、まだ本当にはおきかえられていないし、実現されていない。

ちがったいい方してみると、〈政治〉の対極に〈文学〉をおく場合、〈政治〉の中に(一九五六年)をおかず、そのことによって〈政治〉も〈文学〉も固定させ、基準とする発想がある限り、(一九五六年)はその発想を告発しているのである。こんないい方では不足だ……しかし、私はすでに(一九五六年)以後の問題へ投げられた者の眼で、ブレヒトの〈岬〉を、ふと、見上げているにすぎない。〈泳ぎ〉を殆んど知らない私にはそれ位のことしかできないが、そのとき、私にとって(一九五六年)以後をある怖れと共に予感した〈ブレヒト〉が最も生き生きと、創造的にみえたのは確かである。

政治的にというより、抒情的に〈ブレヒト〉(ブレヒトではない)を見上げる機会が、これからもあるだろう。(一九五六年)に限らず、また、状況の側面に限らず、〈海〉から〈岬〉を眺めざるをえない関係が、この世界にある限りは。

ブレヒトの詩「ドイツ」から。 „Mögen andere von ihrer Schande sprechen, / ich spreche von der meinen.“ 汝は汝の恥辱をかたれ、私は私の恥辱をかたろう。

「ブレヒトの方法」(一九六三年——B1論文)

「ハイネ『北海』における詩と散文の相関性」(一九六三年——H1論文)

「ブレヒト『処置』の問題」(一九六四年——B2論文)

「ハイネの序文に関する序論」(一九六五年——H2論文)

このように私が、B論文の系列とH論文の系列を交互にかいていくのは、文章が活字になる以前からの傾向であり、私の卒業と就職に形式上の役目を果たした論文も「ゴットフリート・ベンとブレヒトにおける表現主義」であった。

擬似的な図式化や運動に陥りかねないにしても、対比それ自体の〈異質さ〉は、決して誤りとはいえないであろう。いままで私が意図しつつも果していないのは、その先のことであって、このような対比のやり方が、何か

の比喩であるはずなのに、それを〈比喩〉たらしめていないことである。

この方向での表現の可能性を模索している過程で、ある意味では相互に私から極めて遠い（と私には思える）プレヒトやハイネを論じてしまったのは、我ながら苦笑をさそう。

しかし、H論系列では社会主義生成期の表現を、B論系列では社会主義変質期の表現をさぐり、〈生成—変質〉の周期が歴史の位相でも、個人の位相でも開いた〈循環〉をする条件を持つ表現を求める、というのが、根底にある計画であった。

論述の方向からいうと、ハイネ論の系列では、固有の〈表現〉から出発して、それを彎曲させる〈状況〉へ上昇し、プレヒト論の系列では、彎曲して論じざるをえない〈状況〉から出発して、私に触れてくる固有の〈表現〉へ下降する。二つの系列のうち、とくに〈プレヒト〉論が〈非〉文学的な様相を呈するとすれば、それは、このような方向に沿ってかかっているためである。

B1↓H1↓B2↓H2↓という〈ジグザグ・デモ〉は、いま一つの壁に直面して、〈デモ隊〉は飢えたまま座りこんでいる。その地点は、B1↓B2↓の方向と、H1↓H2↓の方向との交差点ではないだろうか。

ここから再び動きだすとき、B3↓H3↓B4↓H4……Bn↓Hn……というかたちは、とらないであろう。私は、この場所と、一ぱん遠い場所の二つを結ぶ〈ジグザグ・デモ〉へ出発する。それが、前述の〈比喩〉の構造へ少くとも一歩は突入することなのだ。

どこかに〈文学〉とか〈仕事〉が客観的に存在するのではなく、ここから〈文学〉も〈仕事〉も創りださなければならぬ……といわせる力が私の内外にある。

そのとき、私は、立ち上って、服のほこりを払いながら、いままで無縁だと思っていた諸条件から、最も強く

規制されているのを直感する。それらに対して手にふれる順に、断片的なあいさつをしよう。

語学が苦手で、声量の小さい私にとって、人一倍〈苦痛〉な労働の場である教室。一方そこで予想しなかった理解や連想も生まれ、しかも殆んど表現にとらえられないまま消滅していく。

興味があるような、ないような顔をして座っている学生たちの表情、そこには、プレヒト風にいえば、マイナスの〈疎隔する効果〉Entfremdungseffektがあるといつてよいくらいだ。そして、その表情は、〈授業〉をやり、〈論文〉をかいているときの〈私〉の表情でもある。

教室でかいま見た〈マイナス〉の効果を相乗してプラスになしうるか。〈正確な〉時間割りに支配される教室と対照的に〈自主的〉な時間が流れるはずの研究場において。

〈私〉が論文をかくとき最も表層にある情念は次のようなものである。……国家の他の構成員よりも研究や発表の機会が多く与えられているのだから、何かしなければいけない。それに論文の数は奇妙な過程をへて生活に影響を与える。原稿も募集されている。期限は、いくらか延長してもらえらるだろう。枚数は適当なところであろう。あとで、ひっかかれないように、あたりさわりのない文体で自己主張をやらう。

もっと時間があれば。いつか、よいひらめきが訪れたら。すべての文献をよみつくしたら。本場で見聞をつめば……とつぶやく私の中の他者。そのときも足もとにおしよせる雑用、対人関係、生理的配慮。更に、名づけがたい領域での〈仕事〉。

私は、水たまりに空を映しながら、泥んこになって遊ぶ〈幼児〉の楽しさをもって、このような情念やつぶやきをつつめた。もちろん、やむをえず足をふみこむこともあろう。その場合は、〈やむをえない〉強制力を測定しつつ、このような〈職業〉の幻想性を、どこまでも下降していくのだ。おそらくは、この〈職業〉が存在しなくなる未来社会へまで。

慣性に従って、この幻想的な職業に埋没することを拒否する度合いは、生ぬるいと同時に苛酷な世界全体を拒否する度合と（どこかで）対応しているはずだ。（どこかで）を明らかにしなければならない。しかし、このような発言が許容される場合に生活しているのは怖いことだ。

すると、私は、いま意外にも、この註と関係（なく）次のようにかきはじめています。

（私）が、省略し、付け加え、変形したときに消えていったもの、激越に、不正確にかたるとき、あいまいに沈黙するときに消えていったもの……が、〈反世界〉のようなところで、時と共に巨大に膨れ上っているにちがいない。いつかよんだことのあるプレヒトの短篇

を教科書版でよみなおそう。……〈B3

論文〉へむかって粗い網のように投げた（）は、〈B〉や〈3〉や〈論文〉ではなく、（）自体を、まず包圍しているが、それは苦痛であるばかりでなく、私は（）を乱用しながら、（プレヒトは殆んど用いていない）このような位相での放蕩もありうることを味わっていた。

（）についての中間報告。私が使用（私用）する（）という記号は、欧文や日本語にみられる記号と一応無関係である。それらは殆んど引用、発言、題名などへ無意識に使用されているにすぎないから。

しかし、ごく少数であるが（）（あるいは（）や、その他の類似した記号）を、強調や、逆に、不確定の意図をこめて使用する例が、次第に目立ってきている。

表現に文字以外の要素（イタリック体や、傍点、傍線を含めて）が現われてくるのは、何かを暗示しているように私には思えてならない。言語や、それを使う意識、それらをもたらず現実過程に、ある動揺がうまれはじめているのではないか。その（動揺）は、表現の位相では、私の場合次のように現われてくる。自己や、他者の表現や、既成の一般的な表現への異相感を運動させたいとき。

この予感から私は、〈B3論文〉への註で、（）を、あえて乱用してみたが、それは、いま別のいい方をしてみれば、私の表現から逸脱していったものを求めるためであった。〈B3論文〉をかきながら、かすかに示されている（）の特性を、いくつかのべておく。

〈B3論文〉をかいているときの（）の位相は、かこうとするときの情念に対応する空間性の彎曲を帯びていたが、その後、〈B3論文〉への註、といいなおしたときには、記号は時間性の彎曲を帯びている。もしも、いいなおさずに放置したならば、空間性のままであったろう。ここから（）は、働きかける力によって、時間||空間のかたちを変えることがわかる。

（）をつけるのは、それによってある効果が生まれた、という終止の記号としてつけるのではなく、それによってある効果が運動圏に入る、という開始の記号として過渡的に、やむをえず、つけられるべきである。使用者が、それを自覚するかどうかにかかわらず、運動（縮少、肯定、否定、対応、交換、状態への介入……）をさせていく責任を背負いこむ。

記号でない（）（いまは、文字で、どう表現してよいかわからないが）が、つねに、表現の切断面を昇降しており、表現者と読者が記号でない（）の原理から応用までをとらえるのを待っている。

（）の中には、名詞だけでなく、あらゆる品詞が入りうるし、一つの単語だけでなく、文章（群）でもよい。また（）をつける対象は、過去の表現に限られず、未来の表現へ畏のように置くことが可能である。

歌、呻き、呼吸、沈黙……にもつけることができる。そしてつけることによってつけられるという関係も生じる。

無秩序になるのを怖れる必要はないだろう。記号にさえ固執せねばならぬ（私）とは何か、記号にさえ固執させる（表現）とは何か、という問いかけの方が、はるかに切実である。〈第n論文〉の記号から、まず出発することになるとしても、それは（ここ）から最も速くまで行くための準備なのだ。あえて誤りや矛盾をおかすにた

るだけの苦痛あるいは必然が、その背後にあるから。

冒頭で……〈第n論文〉が、仮構の位相にある……とのべた〈私〉にかわって、私は、次のように註をしておこう。

〈第n論文〉を仮構のまま放置しておいてはいけない。いまここから、へ〉の領域へ弯曲した力を逆用して、へ〉を出現させる力へ向って矢のように飛翔していけ。その的は、すでに〈第n論文〉だけとは限らない。

不確定な論文への予断

たえず一定の照明の下に監視されている空間で、自問した。……帆はなぜ美しいか。風を孕んでいるから。

この詩を絵にかいてみるとすれば、使用する色彩が、ある系列にかたよってくる。

万里の長城を構築する無数の手のような動作を文法的に構成すると……。

複雑な機械を媒介とする学習から得たのは、聴かないこと、聴かない方法を身につけることであった。

語学の時間へ、私はクラス討論の場として外接し、かれらは体制内の睡眠の場を求めて内接していた。

例外ばかり系統的に教えてほしい。その間に私は、一ばん意味のあいまいな言葉や文章をさがしてきたい。

二クラス分再履修して気付いたこと。各クラスで、それぞれがった教科書、教え方をされているようですが、それらの交差点に何かをねらって、むしろ自分のための仕事の素材として授業を扱っているではありませんか。

この作品には、数種類の翻訳があるので、それら全てを友人たちと一緒に比較対照し、各々の日本語のズレが、一つの原文から、どのように屈折しながら発生してくるか調べてみた。そのような箇所は驚くべき数に上り……。数ヶ月の間に教室でよんだ数個の短篇に共通して、一種の運動様式のように現れてくるイメージは……。

この詩人のやり方で私のたどった遠い夢のような運命を凶形で示すと……。

私は、いま、かれのことばを訳しているのではあるが、同時に、かれによって、そのことばをかきうつさせられているように思える。……仮説とは、建築に先立って作られ、建築が完成すると取り去られる足場のようなものである。これは、そこで働いている者にとって不可欠ではあるが、かれはその足場を建築物とみなしてはならない。

授業と関係なく思い知らされたことは、次は何かという模索のみが次の対象をつくり、その逆ではないことである。

誤りを含み、拡大する私の行動は、なぜきびしく批判されないのだろうか。私の立場にいくらかの正しさがあるのか、私の苦痛に対するいたわりか、口にするとなれあいになってしまうのか、本来、無視にしか働かないのか、……分らないので再び行動に移る。

(たくさんの記号や、文章の渾)

忘却していた副詞句などの群が、綿毛のように降ってくる。あのことばは、冒頭と結末で使用方向が正反対になっているはずだ。

〈……………〉

十数種の生物の眼の行列に似たそれぞれの表現は、私のかいたものではなく、学生諸君から私にあててこの数年間に提出された答案やレポートや書簡の断片であり、それらが私の記憶をとって再現され、その記述のしかたに私が介入しているにすぎない。語学を媒介にして、このような表現がうまれてくること、少くとも再現されてくることは一見、奇妙にみえるけれども、ほんとうは、語学を媒介にしているからこそ、これらの逸脱が可能になり、関係あるものたちの存在基盤も逆照明されてくるのではないか。

このような抽出の流れを、まだ数十倍にもわたって持続できるけれども、いまは、いくつかの理由によって中断する。いくつかの理由のうち最大のもは、もちろん、私が、この不確定な論文をかきつつあるということである。

十数個の抽出した例は、私が数年間に接した表現の量からいえば微少であるが、抽出の仕方は、数年間に接した全ての表現の質に対抗しうるはずである。それは正確さという意味ではなく、いま発表しうる範囲内で任意に、十分な資料や記憶なしにおこなわれたということによって一層そうである。

十数個の例に抽出したまま中断したことによる欠落を鎮魂するかのように、以前、教科書の中でも出会った文章がいくつか想起されてくる。

それらの表現が、全体としてまとまりをもつようになされていさえすれば、個々の表現は断片のままであってもかまわない。

私たちの宣伝の利益のためにも、私たちにとって解決不可能とみえる問題の一らん表を作ってみることはできないだろうか。

そして七年後、人間のいない戦場で絶望的な闘いをしている青年のもらす言葉を聞いて理解できる人は禍かな。

以上の三つの文は、それぞれ原文とは対照しないでよく。というのは、有名な人間たちの表現と、無名の学生諸君の表現とを私の不確定な想像の中で均衡させたいし、また、この論文では、何故か一つも固有名詞を使用したくないからである。

おそらく私のやりたいのは実在としての資料に迫りながら不確定な表現の意味を体系化したり、統計化して何かを論じること以上に、このような試みが、私にとって、あるいは、私をとりまく世界にとって、何の、どのような喩であるのかをとらえることである。この推測すら不確定なのであるが、少くとも、いままでも私のおこなっている作業が、不確定な主体による、不確定な表現を、不確定な方法で展開しつつあるということは確定的である。

数年間にわたって、答案、レポート、書簡などの表現を私に与えた表現主体は膨大な数になる。しかもそれ自体、全学生の極小部分にしかすぎない。かれらは、はじめに教室へ数十人の群に機械的に区分された存在として半年の周期で現われてくる。私は今まで授業や個々の存在の、かすかな記録としての登案やレポートを、早く処理し、眼前から去らせる対象として扱ってきた。しかし、これら全ての表現主体のとなえがたさ、不確定性は何か花束を投げこまなければすまない性質をもっている。更に、数多くの、私よりも本格的な論文を無意識にせよかきはじめている例、私よりも激しく、記号や空白を残している例の中に、自分の仮装した問題を見出さざるをえない。そして同時に、一すじのためらいが残る。即ち、私に刺激を与えた表現は、膨大な全ての表現から主観的にとりだされており、更に、一切の表現は出題における私の主観的な形式、内容の制約された上でおこなわれ、評価されている。また、個々の表現者は、他の表現を展望しえないのに、評価者である私にはそれが許されているという位相のズレがある。勿論、このズレは逆用可能であり、表現論、組織論、情念論その他へ飛躍もしているのであるが、まさに可能であるところで最悪の壁に衝突する。バリエード内の落書にくらべてどうしても本質的な課題と思えない。そのため退屈な授業をきく学生のように、私は、祭の対極に近い生活のすきまを偶然かすめて通る、この論文のテーマをもてあましてしまっているのである。

いや、おそらくこの関係は逆にとらえるべきであろう。さまざまの領域で閉塞を感じている私は、偶然かすめて

通りすぎる、どのような対象からも、この論文のテーマの根底を流れているような調子で、何かを論じようと思えば論じられるような段階に追いつめられているのである。私だけではなく、おそらく私にふれてくる一切のものが。従って、先に述べた不確定さ自体が情況的な普遍性を帯びているはずである。

この論文のはじめには、十数個の例文しか抽出していないけれども、かりに私にとって時間的だけとは限らない余裕があれば、そこに提出されるのは、試験、レポートなどの表現、その分析だけにとどまらない。この分析をやりながら、必然的に、試験の存在理由、語学教育の条件や研究との分裂に関する批判、他の教育労働や非教育労働との比較、使用した教材、授業のやり方に反映している体制や表現過程の構造などが問題になってくるであろうし、素材としての表現も、語学から、はるかに遠い領域まで包括されてくるであろう。

このようにひしめき合う問題群を断片的にせよ止揚していく方向があるとすれば、それは何であろうか。全てのやりたいこと、やらねばならないことを、重層的な一つの仕事として展開したい私にとってこの論文をかかしている契機を追求してみよう。

この文章より一年半前にかいた「(第n論文)」に関する諸註」との連続性および飛躍の問題がある。「(第n論文)」に関する諸註」が自分の研究領域の表現を総括することによって何かを語ろうとしているのに対し、いまかこうとするのは、その後の過程を基本的に動かしている生活の場、とくに労働の場において、いや応なしに接触する不確定な表現を総括することである。ここから何を開始するかは不確定であるにしても、その不確定さの発生する場所から尖端に至る過程で交差する問題は、極めて多岐にわたる。それは(……)のむこうの全てだといってもよい位である。その領域に突入するのは、やりたいことであり、やらねばならないことでもある。そして、この二つが一致するのは、白昼のように暗い季節には大変めずらしい現象である。

私は、さきほど、歯の痛み程度のことでも、全情況の課題と優に對抗しうることを発見した。そうであるとすれば、私は、この文章の方向係数となっている不確定性をかみしめながらことばの私有制を改革し、ことばのむこうへはみだし、(……)論の枠を突破するであろうし、そこが不確定性の原理を真に応用する世界であると予

断しておきたい。

この予断を深化拡大していこうとすると、私の運動を支えている文体はその不確定な軽さを増大していくようである。軽さという場合、支え、運ぼうとするときの感覚と云うよりは、吹きさらしの断崖に立っている感覚に近い。対象にとりくもうとしながら抽出に抽出を重ねる操作をしよう私の内的な流れ、一方、その操作を一層加速させるように迫る外的な力。私は言葉を失って立ちつくしてしまうのであるが、不思議に明るい気持で、この瞬間は、ある詩の一行から無限に語り続け、行動し続ける時間と交換可能であると思ひ、また、この状態は、一種の権力に対する黙秘と同じ位相にあると思う。では、その詩はどこにあるか、その権力を打倒するために何をなすべきか。

いま、この原稿用紙にかくという次元ではその追求を中断せざるをえない。私は何を表現したのであるうか。不確定さの極限からいえることは、私のかいてきたことと、かかなかったことが、相互に本文であり、註であること、および、この補完関係が、研究論文以外の領域でも私の根源的な怒りをよびおこし、それを突破する作業の原動力になることである。

この予断が、既成の表現形式から制約されるのではなく、創り出すように、方法的に孤立して収束するのではなく、全体性や他者の活動を包括するようにならなければならぬし、その一步は踏み出されている。まさに、そのために、ここで筆をおこうと私は決意する。

松下昇表現集について——北川透

ここには、別号2を『松下昇表現集』として刊行するに際して必要最少限のことのみを記しておきたい。

収録〈表現〉について、松下氏の意志の原型は、ここに収録されたものから「遠風」「循環」「(ハンガリー革命)——(六甲)」「(第n論文)をめぐる諸註」を除いたものであった。これらについては、今までの〈表現〉を総体的に止揚しうるときまで、再発表する意味がないというのが松下氏の考えであった。それについては、これらの作品や論文が、松下氏の〈表現〉を全体的に追おうとする読者にとって、は欠かせない重要な意味があるということで、あえて松下氏には同意していただいた。

〈表現〉の配列、構成、体裁はすべて北川が行なった。

松下氏がここに収録された〈表現〉について〈前史的表現〉と呼んでいることについて特に書いておきたい。むしろ、それはひかえめな彼のひとがらをあらわしているだろうけれども、しかし、わたしたちにとっては、これらの〈表現〉が松下氏のなかで〈前史〉の位置をあたえられていること、そのことにおいて今後展開されるであろう〈表現〉の大きな意義を考えると、それはめまいを受けるような啓示である。彼が最近の、この表現集刊行に関しての手紙で〈私がいつか私の前史的表現について、執筆、刊行、転載……のずれをふくめて表現

するだろう〉と書いてきていることを伝えることはわたしの義務である。

ここに収録された〈表現〉を読めば、彼の現在の〈六甲空間〉における〈表現運動〉の展開を必然にしている力がここにこそあることが理解されよう。しかし、わたしが原稿整理や校正の段階で練りかえし立ち止まらせられたのは、おそらくはその〈表現運動〉にも決して行きつかないであふれかえっている余剰のようなものである。それは一枚のピラの中にも含まれているものであり、その余剰によってこそ彼は常に〈運動〉の現存性を越えた〈運動〉であり続けることができているにちがいない。それらを含めた、全体としての〈論〉は、わたしがこの表現集を刊行した責任において必ず果たさなければならぬ課題である。

わたしは、これまで幾度も評論集や作品集の刊行を彼にすすめてきたが、それがこのような形で実現するとはまったく考えていず、どこか信頼のできる商業出版社から出してはというのがわたしの考えでもあった。それが先の〈前史的表現〉の問題もからんでか、なかなか松下氏の意志とならなかつたのであるが、別号(深夜版)の方式をとってから、急に、このような出版の形態があるなら、出してもよいという意向が伝えられることになり、『谷川雁末公刊評論』に続いて、『松下昇表現集』が実現することになった。そのことの現在の意義は、〈あんなかるわ〉26号の「発行のためのノート」にも書いたので繰り返さないうが、多くの読者の手から手へとこの表現集が渡されていくことを祈りたい。

一九七〇年十二月二〇日記

べき虚無感と共に、おれの肺から出る息が、こうささやいてるように聞えたのだ。北へ、北へ、青を、青を……。おれは、目覚めてから、夢の中の声を思い出し、こう考えた。おれの中の、おれに一番近い青の意味をとらえるには、おれの外の、おれから一番遠い青の意味をとらえなければならぬ。北の海へ行こう。岬に立とう。……そして、おれは、駅へむかって歩いている。おれが持てるだけの金をポケットに入れて。これからの何日かを、おれは、列車の中で過すことになるだろう。おれは、せまい空間に身を沈めながら、時間のたたないもどかしさをまぎらすために、おれの百科辞典を作成すると仮定して、その項目を考えはじめるだろう。ア、青。イ、色。ウ、海。……やはり、おれの言葉は、おれのまわりにしかゆらめかない。おれは、そのことに気付いて、絶えず震え続けていたガラス窓のように震えるだろう。窓ガラスには、もう一人のおれの顔が、歪んで映るだろう。夜ならば、一層はつきりと。映っている顔の内側、いや外側に、青いシグナルが見えるかもしれない。……おれが乗った列車は、その青をめざして走り、そして、おれも歩いているうちに、交通の激しい通りへ出た。横断したいが、シグナルはない。デモ隊の列にいた時には、シグナルの有無は問題ではなかったが……。トラック左へ。タクシ―右へ。バス左へ。オートバイ右へ。自家用車と都電が、左右から同時にやってくる。横断するのはむずかしい。車の流れには、殆ど切れ目がない。歩いているのは、おれだけだ。むこう側の歩道を、青いスカートの女が歩いて行く。あの女は、夢の中で見たおれの妻のあたりが似ている。子供は……そばにいないようだ。あの青いスカートを、おれのシグナルと仮定して、横断してみよう。早くしないと、あの女はいなくなる。走れ。警笛。ブレーキがきしる音。かけ抜ける。風景が一瞬、青さめる。やつと渡れたが、さっきの女は、青ざめた風景の中へ消えてしまったのだろうか。おれは、緊張と失望のために、ウンコしたくなった。この公園には公衆便所があったはずだ。ズボンを下して、しゃがみこむと、核兵器が現われる。発火装置、信管装置、爆発装置、核装置、それらの間にはりめぐらされた安全装置が現われる。あの青いスカートの下には、計算機があるのだろうか。指令装置、記憶装置、制御装置、書き出し装置があるのだろうか。おれが、たたかっているかのような錯覚に陥っていたのは、一時期にすぎなかったが、ズボンは、どんな時にも下げることを怠ってこなかった。……公衆便所の窓から見える煙突やビルの波。あの下では、労働する人たちが、労働している。おれが、

青をみつけに行く時にも、かれらは労働の場から離れることができない。貨幣のために。……貨幣を資本に転化するためには、貨幣所有者は、自由な労働者を商品市場に見出さなければならぬが、ここでいう自由とは、その労働者が自由な人格として自分の労働力を、自分の商品として処分する自由と、他方では、かれが、売るべき他の商品をもたず、自分の労働力の実現に必要な一切の物象から引き離されている自由という、二重の意味においてである。……ナンセンス、そんなことは、資本論にかいてある。そうだ、異議なし。……しかし、何がナンセンスで、何が異議なしなのか。くさい。肉食の罰だ。おれは、公衆便所から出よう。街からのざわめきは、一斉射撃の音か、海のとどろきか。風が強い。おれも、歩きながら、青をつきとめながら、労働しているのだ。公園の池に沿った道を駅へ。ポート乗場から、スピーカーに乗って流れてくる歌声。キラキラト、カガヤク、タイヨウ、セニウケテ、アオイウミ、オヨギマシヨウ、VACATION、タノシイナ……。おれは、いつも休暇をとっている。しかし、何からの休暇かは知らない。おれは、ポートの浮かばない、北の海へ行くのだ。青をたしかめに……。青とは、何を意味するのだろうか。青対おれ、イコール、権力対大衆だろうか。青をつきとめないままでは、あらゆる体制とたたかえないということか。それとも、現実対青、イコール、権力対根元意識なのか。いや、歩いているおれを、現実の項に入れてみよ。おれは、権力者になつてしまふ。いずれにせよ、この世界を支配している者は気をつけるがよい。全ての人間が、自分の青をつきとめ、揺り動かせるようになったときは、お前の終りの時だ。おれは、一人のバルチザンとして北の海へ行くのだ。池は過ぎた。この丘のむこうに駅がある。空は暗くなり、今にも雨が降り出しそう。おれが、岬を隠している最後の丘をよじ登る時にも、空は暗いにちがいない。おれは、自然に対して、何か抵抗の合図をしようと思うだろう。お前を喰にしてやるぞ。……おれは、一歩ずつ、北の海へ接近して行く。岬の先端では、こんなことを考えよう。人間は、何を愛するか。何に奮えるか。何を表現するか。……とうとう、おれは、つぶやいてしまった。この間には、青をたしかめないかと、一言も答えられない。おれは、せきがとまらない。首都の腐臭、いや海の香りの、あまりの青さに、おれはむせかえり、せきがとまらない。おれは、自分の枠からはみ出す時に、いつもせきをした。岬でも、おれは、せきをするだろう。海は近いけれども、まだ見えない。あとわずかの労力で、おれは、海の波動、海の色、海のとどろき、海のひろがり……。この、おれの青をたたえている容器を、一瞬の

うちにとらえてしまおう。その時から、おれと青との、本当のたたかいが始まるのだ。おれは、何かの予感に圧倒されて、やっとのことで岩にしがみつきながら進むだろう。おれの心は荒れ狂い……その時は、雨と風が渦巻いているだろう。まだ見えない海のとどろきは、渦巻きの中にのみこまれているだろう。そして、海は、どんな青で、おれを迎えようとしているのか。青以上か、青以下か。おれの身体からは湯気が立ち昇り、その直後に、青い血となって再びたたたり落ちるだろう。どこからか、インターナショナルの歌が聞えてくるかもしれないが、それは錯覚なのだろう。おれは、それが錯覚だと気付いてニヤリとするだろう。しかし、おれは、数年来忘れていた歌詞を思い出し、その最後の部分の妥当性を気にしたりするだろう。……雨と風が続く。海の青は、おれのものか。渦巻く音が、突然、変調し……何かの眼に射すくめられたように、おれが、じりじりと顔を上げた瞬間、海が、おれの全存在をおおいつくすような重量をもって膨れ上り、襲いかかるだろう。岬の尖端に出たのだ。おれの血は、海水のように冷え切り、のたうつだろう。おれが、意識しないうち、おれの唇は、青、と発音するだろう。海は、海の言葉を語れ。おれは、おれの言葉を語らなければならぬ。おれは、岬の尖端にある岩に腰かけて、半透明の指で、おれのノートに、おれの言葉をかきとめよう。……波は、おれのノートを奪い去ってしまうかもしれない。しかし、それが何だ。おれの眼の前にあるのは、おれの言葉、おれの青なのだ。そして、海の波動、海の色、海のとどろき、海のひろがり、これは……そうか、死者の眼だったのか。けれども、死んだのは誰だ。広場の彼女か、海のおれか、おれたちの中の労働者か、おれたちをとりまく戦後史か、この眼は、何を示しているのだ。にらんでいるのか、涙を流しているのか、腐っているのか、永遠の黙祷を始めたのか。そして、殺したのは誰だ。どこにいるのだ。おれは、この眼が、誰の眼であり、どんな眼であるのかをたしかめなければならぬ。なぜ、そのような眼をしているのか、誰が、そのような眼をさせているのかをつきとめなければならぬ。その時、はじめて、彼女を彼女に返し、おれをおれに返し、労働者を労働者に返し、戦後史を戦後史に戻すことができる。海は海だ、といい切ることができる。今、おれは青をもち、死者は眼をもっている。おれは、これらの所有関係を止揚するために、北の海へ行くのだ。……おれは、六月の駅についたぞ。出発点であり、同時に終着点である場所。ここではもう、あらゆる色彩がうごめいている。ブルジョアもプロレタリアも、男も女も、老人も幼児も、ここで降りる。

おれは、北の海へ行く切符を買おう。おれの行動を支える金は、このポケットに……ないぞ。そんなはずはない。おれは、今まで、たしかにポケットの中に、おれの青い生活史の重量を感じていたはずだが……。おれは、おれの金を、おれの青を、おれの生活史を、とられたのか、落したのか……。それとも、はじめからもっていなかったのか。

口の中にべとつく朝の苦味を灰皿に吐きだそう、それに、もう起きなければ、とOは、ふとんの中で思う。……今日は日曜だなあ。道理で目ざましが鳴らないはずだよ。毎日おれたちは臨時工の黄色い札を胸につけている。そして、青札をつけた本工たちから、何重にも見えない壁で仕切られているのを感じながら、不具のように、ぎこちなく手を動かしている。おれたちは、いや本工の連中も、一日単位の時間に追われて、一秒単位の仕事をしている。高い台の上では、職制がおれたちを一人残らず見張っている。班毎の競争なんか、くそくらえだ。トロイメライとかいう曲に合わせ、単調な動作を続けていると、胸の底がセメントでもつめこまれたように重くなる。次々と送られてくる葉のピンをひっくりかえしてやりたくなる。ねがえりをうとう。工場では、からだを曲げることもできないから。ああ、毎朝、いつまでも、ふとんの中で、ねがえりをうちたい。赤ん坊のように。ちく生、おとついまでは、組合を作ること、ストをやることも考えつかなくなったからなあ。それこそ、本当の赤ん坊だよ。今日は、赤ちゃんか。来週には、ストをやるぞ、見ていやがれ。起きよう。うがいでしてから便所へ、と。工場の女子用トイレの壁ガラスは、ちよっとしか曇っていないから、おれたちの所からも中がぼんやり見える。考えたもんだよ。トイレへ行く時間をへらすんだから。女の子たちが怒るのも無理ない。そうはいつでも、おれたちはそれを楽しんでるのかも知れないな。パンを焼こう。粉ミルクはここにある。日曜か、日曜といっても、どこかへ遊びに行く金はない。チェツ、金持たちは、朝っぱらから、アレをやり抜き薬をジャンジャン飲んでやがる。そのために、おれたちは、あの薬をドンドン作らされている。そして歌手が、CMソングをバカスカ歌いまくる。だけど、あの歌手は、いい声してるよ。特にオを発音する時がいい。ヤリヌコオッ！てな。あの瞬間に、おれの指を、あの娘の口の中へ、ヒョイと突っこんでやりたくなる。おっと、パンが焦げてるぞ。味気ないが、こいつとミルクでがまんしよう。毎朝ハム一切れとオレンジ一個をかじれる給料をもらいたいもんだ。あと五分で出かけないと……ばか、今日は時間を気にしなくていいんだ。いや、午後から闘争委員会だ。おれたちは、闘争に飢えている。本工組合のガラ幹や、何もしてくれない政党支部の奴らをけとばして、でかいことやるぞ。おや、雨か。トタン屋根が、トトト……と音を立ててる。今、トタンを鳴らしている雨粒は、だいぶ前に空から落ちてくるもんだ。おれたちも、今日、戦術をねる。会社の幹部たちめ、ストになってからあわてるなよ。歯には歯を、だ。カチカチに固まった内臓の手術だ。ストをやり抜くぞ。ミルクがこぼれる、ズボンが台なしだ。洗おう。手は一本よりも、二本の方が洗いやすい。すきなように動かせる。

昼すぎ、ふとんの上になぞるべりながら、Aは窓の外を見て、今日も晴だな、とつぶやく。……一年中ぶら下げたままの風鈴が、時どき空気を収斂させるたびに、おれは、亡霊の訪問を受けたかのように寒気がする。そのくせ取り去る気にもならない。おれの想像をかき立てるから。おお、しかし、おれが想像する時は、おれが矛盾する時だ。壁にカーテンの影が揺れている。木の葉の影もまじっている。カーテンも、木の葉も、それぞれ揺れている。壁は日光と斜めに交差している。壁と直角の位置にある窓のカーテン、その外に樹木がある。壁に投げかけられる影のうち、カーテンに近い部分は、小さくて濃く、離れるに従って、大きくぼやけてくる。木の葉の位置は、ここから見えない。とにかく、カーテンと一しよに揺れている。おれの想念は、ある時は木の葉になり、ある時はカーテンになる。おれの想念は、揺れるままで。飛び立たず、彫り刻まない。愚劣、とつぶやいてみる。動いているのは自然、じっと見ているおれの眼は器官だ。まつ毛が頬に落す影は、器官によってできた自然。耳たぶを透きとおってくる赤い光は、器官を通して見た自然。青く浮き出る手の甲の静脈は、器官をへだて見た器官、か。おれは一体何を考えているのだろう。また、愚劣と音を立ててみる。おれは、低い声で笑うが、それは人に見せるための笑いではない。以前のおれの笑いとはちがう。おれの生活全体がそうだ。睡眠、呼吸、タバコ、食事、洗濯、読書……闘争の時代には、これらの行為が、救いのようなリズムを与えてくれたのに、今は、これらの行為だけが、おれの生活を埋めている。この対比は屈辱だ。一年単位のまばゆい記憶に追われて、一日単位のだらけた生活を送るのは屈辱だ。波間に揺れたまま一気に沈まないのは屈辱だ。少くとも、この屈辱をバネにして、何かを表現したいと、痛切に願うのだが……。そうだ、おれの唯一の財産、数年前の文書、メモ、パンフレット。こいつの亡霊を断ち切るために、ここから湧き出てくる対比的イメージをとらえてみよう。亡霊の尻尾を二つに裂くのだ。最初の広場突入における歓喜と、最後の広場突入における非痛がその一つだ。平和な焼香デモと

文字通りの葬列が次にある。そして、死者を葬る声と、組織を葬る声の対比もしなければならぬ……。しかし、おれの論理よりも心理が、心理よりも生理が大きな比重でのしかかってきて、どうしても表現ができない。ペンを持つと、皮膚がかゆくなる。水を飲みたくなる。労働しないのに肩で呼吸しなければならぬ刑罰の日々。かつての広場での燃える現実感にくらべれば、今この部屋は、記憶の墓場にすぎない。

日曜の貧民街を走る快速電車のシートに沈み、週刊誌をめくりながら、Zはオルグの方法を考えている。……まずT工場臨時工のうち、目ぼしい奴に連絡つけて理論問題研究会を開こう。今晚すぐでも討論資料を配布しなければならない。文体は、かれらに理解できるだろうか。どうして、おれは文体のことなど気にするのだろうか。理論が全てなのに。そして我々には、全てを表現できる理論があるのに。多分、毎日よんでいる敵分派の文書を意識するからだろう。おれたちは、一年単位の分裂に追われて、一日単位の前進を続けている。R委員会運動派よりも先に、T工場臨時工闘争に介入しなければならぬ。このオルグKには、おれの昇進もかかっている。P党の反革命性は、B同盟が指導した数年前の大闘争の過程で暴露され、B同盟の混血性は、闘争の敗北後、R委員会の批判によって明らかになっている。しかし数ヶ月前、R委員会も分裂している。おれたち前衛派は、運動派の思想をたたき出さなければならない。それにしても、今のところ闘争に立ち上った労働者は、T工場だけだから、このヘゲモニーをどちらがとるかで、分派闘争に転換点がくるかも知れないぞ。運動派の連中は、もう潜入しているだろうか。もし潜入しているにしても、あの戦術はひどすぎる。臨時工組合結成後すぐにスト予告とは。一揆主義的な傾向を粉砕しなければならない。きつとうまくやってみせろ。おれは人をオルグするのがうまいのだ。政治も恋愛も技術で決まる。未経験者には、まず煩ずりし、唇にキスし、それから、おもむろに行動を下向的に展開する。既経験者ならば、直ちに胸をまさぐり別の手でスカートをまくればよい。あとは向うでやってくれる。おっとこれは問題がちがいがすぎるな。問題は、現在の諸条件の下向的分析と、我々の戦略的立場をいかに統一し、目的設定をいかに物質化、対象化していくのかということだ。臨時工を指導する組織は、いろいろあるだろうが、それらの組織の理論が、どんな順序で注入されているにせよ結局は労働者たちが我々の思想に接近してくるということ、おれは示してやろう。このことを、よく知り抜いている奴が、案外、我々から脱落している人間、たとえば週刊誌のトップ屋などの中にもいるかもしれない。そいつは、そいつで地獄の底まで見てくるがいい。人類から枝分れしている永遠の猿か。おれは、労働者の意識を主体的に変革しながら、反帝＝反スタの前衛組織を生産点に確立するのだ。……次の駅でおりよう。

2

日曜の夕方、AはOの訪問を受ける。

「あんたは、もと全学連の闘士だってね。そんな噂があるから、こうやって訪ねてきているんだが、ずいぶん分りにくい所ですね。」

〈一体、何の用ですか〉

「T工場の臨時工がストを計画しているのはあんたも知っていますでしょう。ところが、さっきまでの闘争委員会では肝心の戦術が決まらなくてね。今夜もう一度あつまることにして、ひとまず解散というわけさ。すると、帰り道で、おれに目をつけている労務課の奴が、——お前、この近くに住んでいる元全学連に入れ智恵されているんだらう——というんだ。あいつめ、逆におれに入れ智恵したのも知らないで、笑わせやがる。……ひとつ指導してくれませんか。」

〈私には、どうも興味ありませんね。今すぐ行動に入ると、反革命へ力をかすことになりかねませんよ。〉

「何だって。本工組合も、政党組織も、みんなソップをむいている時に、おれたちは捨て身で立ち上っているんだ。それが、どうしていけないんだらう。」

〈数年前の大闘争の敗北と空しさに、まだ、とりつかれているから、何もできないのです。この空しさのどん底まで行きついて、世界を凍りつかせるような方法をもって、もう一度浮き上がってくるまでは、何をやっても敗北のくり返しにしかならないと思いますよ。〉

「あんたは、そんな呑気なことをいっているが、資本家に追いつめられた労働者の苦しみを知らないんだ。」

〈その苦しみは知ろうと思う、いや、私自身があなたと同じ苦しみの中に入っているんですよ。私は、

まず自分の中の苦しみをつきつめて行って、我々全体の苦しみがなくなる道をみつけようとするんです。

「うそだ、ごまかしている。日本で、ただ一ヶ所だけ、労働者がストに入ろうとしているのに、傍観していることこそ反革命じゃないですか」

「あなたが知らない所で、私も革命につながっているのかもしれない。私は、いわば、札を捨てることの意味からカケに加わろうとしているわけです。」

「あなたの頬にあるのは警棒の傷跡じゃないかね。いや、分ってるんだ。その頃の闘争のやり方なんか話してくれませんか。机の上にあるのは、札、いや、ピラのように見えるが……」

「これは、私の唯一の財産です。B同盟の機密書類もたくさんあるけれども、組織はとっくになくなっているし、あなたには興味ないでしょう。それに、闘争の技術だけ研究するのは邪道ですよ。」

「……おや、デモの隊形、突入方式、バリケードの作り方。すごいもんだなあ。一日だけ借してくれませんか。お願いだから。」

「いやですね。とにかく今日は、これで帰って下さい。」

日曜の夜、Zは、Oを喫茶店へ呼び出す。

「O君、私がR委員会前衛派のZです。」

「はあ、しかしどうして、おれの名前を知ってるんですか。おれは、R委員会というのは聞いたことがない。あなたが、ストについての重大用件だっていうから、一応話はきいてみようと思っただけだが……。」

「ハハ、会社へ電話してね、ブンヤ口調で臨時工のうち一番ハッスルするのは誰かいたら、君の名前と住所を覚えてくれたんだよ。R委員会前衛派というのは、全ての左翼より左にいる最も革命的な組織さ。私はT工場の闘争を指導してきたわけだが……。」

「そうか。とうとう本当の革命家が来てくれたんだな。これでおれたちの闘争も本物になるぞ。」

「という、今まで誰もオルグに來なかつたのかい。」

「ええ、S党もP党も相手にしないし、本工組合の幹部は、課長へのコースをねらっている奴ばかりですからね。支援どころか、妨害してますよ。」

「臨時工組合の指導部は、どういう風になつてるの。」

「十人に一人の割で闘争委員を選んでやっています。だけど、ズブの素人ばかりだから、やり方とか理論がだめなんです。あなたが来てくれたから、もう大丈夫だ。……ここだけの話ですがね、明日にでも抜き打ちストをやるかもしれない。今夜の闘争委員会で、委員長とスト戦術をきめるんです。」

「そんなバカな。我々は、大衆追従の一揆主義とは絶縁してるんだよ。まず、臨時工内部の有志で理論問題研究会を開き、次第に細胞としての機能を……。」

「待つて下さいよ。じゃ、ストを応援しないというんだね。ダラ幹と同じだ。」

「ちがう、ブルジョア、社民、スターリニストの妨害は、既定の条件だ。我々は、それを確認した上で、運動のベクトルと組織のベクトルを止揚しつつ、つまり……。」

「そんな説教は、ごめんだ。やっぱり、B同盟式のバリケード作りの方が役に立つ。」

「なに、同盟だつて。だれか知ってるのかい。」

「この近くに住んでるAさんですよ。秘密書類をたくさん持つてるけど、貸してくれない。宝の持ち腐れだよ、全く。」

「Aなら知ってる。……あいつが、こんな所に……何をしてるんだらう。」

「さあね。ブラブラしてるらしいが、やはり眼付きなど、どこか違うね。」

「だが、B同盟なんて、とうの昔に消えてるさ。それより、我々の機関紙を読むといい。君たちが本当に解放できる理論が一杯かいてある。……しまった。駅にカバンをあずけっぱなしだ。」

「とつてきましょう。ついでに、Aさんにもあなたのこと知らせようか。」

「会いたくない、戦線逃亡者にはな。カバン頼むよ、これがチケット。私は、Tホテルへ行つてから、そこへ来てくれないか。二人で機関紙をよく検討してみよう。その後で闘争委員会に出るからね。」

その一時間後、いらいらしながら待つているZの部屋へ、Aが入ってくる。

「どうした。あれ、OじゃなくてAか。」

「そのOから聞いたのさ。何となく会いたくなつてね。」

“ちっとも変ってないな。別れてから、もう四年になるけれども……”

（君も元氣だな。T……工場のオルグに来てるのかい。）

“うむ。R委員会運動派の連中が煽動しているのかと思つたら、そうでもないらしい。まさか、君がやるわけないしな、ハハ。単純な一揆主義さ。だが、労働者は君とちがつて、いつでも立ち上れる条件でしめつけられてるんだ。おれは、ストより拠点づくりの方をやるけれどね。”

（R委員会も、遂に分裂だな。果しなく分裂するがいいよ。永久革命ならぬ永久分裂か。）

“ばかええ。反亭Ⅱ反スタという画期的理論を現実化していく場合には、不純分子の排除は避けられないんだ。”

（その変革のための分裂が、君たちの意識の根底からおこなわれたかどうか、あやしむんじゃないかな。あの原体験、広場での彫像に転化したような衝撃から出発してないからだ。）

“君がよく使う幻想的な喩は犯罪的だよ。空間的に何かを対比し時間的に解決を未来へのばす。その快樂だけが君の本質なんだ。今夜、君がここへ来ているのも、それをいくらか自覚したからさ。”

（君こそ犯罪者かもしれないぜ。革命とか前衛とかいつて居るけれども、君の意識は、固定された組織球面の内部で惰性的に動いているんだと思う。分裂を止揚したつもりの者こそ分裂に屈服しているかもしれない。）

“えらそうにいうが、君のいう原体験なんて三文の価値もないさ。要するに現実のたたかいに連続的に参加せず、組織論の飛躍についてこれないだけじゃないか。”

（君の思想軸の原点は、死者ではなくて、ハンガリー革命だといいたいんだろう。）

“そうだ。スターリン主義に対する反乱と、真の前衛なきための敗北という世界的事実と比較すれば、死者などエピソードにすぎないよ。”

（ハンガリーの複数の死者より、四年前の一人の死者が重いし、その一人の死者より、現在のゼロの死者が重いんだ。この重さを感じたら組織論の飛躍などできるわけがない。）

“その発想自体が、闘争の過程で、我々の理論に敗北したんじゃないか。全ては理論だ。”

（死者だ。）

“理論だ。”

部屋の中で、二人が沈黙したまま数秒流れ、突然、電話のベルが鳴り響く。

「もしもしOです。Zさんのカバンにある機関紙お借りして、文体まねたピラをどんどん作っています。それから、Aさんの留守に例の書類もって帰ってますよ。闘争委員たち、ガゼン元氣づいてね、明日から無期限ストやることに決まりました。おれも、おかげで委員長になるし……、え、すぐ返せって。だめですよ。もう戦いは始まっているんだから。すぐ応援に来てくれませんか。みんなに、もう、そう伝えちゃったから。もし来ないと、おれの顔が丸つぶれだ。……困ったな、うん、こうしよう。明日の朝八時に、工場の正門前で応援演説してくれたら、そっくり返しませう。……そう怒らないでほしいな。労働者の味方なんだろう、あんたたち。こんなことになるだろうと思って、無断で借りたんだ。ついでにしておくけど、Zさんのカバンの中には、会議録や人名簿があるし、Aさんの書類の間には、千円札が何枚かはさまってるね。……明日、来てくれなきゃ、責任もちませんよ。何しろバリケードの大攻防戦なんだから。みんな、一か八かの勝負を準備してかけまわってるんだ。うかつかすると、おれまで追いこされてしまう。じゃ、これで切ります。八時、正門前でね。おやすみ……。」

3

月曜日の朝風が、街の中央にある時計台の、鈍角になりかけた長針と短針の間を吹き抜ける頃、AとZは、いやいやながら、T工場への道をたどっている。運河の腐臭が、あたりの風景を粘膜のようにべたつかせている。満潮のため、海水が逆流し、ふつか酔いの胃液のような波の間に、果物の皮、紙くず、猫の死体などが再び街を目ざして動いている。二人とも口をきかない。石炭ガラをしきつめた、ギンギシ鳴る道を突き当りまで行き、左へ曲ると、やっとアスファルトで舗装された通りへ出る。その両側の電柱には、たくさんのピラが、ピョウで処刑されている。二人とも、それから眼をそむけて歩く。

工場の正門前には、三百人あまりの女子工員と、百人たらずの男子工員が、タンポポのような黄札を胸につけたまま、羊の眼付きをして群がり、そのうちの何人かが、正門の前に机でバリケードを作っている。羊の群を柵の中にかこいこむカウ・ボーイ。柵の中からの不安そうな視線にさらされなが

ら、二人が立ち止っていると、バリケードの下を、いつのまにかくぐってきたOが、ぱっと二人の前に現われ、奇妙な笑いを浮べる。いや、浮べながら、ものもいわずに二人の手を片方ずつ握ると、そのまま後を向いて、

「おい、みんな、全学連の闘士と、職業革命家が応援に来ているぞ。」と叫ぶ。

何たる茶番、という後悔の念が、二人の胸をカミソリの刃で切るが、もう遅い。たすきも鉢巻きもない労働者たちが、歓声を上げている。Oに続いて、二人は、机の下をゴソゴソと中へはいこむ。

「応援演説をお願いします。さあどうぞ。」

OにうながされたZは、仕方なしに机の上へよじ登る。期待と興奮のため息。

「労働者諸君の闘争は、資本家だけではなくスターリニスト、社民によって二重に抑圧されている。これらの敵を根底から打倒するためには、反帝反スタの前衛組織を工場の中に確立しなければならぬ。……おいA、こんどは、お前しゃべれよ。」

Zは、はじめて論理が回転しない苦痛にあえいでいる。

「私は、皆さんの苦しみに一体化し、その根源にまで降りて、そこで変革の火花を散らさしたい。これからも果てしなく続く模索の時期に、私たちは、自分のやりたいことと、やらねばならないこととの関係を見極めなければならないでしょう。」

うつむいているAは地面に落ちる自分の影が揺れているのに気付く、無意識のうちに、影の上へ飛び下りる。

二人の応援演説が、あまりにも簡単で不明瞭なので、臨時工たちは儀礼的な拍手はしたものの不満そうである。その時、八時のサイレンが鳴り響き、スピーカーがどなり始める。

「就業を開始します。妨害しないで下さい。」

「スクラム組め。闘争委員は前列へ出る」

とOがメガフォン片手に走りまわる。今まで気が付かなかったが、バリケードのむこうから、本工組員が、隊列を組み、組合旗を先頭にして、こちらへ歩いてくる。

Oは、バリケードの上から、外を向いて演説をする。

「おれたちの兄弟、本工の皆さん、本工組合の指導部は、未だかつて一度もストをしていない。おれたちも、皆さんも、ひどい労働条件にあえいでいるのに。これで正常な組合といえるでしょうか。おれたちは立ち上っている。兄弟である皆さん、ストに合流して下さい。」ピケ隊の間から、インターの声が起るが、糸のゆるんだヴァイオリンのように細い。AとZは、両腕を女子工員にとられて、自分たちの書類のことを一時忘れる。

「ボリ公が来るぞ——という声に、歌の響きは、ヴォリューム・スイッチをまわされる。機動隊の灰色をしたトラックが数台、正門横に到着する。

「止むを得ず、実力により就業を開始します」

工場事務所のスピーカーがどなり、雑音がキーンと尾を引いて切れると、青年行動隊の竹ざおが、バリケードをこわしはじめる。灰を入れてあるバケツが、女子臨時工たちの頭上に、いくつも転がり落ち、歌声は窒息する。机や椅子が、門の内側へつき崩され、突破口から、鉢巻きとたすきが、組合旗を先頭に侵入してくる。

「どけどけど、ろくに仕事もできないくせに——」

女子臨時工が主体のピケラインは、泣き声の合唱と共にちぎられていく。男子臨時工の一群が横から突っ込んだ時、機動隊が更にその横から突っ込んで、なぐり、けり、スクラムから解かれたピケ隊員を、バリケードの外へ引きずり出す。

「このアカめ、P党から煽動されやがって——」

「P党なんか、来てくれないよ。お前らと同じに妨害するだけさ——」

スクラムから切り離され、工場事務所の横に立っているZは、異常な不安で下腹部が硬くなっている。R委員会前衛派でのつるし上げ、それにも増して敵分派からの嘲笑を予想して暗然とする。突然の事態に有効でない理論とは何ものか、いや、理論と主体は、はじめから分裂している。

「おれは、前衛どころか、後衛も組織できない。理論と主体の分裂の根元から、とらえなおさなければならぬ。永久分裂の果て……」

とつぶやき、あ、これはAのいい分だと気付く。

近寄ってくる渦巻きの中心に引き込まれるAは、苦しみに近い歓びを思い出す。おれは、こんな場所にいるべきではない。これは墮落だ、と感じながらも、スクラムを組んだまま前進する、緑の香りが残っている竹ざおが足を払い、顔面を突く。数秒後、鼻血が、のどをゆっくり流れ落ち、からいな、おれは奇妙な顔付きだろうな、と考えるが、無意識のうちに

〈ちく生、労働者の苦しみが分らないのか。〉

と叫び、あ、これはOのいい分だと気付く。

数人の警官にねじふせられるOは、手錠をはめられながら、インターを歌い続ける。インターナショナルって何だろう。我らのものって本当かな。完全な負けだな。朝っぱらから、やられっぱなしだ、これから、どうなるか分らないが、後で必ず闘争報告のピラをかくぞ。おれがいなくても、残りの者でやってくれるかな。……と考え護送車に連行されながら、ふと電柱のピラを見て

「反帝」反スタ組織を生産点に……」

と読みかけるが、あ、これはZのいい分だと気付く。

機動隊は、朝飯前の仕事を終って整列している。本工たちは、笑いさざめきながら、門内へ吸い込まれて行く。

一時間後、ひっそりと静まり返った正門前には、Oを筆頭にして解雇者の名前が張り出されている。AとZとの文字は、どこにも見当らない。

六甲

序章

平衡感覚を失わせるほど色彩のゆたかな屋根の波の上で揺れる海へ背をむけて、山頂へ続くはずの坂道を登っていくと、時間的記憶からは先週までくらししていたとしか思えない首都は、まだ至るところに〈私〉たちの息づかいをとどめた十年間の疲れとして想い出される。

傾斜したアスファルトの坂道は、〈私〉たち以外の重量は受けていないので、スラム街を越えて漂着してくる港からの汽笛に微笑したり、蝶や十字架が投げる影を、身をよじらせて捕えたりするのをやめようとしな。光を浴びる風景は、無意識のうちに、広い空地や露出した岩肌を残しており、みつめられすぎ、使用されつくした疲労感をまだもっていない。というよりは、いつまでも、まどろんでいる欲求に支えられているのかもしれない。

勾配が次第に急になり、自分たちの影へ倒れかかるようにして登っていくと、勾配がいくらかゆるくなるあたりで、眼の前に現われてくる若葉の尖端が、風の手でかるくなぜられて、はるか遠くの空を行きかうロープウェイのゴンドラをかすめ、溶けそうな薄緑の山肌を谷間のくぼみにむかって落ち、たかと思うと〈私〉たちの背後へ去る。幼い乳房のようにふくらんだいくつかの丘陵には、ここからは決して見えない別の次元へと曲線の切れ目が続いていて、その流れは私たちが知らない間に生成し崩壊していくものまどろ

不思議なことだ！

灰色の雲が岩塊の分身のように空を飛んでいく。

それはあの荒々しい岩塊の

臆病な模写なのだ。

(ハイネ「アッター・トル」から)

みに思われる。丘陵の上を汽船がすべる……？ いや、そうではない。坂道は、いつか海の方へ彎曲し、外国航路の白い船体が、〈私〉たちの眼と丘陵の頂点をつなぐ線の上でありさつしているのだ。更に坂道は反転し、一ばん高い山頂から花粉の香りを含んだ風が流れると、〈私〉たちの足もとの斜面で葉を白くひるがえす草の群が、これから見る夢をリレーしている。まぶしくふくれあがる海はいよいよ明るい青さをまし道ばたにあるこの望遠鏡に十円玉を入れると、巨大な河とも見える湾の対岸の工場地帯の煙突まで見分けるはずだ。

首都では、いくら歩いても、せまい周囲しか見えなかったのに、この海と山にはさまざま細長い都市では、水平に歩いているつもりでも、実際には垂直方向へも移動しており、切り開かれた意外な空間へよるめいていく。この意外さは、平衡感覚を失いかけていく。〈私〉たちの無意識部分への衝撃を与えているはずだ。〈私〉たちは、時間の切迫を忘れて、空間のまどろみへ溶けこみそうになるのであるが、その瞬間から、〈私〉たちの内的な矛盾は、日本のどこにおけるよりもゆたかに花開かざるをえないのである。首都の広場や運河や露地に切迫した時間を付着させたままこの風景へ投げこまれた〈私〉たちは、自己を、ある次元の運動領域から拒絶された不具者のように感じている。しかしながら、〈私〉たちにとって、帰るべき首都はない。首都とは、特殊な状況をはらむ時間に対する〈私〉たちの関係の総体にほかならないのであるから。どこにいようと時間を失った〈私〉たちは、沈黙してまどろんでいるうちにずり落ちてしまい、見知らぬ空間へはなればなれになった〈私〉たちをみつめ合う。それゆえにこそ、これを書いているのは単数の〈私〉たちである。

〈私〉たちは、頂点から稜線を経て〈私〉たちを無関心に底辺の一角へつき戻すピラミッドを憎んでいた。このピラミッドを、首都や権力や組織や情念や、その他のどんなものにとりかえてもかまわない。しかし同時に、〈私〉たちは、さまざまのピラミッドの稜線の上をすべっているのであるから、それらを手ごたえあるものとして触れようとする瞬間から、さまざまのピラミッドの数に応じた多くの分身へ引き裂かれずにはいない。頂点での統一から稜線上での分裂というパロディは、孤立した何ものかの呻きを噴出した六・一五虐殺の時間が生れでる何ものかを圧殺する六・一八葬送行進の空間へ転移したことを〈私〉たちが、はっきりとらえられなかった責任によって幕を上げた。

〈私〉たちは、ひらめいて飛び立つ何ものかへの身がまえと、何ものかへの抜けけようとする焦りの間に彎曲したまま、敗北の舞台となった首都から、〈私〉たちを無関心に受け入れるこの美しい風景の中へ追放されてきたのだ。従って〈私〉たちは、首都からもこの風景からも切断されている。内的風景へ同化することも許されない。もしも、〈私〉たちが時間の中へ新しい関係をつくりだそうとするならば、〈私〉たちをさまざまのピラミッドの稜線上で分裂させた何ものかの力学を、いま〈私〉たちが労働しているこの場所から可能な限り追跡し、ピラミッドを破壊すること、その方法を〈私〉たちがこれから出会う全ての敵対関係にむけて応用することしか残されていない。

それを予感している限り、闘争の敗北後、さまざまの場所で、やむをえず闘争方針を考えている者も、遊んでいる者も、眠っている者も、立体的風景のためか、屈辱に耐えるためか、仕事のためか分らずに頂上をめざして歩きつつある〈私〉たちと同じ坂道を登っているのである。

〈私〉たちのまわりで、いや私たちの中からも聞こえてくる声の交差は、次第に、たてまえを重んじる論点と、有効性に関する論点と、生活の単純再生産をめぐる論点にしぼられていく。屍臭のただよう三つの論点と〈私〉たちのつま先が一つのピラミッドを形成するのに気付いたときから、〈私〉たちは、ただこのピラミッドの稜線を運動させようという誘惑のためだけに、この坂道を登り続けている。部屋の書類を処分し、身分証も定期

券も持たずに闘争現場へひっそりと歩いていったあの日のように背をかがめて。

ところで〈私〉たちは、この風景にみちているどのような響きからも、なかば意識化された意味をとりだすことができる。たとえば唯一の前衛に入る直前に必読文献の行間から聞えてきた潮騒のような不安。その政党本部で乱闘のあった翌日、対策会議を開いていたそば屋の二階へ響いてきた雑沓。闘争敗北後の大会で、真昼の眠りの前の子守り歌のように歌われたインターナショナル。しかし、それらの意味はとりだして表現過程にもちこむ前に溶けてしまいそうだ。なぜなら〈私〉たちは、それらの意味の結合が一瞬のものであり、たちまち別の結合へも変移しうるし、またその変移には解決を未来へひきのばすときの悦楽さえ含まれているのを知っているから。

この恥かしさは、倒すべき相手より先に、また組織すべき相手より先に〈私〉たちが屈服してしまったあの季節に〈私〉たちをおとすれたのだ。波のように打ちよせる響きの方へ〈私〉たちがかけより、離れ去るとき、響きが変移して、〈私〉たちが、これから出会うであろう飢えや苦痛や忍耐のきしむ音に聞えてくるようだ。口を開き終らないうちに、叫びは〈私〉たちの知らない空間へ流れだしている。しかし、この未来からの記憶群は、過去の闘争を頂点とするピラミッドの内部にも、広々と存在していたはずである。たとえば、国会広場に突入した〈私〉たちは、死者のたこを聞いて怒りの叫びを上げながらも、無意識のうちに横の破損された建物に入りこみ、水道の蛇口から水を飲み、ほぼ同量の小便を壁にかけ、ポケットの溶けかかったキャメルをしゃぶり、タバコに火をつけて平和を味わっていたのである。そして、欲望の空間に舞う沃精たちに追放をかけ、倒錯した現代史を転覆して火を放っていた。〈私〉たちと状況のこのような関係から〈私〉たちは歩きださなければならない。それが、死者への哀惜が失速しつつあるとか、模索を現実化する責任からすり抜けているとか、戦後史過程と体験過程が偶然に一致した意味を対象化していないとかいう、〈私〉たちから〈私〉たちにむけられる批判をこえる道である。

人かげのない展望台をすぎると、〈私〉たちがえらんだ坂道の舗装は切断される。展望台の望遠鏡と対岸の煙突という二種の円筒をつないでいるのは十円銅貨という円筒であったが、〈私〉たちは足元に咲くタンポポによって、国会広場の芝生や機関区の砂利や警視庁の屋上へつながれている。〈私〉たちは、畏をつくるのに似た抒情を開きながら、歩く動作を、タンポポの茎を折り、ねばつくミルク状の液体を吸う動作に変移させよう。

タンポポの黄が、暗くざわめく虚空の中でとらえられたとき、黄の彩りは運動して三日月の形に鋭く閉じようとする。それと共に、黄をとりまく渦がまきおこり、環のように重なり続けることによって、思いがけない方向への視界を可能にしている。そのむこうにある何ものかと、そのこちらにある何ものかに祝福あれ。

第二章

汝は汝の恥辱をかたれ、

私は私の恥辱をかたろう。

(プレヒト「ドイツ」から)

〈私〉たちは、序章から踏みだしたまま宙吊りにされており、飢えているが、この飢えは、遭難のような不慮の飢えにも、食糧難のような社会的飢えにも、ハンストのような政治的飢えにも似ていない。それは一つの表現を複数の主体で分割したためにもたらされた。だが、この飢えを耐えて生きることを、何ものかが〈私〉たちに強いるのである。

本文の中に影を落す前に、永遠にはじまらない、あるいは永遠に終わらない幻想にとじこめられる危機を感じて、〈私〉たちは、飢えのため斑点のきた内臓をかかえたまま、自力で歩きだそうとしている。海から山へ吹き上げる風が〈私〉たちを引き裂いていくので、

〈私〉たちは、それぞれ別の歩き方を主張しはじめているのに気付くのであるが、そのとき山の彎曲は激しく揺れて、複数の極大値をみせる。そういえば、六甲とは、一つの山のことでなく、おのおの最高の視界を自負している頂点をもつ山系の総称であるのかもしれない。〈私〉たちのそれぞれが、飢えの感覚を山頂の感覚に重ね合わせるとき響きを一つずつかいていこう。しかし、それらの響きが、自分の主張を固執する度合に応じて、そのすまみに、さまざまな色調をもつ意識のつぶやきが介在してくるのを避けられない。

〈私〉たちが、首都の時間から、この空間へ追放されてきたのと対応して、限らないパロディが、この魅惑的な都市の政治地帯で展開されている。数年前の〈私〉たちの闘争を根底から支持する組織が皆無に近かったこの都市では、いままスターリニストの党が、権威を貫徹する正統派と、有効性を追求する修正派に分解したままである。静かなデモや署名や講演をするばかりで、〈私〉たちを、貧しい風景からやってきた分裂病者めと罵る連中に、おまえたちは、この風景をみる眼が衝撃のため歪むほどたまたかたつたことがあるのか、と喋ってやれ。

〈私〉たちは、かれらを根底からくつがえす反対派として登場し、そのとき現われるであろう全てのヴィジョンを表現していこう。都市の大きさと政治水準の落差が、このように著しい風景で、かえって〈私〉たちの体制の桎梏と反体制の桎梏を二重に突破する論理とパトスを組織化する最上の実験ができるかもしれないから。あの山頂は、〈私〉たちがつくりだすたまたかのピラミッドの頂点を象徴しているのだ。

（ここが日本の労働運動の発祥地だというのは本当か。ピラミッドがケイキになり、広場は花時計に占拠されているだけだ。油虫のような荷役船が、大型船へすり寄っていく。海抜〇メートル地帯で、ベトナム行きのジャングルシューズをつくっている君たち、鼓のかたちをした観光塔をうち鳴らせ。船をとめる。減速ブレーキからはみだす不快を、コン

クリートの防波堤にたたきつける。心象の風景さえ見えないで、便利な私鉄で往還する君たち、倒錯した現代史に手で触れてくれ。社会主義圏や革命組織が生きているなら、君たちは死んでいる。ジグザグ・デモで、空虚な街路を飾れ。冬から冬までゼネストだ。屈辱の中へ。下部から連続的に、理論の限界において、一瞬ごとに触れる現実方程式の全ての項を開かせながら。

〈私〉たちが、この風景の中へ反対派として歩み出すとして、いま眼前にある山系が美しいといえるだけでなく、ひしめき合う現実過程の曲線とも、彎曲する〈私〉たちの意識とも交換できるのは不思議なことだ。一切の風景は、〈私〉たちが眼をさませば、泡のように消え去り、斜面の運動を錯覚する心臓の鼓動だけが残っているとしてみても、それは当然だという気がする。風景への干渉のしかたが、このように分裂してしまうのはなぜだろう。時間||空間の外部的な差異をもつ闘争へ踏みこむとき、内部的な時間||空間がねじれたピラミッドをつくるのではないか。一方の条件を無視すればピラミッドは、案外たやすくとらえられるにちがいない。しかし、それでは、本当に、たまたかにでかけることにはならない。人々の表情は、闘争の前でも後でも、首都でも港でも変わらないようだし、組織Aから組織Bが分裂するときにも、組織Bが組織Cを批判するときにもオートメーションから流れでるような文体は同じだ。が、このことは逆に、表情や文体が表現のピラミッドから、すさまじい勢いで転落していることを示していないか。また、このことをちがった空間で、ちがった時間に気付く〈私〉たちも、ちがったという分だけの責任のピラミッドをずり落しているだろう。このような内部ピラミッドの追求が結果的に現実闘争のピラミッドをつくっていくより前に完了していなければならない。

（あなたも知っているように最も高い頂点が、一ばん底の点になることもあるのだから、ある稜線を上昇していても、それは下降であるのかもしれない。だから、かれは、ピラミッドを探しにいかずに、自分の心の底の動きをピラミッドにつくってしまえばいいのよ。その

とき、人目にふれる点を支える三つの点は、どんな風になるかしら……そう、あなたの意見では、恥かしきプラス極左↓屈辱プラス侮べつ↓別の空間への逃亡、という変移をくりかえすわけね。あたしの直観では、副詞句による自己欺瞞↓非必然的な対立止揚↓別の時間への逃亡、という循環になります。いずれにせよ、でき上ったピラミッドが、悲惨にもこっけいであることはたしかでしょう。)

内的ピラミッドと外的ピラミッドのどちらを先に追求するかというのは、二段階戦術だ。両者をいや応なしに包みこんだまま拡散していく六・一五被告団の一切のヴィジョンをみきわめつくして、かれらを拡散させる力の確認へむかおう。

一切の反被告団的発想を粉碎せよ。これは(私)たちの最低限の、あるいは頂点をなすスローガンだ。ところで、被告団として権力と生活過程にはさまれて存在することは、

(私)たちが、あの原体験を包みこんで現実過程に入りこんでいくのと同位であることを知った以上、(私)たちは、かれらが無意識的に拡散していくかたちを意識に総体化することができなのだ。かれらの拡散するときのピラミッドは、(私)たちが最もとりだしやすい、同時に決して逃すことの許されなにかたちを示しているのだから。(私)たちが、拡散を意識的にとらえるという場合、下降しつつある個々の稜線上の個体のいずれをもえらばずに、分裂の根源へ歩いていくことを未来の重さが命令しているのだ。

(これは、歪んだ鏡の中の二人称をのぞきこむ一人称を描いた歪んだ絵です。むこうむきに鏡をのぞきこむ一人称の顔はみえないが、その一人称は、鏡の中の二人称を媒介して、絵をみる三人称をみているのです。もちろん逆に、絵をみる三人称も、鏡の中の二人称を通して鏡をみる一人称をみているのですが、こうしているうちにも、鏡は波のように崩れ、絵は風のように死んでいく。こわれた無数の破片に、無数のだれかが対応しているとして鏡や絵を用いないで全てのものを書き、全てのものになってしまうのは第何人称ですか。)

歩行をやめよ。ここで立往生している感覚を、目的や連続性にとらわれず、一切のイメージへ自由に伸ばしてみよう。(私)たちの山頂への歩行は、散歩のような解放感をもたず、限られた時間と、凝結した志向と、既成の登山コースにしばらくいられているのではない。乗物を用いず苦勞して登り続けても、山頂は資本に占拠されているはずだし、足元のこの滝から舞い上るメールヒェン風の白い泡も、奥地に開発された団地の下水から発生している。

立往生の感覚……これを、いろんなときに味わっているはずだ。呪いのように道を横切る黒い蛇をみるとき。明日の食費もなく、手足をまるめて眠りに落ちるとき。突然のいいがかり的論争に対応せず沈黙をかむとき。

要するに、あるピラミッドの稜地上で、別のピラミッドの稜線に転移する瞬間の断絶感を追求すべきだろう。ピラミッドの複数化を確認することによって、より巨大な、運動するピラミッドを予感し、とらえるのだ。

(かれらは、絶壁をはしごで登ることも、ブランコで越えることもしないで、眼の前にぽっかりと広がる砂の平地へ、デモ隊のように突入していくが、そこには誰もおらず、立札によれば、山をけずりとした跡に大学をつくり、けずりとられた土砂で海を埋立て工場地帯をつくるらしい。かれらの靴の裏には、二重の利用をされる砂の驚きが附着しており、数万年前の海岸と現代の海岸を、無人のベルト・コンベアーが連結している。突然、爆発音がとどろき、平地をとりまく崖の中腹から、かれらの頭上へ煙のように拡がった土砂が降ってきたかと思うと、崖自体が、かれらの方へのめりこんでくる。海の鋭角の切片に眼の片端を通過させながら、かれらは、もしかしたら自分たちこそ、この発破をかけた技師あるいは労務者なのだ、とずい分前から知っていたかのように考える。)

(私)たちが歩き出したときから、(私)たちの頭上を飛びかうものがあつたのではないか。はじめ(私)たちは、それを、時間をくわえて(私)たちを探している小鳥たちが

と考えたり、時折梢から〈私〉たちの上に投げかけられる。これも日だろうと思ったりしていた。だが、それは、意識とまどろみのズレがゆたかに開かれるこの風景の空間性を逆用して、さまざまなピラミッドの力学を追求しようとする〈私〉たちの試みを、〈私〉たち自身が空しいと予感した瞬間と対応している。このとき〈私〉たちが、知らぬ間に、タンポポの沃精との心中を決意していたとしても、それは必至だったのである。無意識的にえらびとる欲望のかたちこそ、〈私〉たちが状況に対しておかれていた困難が、補完的に反映しているのだから。その反映へ身を投げ込むことによって、〈私〉たち以外の〈私〉たちが追求するピラミッドの虚像が、マイナスのピラミッドが、ほのかに姿をみせてくれるような気がする。

（湿潤な部分へのめりこんでいくときの速度と、記憶の層に抒情の泥が沈澱していくときの速度の間を指で押しひろげながら、一瞬、不能の予感、索莫とした悲しみに襲われる。どうも今までのとは構造がちがうな、と考えながらも、慣性に従って尖端を挿入していくと、内部の粘膜に、粟粒状の斑点が数十個みえるのだ。ハッとして引き抜いてみると、尖端にも、その斑点が増殖している。しかも、遠くからの羽ばたきに似たざわめきに後をふりむくと、巨大なタンポポの綿毛が数かぎりなく、こちらをめぐって山頂から舞い下りてくる。）

〈私〉たちは、最後のヴィジョンから発想してみるべきだ。一人のバルチザンとして出発した〈私〉たちは、不可視の軍団としてそれぞれ別の山頂にたどりつく、と仮定してもよい。〈私〉たちが、迷ったロバを探しにでかけて王国を発見した旧約の青年に似ているかどうかいまは保証できない。〈私〉たちは、自分だけでなく他の者も別の山頂に到達しているのを恐らく確認できないまま、あえぎながらひざまずいているだろう。そのとき、〈私〉たちは、ピラミッドという奇妙な概念をつかっていたことの罪によって罰せられるだろう。むしろ、〈私〉たちは、それを要求しなければならぬ。そのとき、六甲を支えている海が裂け、複数の山頂が重なり合い、全ての〈私〉たちは、海へなだれ落ちていくのだ。その後、六甲のままの六甲が、ひっそりと横たわっていることはいまでもない。

〈私〉たちからの六つの響きが、六つの主張のように六甲へ影を落したとき、遠くからしのび笑いが、ちがう、だんだん深くなる憐哭が近よってきて、この空間を緊張した抒情でみたく。そして、その虚数の焦点へ六つの響きが集中していくような気がする……それらの響きや、響きにならないでうごめいている気流が、もつれあい、からみあったまま私ののどから内臓へ殺到してくるのではないか。それら全ての何ものかを時間の中へ放せば生きられるかもしれない、という希望が激しい飢えを一瞬忘れさせる根拠である。

第二章

油コブシ。ケーブル六甲山上駅から約一キロ南の丘陵に突出した巨岩。海拔約六百メートルで、西方の摩耶山をこえて瀬戸内海を望む。かつてはにぎりこぶし状に上へ侵びていたが、尖端が徐々に風化されている。

私の中へ〈私〉たちがなだれこんだとき、〈私〉たちが見たものは、いままで私がかいてきた形象が、時間空間の痕跡を次第に変化させながら、私の内臓の奥深く累積している姿である。

〈私〉たちの嘔吐の気配を感じとった私は、それを無視したために、嘔吐の感覚から最も遠いと思われる意識を、外の風景へ投げこもうとした。しかし、いつのまにか、私は、〈油コブシ〉の尖端で、眼を閉じたまま立ち上っており、恐怖がその状態を確認するよりも早く、私は放物線を描いて、はるか下方の斜面で待つタンポポと激しく接吻しながら失神しつつある。

私はまだ意識を回復していない。第一章序章、第二章假章に続く次の章をかけない

苦しみのために、意識的に意識を失ったと疑ってもよい位だ。ともかく〈私〉たちは、私が墜落したのと同時に、私の内部に、〈私〉たちの欲する限界をはみ出すまで深く墜落しつつある。〈私〉たちの突差の行動で、〈私〉たちの各々は、互いに〈—〉をスクラムのようにからませ合いながら鎖のように墜落したので、〈私〉たちの一方の端は、どこまでも奥深くへ運動するけれども、一方の端は、入口で、しっかりと固定されている。

〈私〉たちは微少な時間—空間の転移のすきまで、次のように決議した。苦しみから逃れるために〈私〉たちを墜落させた私の責任を追求しよう。墜落という災難を逆用して、私の内部に食い下り、いままで私がかいてきた形象たちの苦しみをさぐり、かれらに代って〈私〉たちが私を告発してやるのだ。

何よりも先に注意をひかれるのは人物であるが、未熟児か不具者に会う直前のような感じがして一種の恥かしさに〈私〉たちは身体を固くする。しかし、眼をそらさずに下へ降りていかなければならない。最初にすれちがったのは、骨の割れ目に足をかけて登ってくる人間で〈私〉たちに気付かぬまま、荒い呼吸をしている。その次には、時計の長短針のように交差する血管にはさまれている人間。眼の機能を耳が、耳の機能を口が、口の機能を眼が果しているの、各々の器官が死ぬほど憎みあっている。更に下へ降りる〈私〉たちは、足ぶみか跳躍をしている人間に驚いた。粘膜壁にあるいくつかの光る斑点のためにできた自分の影、その影のどこかの部分を、同時に踏みつけようと試みているらしい。最後に、じつとしゃがみこんだまま、不消化な岩の破片をかんでいる人間がいるが、よく見ると岩の破片ではなく、眼を閉じている彫像の頭部で、それに話しかけている様子であった。どの人間も、年令や性別が分らず、それらの人物たちのまわりには、さまざまなものたちが、ブルルにゴミ箱を投げこんだように浮遊しているの、〈私〉たちは、それらの一つ一つをたしかめる気力がない。それに、落ち着いて考えてみると、〈私〉たちは、ほぼ直線状に下降してきたのだから、その軸のまわりの部分で何人かを見たというにすぎない。

〈私〉たちのまわりから、形象たちをつつみこむ限界までは、どこまでも、果てしがないと思われる位に暗く、その暗さは、夜の溪谷や、濁った運河や、死者の広場に似ている。せめて下の限界を、墜落しながらたしかめようと考えたとき、なぜか分らないが、下の暗さをのぞきこむ〈私〉たちは、私の口に触れているはずのタンポポを意識した。同時に、〈私〉たちのつながりが、ガクンと一直線に伸び切り、これ以上、降りられないことに気がつく。

静止した〈私〉たちが、私の責任を、形象たちの前で告発しようと思志をかため、つぶやきから弁論に変化する直前の、微妙な鼓動の律動を制御するために眼をとじていると、いままでは〈私〉たちに気付かないまま永遠の動作を続けていた形象たちが、ふと動作を中止して、〈私〉たちの方へ注意をむけているような気がする。〈私〉たちは、すぐに眼を開けてしまうと、この想像とくいちがうのを恐れ、数瞬後、どちらでもよい、と思いつながら眼を開くと、形象たちは、永遠の動作を続けており、こちらに注意を払っていない。〈私〉たちは、かれらが気がつかないうちに、かれらの一瞬を想像した〈私〉たちの技巧や、待つことのように事態を変化させてしまう〈私〉たちの統制力に微笑しながら、次のように告発をはじめるのである。

〈私〉たちは、あなた方の直系の血族として、六甲の空間から、この時間の底へ降りてきた。

〈私〉たちは、あなた方と同じく、存在しきれない苦しさにうめいている。

人間が存在するとき、整数の性質をもって現われてくるのを疑うものはいない。しかし、

ここにいるあなた方は全て、整数からはみ出す性質をもっている。そして、〈私〉たちは、その最も極端なあなた方に分裂させられた。

墜落を逆用して、〈私〉たちは、あなた方の連続性をかいま見てきた。あなた方のうち、最も底にいる形象から次第に上方へ、〈私〉たちに至るまで、丁度、枝のない幹をみるような方向が一貫している。

あなた方や〈私〉たちを、未熟なまま早産せざるをえない時間が、かつて私を襲ったのであろう。それはよいとして、〈私〉たちが告発する私の責任は次の点にある。

あなた方や〈私〉たちの形象をつねに、外部の時間と、私の内部の空間との間でのみ設定したこと。従って、自己にも形象にも致命的な歪みを与えたこと。

〈私〉たちや、あなた方の直線的なつながりは、この上なく危険な徴候だ。主体設定の変化が早すぎる。主体のりんかくが薄すぎる。

底に近い形象ほど無意識のうち時間にあやつられ、上へ近づく形象ほど無意識のうちに空間にあやつられている。だからこそ〈私〉たちは、六甲の空間から、あなた方の時間へ降りてきた、と語ったのだ。

〈私〉たちは私に要求する。内部の時間と外部の空間の間で形象せよ。たとえば、失神という瞬間から、太陽に入ったフライを受けそなた球が顔に当たった瞬間、終電車におくれば歩いて帰ろうとし、凍った鉄橋からすべり落ちた瞬間、機動隊にむかつて振り上げたコン棒の先が、後のデモ隊員に当たった瞬間へ、なぜ連絡しないか。〈私〉たちでない。〈私〉たちへ、なぜ入りこまないか。

〈私〉たちは、あなた方の直系の血族である。これは、実をいうと、この上なく屈辱的なことだ。しかし、同時に、〈私〉たちの一人一人は、あなた方と存在を交換してもよいと思う位、あなた方を愛している。

いま〈私〉たちは、自分たちの限界のために、これ以上うごくことができない。身体が不自然に伸び切っているし、窒息しそうだ。いつか必ず、もっと深く、もっと長い時間ここへ潜入し、あなた方すべてを救い出そう。

〈私〉たちは、あなた方のだれよりも惨めな形象だが、あなた方とちがっている。そして、いましばらく、あなた方と離れていくことは、あなた方の苦しみの契機をすべて背負いこむ一ばん有効な道なのだ。

〈私〉たちが、このように、かれらにむかつて語りおわったとき、いや語りおわろうとしたとき、彫像の頭部が、〈私〉たちの方へ投げつけられ、次第に重量と速度を増して、油コブシのように〈私〉たちへ迫ってくる。その彫像あるいは巨岩によってひきおこされた風を受けて、〈私〉たちは、自分より少しでも上方にいる〈私〉たちにしがみつきながら上方へ吹き上げられていくのであるが、下降のときは、円筒状の流れしか見えなかったのに、上昇のときは滝のような音しか聞えない。

〈私〉たちは、〈私〉を何重にも自分にまきつけた不安と、〈私〉がズリ落ちそうだという滑稽さにはさまれながら、下方から迫る衝撃を避けようとしている。

突然の爆発音。……黄色い閃光が飛び散って、花びらのように開く。

内臓の底から吹き上げられた〈私〉たちが、風景への出口でぶつかっただのは、タンポポであった。私が失神しながら接吻しているので、黄色い花びらは血にまみれており、そこには、いままで〈私〉たちが一度も感じたことのない、可憐な勇敢さともいえるべき力が潜

んでいる。

〈私〉たちにとって、はじめての外部の風景でありながら同時に出口をふさぐこのタンポポを前にして、〈私〉たちは次のように討論する。

花びらに映っているのは何だろう。

いや、文字が浮きでているのではないか。すでに綿毛になった花芯がペンになってかいた文字が。

ともかく何かが表示されているのはたしかだ。

私がいままでかいた形象たち、かれらからこぼれおちた、あるいは欠落したものが解放されて表現されているのではないか。

私、これからかくべきヴィジョンなのだろう。

〈私〉たちのかかわり合いかたで、いろいろと変った風にとらえられるのだと思う。ほら、〈私〉たちの〈〉が映っていると思えばそんな気がするだろう。

ふしぎなことに気がついた。花びらと〈私〉たちの意識をつなぐイメージあるいは言葉に〈〉をつけてみると、その部分は、他のイメージあるいは言葉に置き換えても成り立つのだ。しかも、より透明な意味をひきずりだしながら。

例えばどんなのだ。さっぱり分らない。

それは私が、いつかやってくれるだろう。また、〈私〉たちは私に、それをやらさなければならぬ。

いいたいことをいい切ってしまえ。とても苦しそうだから。

任意の部分に〈〉をつけてみると、置き換えが可能だし、そのことよって花びら全体が、さまざまに揺れ動く。そして、イメージあるいは言葉が、個体↓群↓全体というようなことばでしか、いまはいえないが、そのような異なった時間||空間の律動の境界を往還するのが予感できるのだ。

自由自在にか。

いや、ある領域内に制限されつつ自由に運動するのではないかという気がする。逆にある領域内で自由に運動するものうち、ある一つのかたちが、この花びらに現われてくるともいえそうさ。

それは怖いことだぞ。極めて突飛ないいかただが、ここから、恒常的な存在の条件と恒常的な表現の条件の中で弯曲している何ものかのある段階の姿が導けるのではないか。

では、この花びらの形象はだれがつくりだしたのか。

失神している私とでもしかいいようがない。〈私〉たちは、いまのところ、私にむかって、〈〉の根拠を明らかにせよ、と要求し続けるほかないのだ。

手がかりはないのだろうか。何でもいいから、いつてくれ。

恐らく、いま失神している私は、あるとき自己や世界の関係を〈〉に入れなければ生きることすら死ぬこともできない時間——空間に出合ったのだ。そしていまも出会い続けているのだろう。私にとって戦後史の軸も、世代も体験も、国家も革命組織も、家庭も風景も、みなれないと同時に致命的な二重性として映っているはずだ。ただし、自分では気付かずに。失神したときはじめて、このタンポポが、私の可能性をひきずりだしたのだ。

花びらに浮きでたものを〈私〉たちの一人一人がメモにかきうつしたらどうなるか。：みんな協力して統一メモを構成しよう。

何度かかきかえていくときの基準はどうするのだ。切り捨てたり、残したり、順序を入れかえたりするときの基準は。

切り捨てることによってしか〈〉運動をおしすすめることができないのであれば、その部分は、別のかたちで残ってくるだろう。残るものは〈〉運動の基盤、付け加えるものは〈〉運動を拡大する契機、入れかえるものは〈〉運動の有効性としてとらえられる。

私への告発はどうなったのだ。それに、一体、〈私〉たちは何者なのだ。

〈私〉たちが私によって、私が〈私〉たちによって〈〉の意味を予感したことが、それぞれの責任だといえる。だから、私への告発は〈私〉たちへの告発になる。〈私〉たちの誤りを追求することは、この世界の誤りを追求することであり、また、この世界の誤りを追求することなしには〈私〉たちの誤りは許されない。

〈私〉たちは、これから〈〉をつけて現われないことを決意しよう。〈私〉たち以外

の全てのものに〈〉をつけに、再び内臓へ下降していくのだから。

〈〉は消え去るだろう。しかし、〈〉のない世界は、〈私〉たちが永遠に変革し続ける夢である。夢が恒常的な条件に限りなく近づくように、〈私〉たちが、そのたたかに耐え続けてくれるように。

そのとき、私は、何ものかの嘔吐によって意識を回復し、まず、私の上方におおいかぶさっている油コブシに〈〉をつけはじめていく。

第四章

かつて六甲山系には、いまの神戸大学付近と摩耶山天
上寺付近に岩があり、南北朝時代前後の戦乱にまきこ
まれたが、六百年以上も前、東の岩へ押し寄せた六千
の六波羅軍を、摩耶山の西の岩へ逃げると思せかけて
曲りくねった谷間へ誘いこみ、一気に襲いかかって全
滅させた。

* 第四章へむかってにじみでる〈〉の運動をメモしていこう。あるいは、同じことだが、〈〉の運動を展開しようと考えるときににじみ出るイメージの変移を促進しよう。この促進が通過する道の標識には、次のような言葉がかいてある。

変移の徹底化。主体や文体の不定化。可逆関係の拡大。発想の枠が交換可能になって、走りまわるようにせよ。循環、往還、ジグザグ状、ラセン状という風な運動方式の軸そのものが揺れるようにせよ。

飛び去るメモの例……

微かにきしむ音を立てる霧につつまれはじめた油コブシ。海賊船の船先。

子宮の重量と共に増えている諸関係。何ものかへの届出用紙。

日付けの順序を狂わせても解読できる文書。非合法活動の他領域での応用。

行為の同時性だけでなく、論理の同時性を示している。接続詞:andem……その誤訳。

大量の紫外線の照射をうけて、他の菌の染色体をつかんだまま亡命するウイルス。

快活な対話者の内部で、無関係に機能している腸管たち。

海と山にはさまれた細長い都市を平行に走る鉄道の同じ名前の駅。著名な丘の反対側に位置する同じ名前のレストラン。

自分では知らないまま、暗い湾をとりまく光の帯を形成している都市下層住民の灯。

非人称の風に、ひびの入った頭蓋のようなバスからはみでた不安をさらしている到着者と土着者。

孤立しているために突入し、埋没する儀式。

街が、そのかかとで軽く踏まれるために作られた夕焼け色の靴。

統一行動に関する二派の乱闘を、それぞれの党派についても、それらと自分との対比

においても、トッカータとフーガのように聞くこともできる二種類の構成メモ。

このようなイメージを、自在に、また制約されて変移させていくとき、それらが、別の時間||空間のリズムをもつ境界を訪れていると仮定してみる。異質の領域を α 、 β 、 r と名付けておくと、いままでは無意識におこなわれていた α 、 β 、 r の相互の対話や劇を意識的につくれるようになるかもしれない。

情熱の形式が変移し、所属組織が分裂し、生活基盤が複雑化するとき、たとえば

$\alpha \uparrow \alpha$ 、 $\beta \uparrow \beta$ 、 $r \uparrow r$ と対比でき、
 $\alpha \uparrow \beta \uparrow \alpha$ 、 $r \uparrow \beta \uparrow r$ という風に中間項を媒介することもできる

ぜひとも、いつか、 r をあえて無視して α と β を交差させねばならなかった状況と存在をかきたい。 r から切断することで、ある意味では α と β がより深く衝撃し合い、それによって r の瞬間的位相をぐらつかせたが、 r の持続性に復讐されることになった。しかし、その問題をはじめて提起しえたのは、 α と β のみに賭けたからであるという逆関係の苦しみを忘れてはならない。

* ある時間||空間の重力偏差をもって α 、 β 、 r という系をつくってきたとして、それを普遍的な α 、 β 、 r の系に変移させることが必要ではないか。

また、それらの項を区分する根拠をあいまいにして放置しておく態度は、たとえば、関係としての被告団を内包する、と語っただけで放置しておく態度と同じである。おそらく、そのことが、被告になる意味であり、この非合法性をとらえかえし変移させなければならぬ。

そうでない限り、六・一五被告団とは最も異質な六甲空間へこの発想を投げこむ意味は大きいとはいえず、発想だけで自己満足してしまい、 α を β で、 β を γ で、 γ を α で批判することによって、逆に全ての欠陥を内包してしまう。

〈 〉変移のどこかない部分に光を当てよ。岬の灯台に打ち寄せる鉛色の波へ。

まず、〈 〉変移につきまとう、自己増殖的な幻想性の根を絶ち切れ。その幻想性を生んだ関節をバラバラにとき放てば、その関節と同じ時間にいたものたち……

虐殺されたもの

イデオロギー的批判で組織的に切り抜けたもの

その関節を無視したもの

知らずに生活し、病み、死んだもの

なしくずしに利用しはじめたもの

抒情的に旋回しつつあったもの

などの時間的変移をさぐることによって、別の主体の運動へ入りこんで行ける。

次に、この〈 〉変移の幻想性を、ここで、いまとりかこんでいるものたち……

事実性にしがみつき判断するもの

恐れや反撥をアルコールで緩和するもの

かわりない領域だと無視するもの

組織活動に免罪符を求めるもの

などの空間的変移をさぐることによって、別の主体の構造へ入りこんで行ける。

そして、この操作を、ちがった関節、ちがった幻想性についてもおこなない、いわば β 領域から α 、 γ へも変移させる。

* 油コブシに〈 〉をつけはじめている……とかくとき、それは、序章から第三章までに〈 〉をつけていくことと、第四章以後に〈 〉をつけていくことの二重性を含んでしまふ。この二重性を、どのように越えればよいのか、まだ分らない。

〈 〉をつける個所や、〈 〉をつけてから変移させていく方法が、さまざまに変移していくことへの不安。ある個所、ある方法へ決断した場合、他の場所、他の方法の疎外の上に立って決断したのだという重さ。

二重性を含んだまま、〈 〉の変移を可能な限り展開していくことが第一段階。必ず、これに対する粘着的な抵抗が生まれてくるはずだが、その抵抗力のかたちを分類し、そのまま〈 〉の変移の新しいかたちとして組み入れていくのが第二段階。

このような操作の外部から加わってくる圧力も同じようにして組み入れていくのが第三段階。

おそらく、待ちかまえている抵抗力は、序章から第三章までの空間的な表現〈 〉をつけるときに現われ、待ちかまえている圧力は、第四章以後を表現する時間的な契機へ〈 〉をつけるときに現われるだろう。

この予想は、いま不意に襲ってきたのであるが、〈六甲〉の表現が内部から裁かれていく過程を逆転したい。

何ものかの挑発に乗ってしまうかもしれないけれども、序章から第三章までの表現からひびいてくる時間のリズムと、第四章以後の表現から立ち昇る空間の匂いに〈〉をつけ交差させてみよう。これが、新しい罪を、打ち寄せる波のように引き寄せるであろうことを予感しながら。

ところで、いま、虹がかかっているよ、と喋って通り過ぎるのは何ものか。〈〉からはみだしていくものたちか？

* 何ということだノ表現に「やす以外の全ての力を注いでいた試み……失われた時間」空間の意味を、油コブシの見える闇の中でとりだそうとしてきた試みが、他者から舞いこんだメモによって中断されている。他者が、メモの裏側へ自己を引き離そうとして、祈りに近い決意を示したために。

完了形の胎児と未完了形の胎児が同じ運命に陥ることを怖れているのだ。

第四章へのメモをかいていく気力がない。物象が反乱する。情念が錯乱すると、物象が、そのすきにつけこんでくる。

完了形と未完了形にはさまれて、いままでのメモを支える場が不定になっている。〈〉を用いて表現しようと試みたとき、思いもかけない方向からやってきた〈〉が、表現しようとする意識をつつみこんでしまった。

もはや、第四章をかくのを放棄してもよいと覚悟して、他者からのメモから、完了形と未完了形にはさまれたまま、しばらくだされてくる触感や声をかきとめておこう。

最も美しいときに開かれるメモ、あるいは眼。

血族の住む洞窟へ予定より早く帰ったとき、日沈までの空が、じっとり汗ばんで、青いまま変移しない。

港内遊覧船の甲板の上で、工場廃液のしぶきを浴びながら、あえて山肌に触れない感覚を皮膚の裏側へ蓄積する。六甲は反対側へ変移しても、太陽や星はついてきてくれる。

静かすぎる風景に吊されたために、塔の風鐸が、微かに独語する。この都市のマークは、六甲の彎曲と防波堤の彎曲を交差させてつくつてある、と。

傷ついたようにけいれんし、上から抑えるので、かえって異質な触感を固定してしまう手。

たぎりたち、消え去り、しかも世界の体温を未完了のまま交換してしまう舌。

中絶の時間——空間が挿入されたのは、再帰と深化のためにはよいことなのかかもしれない。しかし、これは地下水道からの蜂起の中絶と無関係ではないはずだ。

* いままで走り書きしてきた全てのメモにまつわりつく全ての〈〉を払いのけたい凶暴な衝動にとりつかれている。しかし、もがけはもがくほど〈〉が何重にもからみついてくる。

ちぎれて散らばったメモ……無人の高山植物園でも、こんな風に、まるで、ばらまいたようにタンポポが咲いていた……を拾い集めて、〈〉を抜かず意図を捨てたようなりをしながら、さまざまな〈〉の根拠をさぐってみよう。

〈 〉が生まれてくる契機は、ほぼ次の三種類に分けられる。

α 、〈 〉の変移を徹底化しようとするとき。

β 、 α の運動に対する表現内からの不安を放置するとき。

γ 、 α や β の運動に対する表現外からの不安を放置するとき。

ここで用いる α 、 β 、 γ の記号は、前のメモで用いた記号と同じではないが、意識的に錯乱をひきおこすつもりで同じものを用いる。

α 、 β 、 γ のいずれも、何ものかが〈 〉から疎外されようとしているときの回復の衝動から発生している点では同位である。けれども〈 〉の運動は、それなりの必死の必然性をもっているのも事実なのだ。

いま、疎外されようとしているときの回復の衝動、とかいてしまったが、比喩的に次の文をかいておきたい。

α 、 β 、 γ が、たとえば政治の領域において、相互に、時間的脱落感、空間的脱落感、組織的脱落感をもっているとして、これらの脱落感は同位であり、どれか一つに拠ることも、循環することも虚しい。

このような関係が、政治の領域だけにとどまらず、全ての存在をひたしはじめているところこそ〈 〉の発生の根拠であろう。

α 、 β 、 γ は、どんな危機にあるのか想像してみる。

それぞれの間に、変移しない一種の双極性があるのではないか。たとえば、ある一つの

事件の因子だけでは倒錯した現代史に触れられない場合のように。

双極性は、求心力と遠心力に似た、一方だけでは運動を論じられない因子をもっているらしい。

それらが統一されないことが危機なのであるが、この危機は、徹底的な模索と状況の転換が一致した場合にのみとらえられてきた。

しかし、その場合、危機がとらえられたのは、ある一つの事件によってではあっても、その危機への問いかけは、歴史的な形でなく、本質的な形をとってくる。

α 、 β 、 γ が、この危機の部分をとらえていながらも、全てを自己の責任として引きうけられないまま放置することが、〈 〉の根拠であるし、このメモを超える表現が不可能になるかもしれない理由である。

遅れからの復帰は、遅れそのものの中にある時間的—空間的な責任の力学をつつみこんでくるとき、はじめて許されるだろう。逆に、そのときはじめて、復帰すべき対象が実現されるのだ。

* このままでは、生きた形象は、生まれてきそうにない。メモをかきはじめた段階と同じように、表現したい意識と、したくない意識の間に、あるいは、かいてきた表現とかいてこなかった表現の間に、はさまれたままである。

第四章を書くとうする試み自体が〈 〉に入ってしまう時間がやってきた。あるいは、〈 〉からこぼれ落ちる時間からはさまれている。

けれども、むしろ、その時間に突入しなければならない。そのことによって時間をひきよせるのだ。ちょうど〈六甲〉をひきよせてきたように。

第四章を展開しようとするときのメモ、この項をも含めて全てのメモに〈 〉をつけよう。そして、六項のメモたちよ、汝らのメモ相互の間隙に生成し崩壊するドラマをかいま見よ。時間空間の責任の力学を追求するために、自らをメモとメモをつなぐ間隙とは直角の方向へ参加させながら。

第五章

視線が地図の上を、表六甲から裏六甲へつき抜けていくと、奇妙な地名が山系の両側に、ひっそりと息づいている。カミカ、ハクサリ、ザグガ原、ボシ、マンパイ、シル谷、カリマタ池、キスラシ山、シブレ山……地図なしにそこを歩いたら、ここが、そんな地名をもつことを予測しえないだろう、と考えるときの怖しさ。

地図の上に舞い込んできたホコリを吹き払おうとして、よくみるとタンポポの綿毛だ。

微かな筒状のかたちに含まれている〈生命〉を、異なった空間へ変移させるために、更に微かな白い毛が放射線状についている。十数本まではかぞえられるが、それ以上正確には綿毛と綿毛との間隙を区分できない。しかし、この放射線状の毛がいまもっている方向へどんだんのびていけば、六甲よりも巨大な空間を含んでしまうだろう。

第四章の六項のメモたちが、相互の間隙へ直角に入り込み、みずから介入しつとらえているヴィジョンは、次のようなものでもありうると想像してよい。

かならず、すべてのものは、感覚にとらえる前に弯曲してしまうのだと思ひこんで、やと動きだすことが可能になり、動きはじめて以来、いつでも、どこでも、強調しよう

した感覚が、逆にかすんでしまうのを知った、と波が揺れながら語る。街の東端で用もないのに途中下車し、つくりたての高速道路と、見すてられた住宅群を横断して、魚のとれないこの砂浜へやってきたたずむ幻影よ。あなたの、うちよせては帰っていく運動の仕方は私と同じだ。そして、ここからは見えないけれども、子午線の下あたりで、流れがいつものように方向を変えはじめていることも、あなたは知っていますね。

そうだ知っている。雨あがりの川にかかっている橋である私は次のことも。六甲から性急に走り下る水勢を緩和するために、河床は数十メートル毎に段状につくり変えられている。吸いかけたタバコのフィルターの色をした泥水は滝を垂直に降下する度に速度を分断されている。泡立つ水の前線は、前線であることが分るほど孤立し、コンクリートに石をはめこんだ河底が、歯をむきだして笑う。いくつにもとぎれた水の軍勢が、左右不対称の前線を、たえずジグザグに変移されながら私の下をくぐっていく。ふりむくと、河口のむこう、暗い巨船の上に暗い海が浮いている。

時間が自律的に流れるにまかせ。圧力の少い空間へ自分が流れるにまかせている海が。海が……？

ここは見なれた風景ではない、と思ひこむとき、ひざにくいこむ坂の傾斜、背中を流れる冷たさだけを支持しよう。海が、そのままの重量でショウウィンドウのガラスを飾り、氷山が六甲の耳たぶをかむ冬をつくりだすために。

〈かれら〉の恥ずかしさや、数字への不信や、肉親への哀れみを、デモ指揮者の唇をかむ恥ずかしさや、患者があたためる数字への不信や、娘たちが自分のリボンに触れるしぐさとつないでみよう。そのとき氷山に似たピラミッドの何本の稜線を越えていくことになるか。

いく切れかの雪、いやタンポポの綿毛が降りはじめている。

市電がそこで途絶える街の西端の街路樹の下で、だれも知らないだれかの墓をさがし疲れて休んでいる老人を語らせる声……埋葬や追悼は手にふれた途端にうそになる。それをたしかめにやってきたのが死者への思いやりというものだろう。

ただ一つ残った海水浴場で貸ヨットを見ている失業者を語らせる声……わざと組合運動ができないようにとやっていったら、一ばんどんずまりのところ、案外できるようなってしまいかもしれないな。

そのような声が、山系のこちら側と、海狭のこちら側をタンポポの綿毛を流す風のように流れるならば、次のような組織論が語られていても不思議ではない。

さっきの声を聞いて、遠心⇓求心を一致させようとする時間と、それを泥の中に埋める時間とが対話している、という風なことを一瞬でも考えたものはここに集まってくれ。かんとんにいうと、この空間に〈ない〉全ての組織構成員に、めいめいが仮装するのだ。きみたちのめいめいはこの空間にも、所属する組織にも、〈〉をつけていく。そして……

仮装するとき。

所属組織の論理で一切の対象を扱うとき。

仮装者同志で会議・討論するとき。

最大限一致と最低限一致のふくらみをもつ方針を一切の状況に投げつけ行動するとき。

この投げつけや行動が、敵対者や無関心者から反射してくるとき。その反射が、仮装者をとおりぬけるのに、更に仮装し続けようとするとき。

これらのすべてのときに生じる不安を階級関係と対応させて新しい組織をつくりだしていく。そのとき、同時にきみたちの仮装そのものをはぎとりながら。

仮装組織論……とよんでもいいが、この組織論がひらめくのは、六甲が、これらすべての異和感と、最も無縁な組織空間にあるからだ。それを逆用して、ここに存在しない組織からの派遣者に仮装し、自己の所属する組織をも〈〉へ入れていく。

ここに存在しない組織といっても分派闘争系列図を調べればいいわけではない。そのような図は、もっと深い位相での分派闘争を一枚の紙で切りとってきたものにすぎないのだから。

条件……一人でもやれるか？ 舞台へではなく、場外へ出られるか？ 政治組織以外の $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ 系を、自在に昇降できるか？ 仮装が不要になったとき仮装の罪で処刑されてもよいか？

遠くからの訪問者があれば胸の谷間と首すじにある目印しをたどって山上の平原へ行く。しかし、霧につつまれて夕方に最終バスがなくなると、タンポポをさがすひまもなく空腹がやってくる。

同じ頃、いつか、ひらめきが訪れたら、いくつか論文がかけるだろう、と自足して研究会を開いているものたち、と絶縁しているもの前にタンポポの切手をつけた〈第n論文〉をめぐる諸註が送られてくる。……

第n論文に〈〉をつけたのは、それを強調するためでもなく、いつか未来にかく予定だという意味でもない。第n論文が、永遠に仮構の位相にあることを示すのである。

またnというのは、いままでかいてきた論文の順序であるが、第n論文では、他者の作品の分析をするのではない。たとえ結果としてそうなっても、主眼は、この仮構の論文をかかせる何ものかの力を追求することである。諸註とは、このことを示している。

いま、ここで第(ロー)論文までの文章を構想すると共に、第(ロ十一)論文以後の文章に註をつけていくとすればどうなるか。

この仮定をするとき、第n論文以外のすべての論文が(へ)に入ってしまう。逆にいえば、このことは、第n論文が意識的に、また必然的に(へ)に入り、論文系列の位相から逸脱した結果として可能になっている。

(へ)をめぐる諸註が、既成の研究論文の枠内に、どんな影をおとすか。枠をこえて発散するか、枠の中で収束するか、枠をつくっていくのか、よく見るがいい。ただし、きみたちの頭蓋が影の実体に触れたとき破裂しても、それはこの論文の知ったことではない。

私が知らない間に、映画をつくっている映像たち。この街で一ばん見はらしのいいといわれる大学への階段をのぼっていくものの比重は風景に対して稀薄になり、まだ一人の観客も登場していない試写会には、フィルム回転音だけが白昼の闇に対抗している。

映像たちよ。撮影される前の自分に会いでかけても無駄だ。六甲はいつも、そこにあると思われているところにあるとは限らない。いちばん必要なきとき、いちばん必要でないとき、不意に現われてきただけなのだ。タンポポの綿毛を流すほどの風があれば、六甲は揺れる。そして、だれかが疲れて手を放せば、いつでも背景や小道具はくずれ落ちる。

複数の焦点と、隆起するフィルムのために生じた断層、そこには、撮影意図からの変移

を示すための映像の他に……。

六甲は美しくて住みよいという満足感も、やがて未来はこのようになるだろうという計算も、腕時計の肌ざわりから手錠を感じとらない心も、反革命を革命と判断するのに、いつも遅れてくる発想法も、すべて映しだす映像がうごいていなければならぬ。

ペン先を入れた小さなケースをとりだそうとすると、ペン先が語る。

楽にかいてみたら？ 軽くとんでみたら？ そのとき、かえって重い字のおとす影が、何百ものロマンの影であることが、はっきりしてくるでしょう。

ペンを持つ手が答える。その誘惑はだれよりも自分がよく感じている。同時に、はじめから楽にかこうとしても解決はしない。かきおわったときに、やはり、このかきかたが一ばん楽だったのだと、世界が一瞬でも感じるように……と祈るだけなのだ。

どこからも風信のとどかなくなったこの季節を逆回転するように、無人の丘でさかさまに倒れると、憂愁の重力が(へ)のまぶたにかかり、黄色い花びらをささみこむ。

臨時工であることを示す黄札が、作業服の上で立ちすくんでいる。……海底から水面を見上げると、のこぎり状の葉が浮く。……崖下を走る電車をみつめているときにも視界に侵入してくる斜面にはりついたタンポポの根。……牢獄でのわずかな散歩時間中に、くつ下をずり上げるふりをして、たった一本の黄色い花を、すばやくむしりとる囚人。

油コブシが見ている坂道で花びらを押しひろげ、花芯から放たれる香りをさぐるうとすれば、遠くの路上で遊ぶ幼児が、ふと手をとめるだろう。それでも、花芯のむこうの綿毛

がとりだされ、その綿毛のむこうの花びらがとりだされ……とりだされた何ものかは決意する。あの幼児の運命を、こんどは自分がなうことになる。になうときにせまってくる力をすべて花開かせよう。

まどろみの間に、どこかで着地していることは……

飛び上ろうとするとき、いままで殆んど意識しなかった条件から、いちばん強く規制される。

風に乗って舞うのは、関係のあるすべてのものに許しを乞うため。

岩の肌や、茨のふところに落ちたときは、いま創りつつあるのだと思いこまなければ、とても忍耐できない。

まどろみが、〈〉のまぶたから、はみ出し、その直前、小さなケースの中のペン先は、綿毛に変移している。

首都へ、群衆がビルディングに吸いこまれる時間に到着するため、深夜に六甲を通りすぎていくものたちよ。ここは、ネオンの棲息する海、テレビ・アンテナの群生する荒野ではない。いま、プラットフォームで鳴るベルを、発車の合図だと思っている限り、きみたちはどこへも行けはしない。

この列車をレールから逸脱させて六甲を横断して走らせるには、どれだけの労力が必要か計算しよう。風のような非人称の苦しみを〈〉のかたちをした貨車に積みこめ。ゼネストの前夜すわりこむときに持っているもの他は出発に不要だ。

そのようにささやきかけても、たじろがないものたち……足のくみかたや、字のかきかた、胸にとびこんでしまったタンポポの綿毛があれば、そっと微笑してつれて行け。

いつ、どこへ出発しようとも、すべての風景と交換しつくしてしまっているという抒情からの出発を。今日、最後にあの大衆浴場で会ったきみも。

〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉 〈 〉

六項のメモたちのとらえるヴィジョンは、このようなものでありうると想像してよいか。ここまで書いてきたとき、いわば表六甲を分水嶺にまで登りつめたとき、不意に裏六甲が姿をみせるように、不安としか表現のしようのないものがみえてくる。

第四章の六項のメモたちの間へ降下する六項のメモの過程をいまままでかいてきたのに……

一つの過程をかいているとき他の過程を空間的に排除してしまう不安と、一つの過程をかいているとき他の過程が時間的に変移してしまう不安がみえてくる。

これらの不安は〈六甲〉をかこうとする試みが、そのために見えない領域をつくりだしてしまうことから生れているのだろう。

このようにかきつけるとき、すでに無意識のうちに〈六甲〉の道は、分水嶺をすぎて表六甲から裏六甲へ入りこんでいたのかもしれない。不安がみえてきたとき、山系の全体も、おぼろげにみえてくるのか。

そういえば、序章から第二章をへて第三章までが表六甲の道であり、第四章以後が、すでに裏六甲へ通じていたのだろう。だから第五章は、第二章と同位相にあり、第五章の六

項のメモたちは、第二章の〈私〉たちと対応している。

ちがう点は、希望に似た不安がみえてきたことで、不安は、原告団のように告発する。

……

その通りだ、と認めつつも、何ものかが私に語りせて、不安の告発の時間を短縮しようとするのである。

おお、その告発を聞くために、ここまで書いてきたのだ！

告発の時間を早くおわらせたい……がしかし、いままで〈六甲〉をかいてきた時間は、どんな流れかたをしてきたのだろうか。

いままで、どの章をかいているときでも、できるだけ早くかきおわり、解放されようとながってきた。けれども、分裂し、からみ合う構想を、できる限り時間の方へ投げつけてきたとき、いつもその極限で、全く意外な表現が可能になった。

とくに第四章をかいている最終過程で、メモ相互の間隙へ直角に降下する方向全体を一つの表現として提出しうるのに気付いたとき、汚い文字、抹殺し、捨てることが、そこから与えられる最後で唯一の快楽になっていたメモ群が、突然、光を放ちはじめたのを忘れることができない。この光は、ほんとは、微かながらも序章からずっと〈六甲〉の道を照らしていたはずである。

けれども、私は、この光を十分にとらえ切っていない。なぜなら、どの章をかきおわ

ったときにも、とくに第四章をかきおわったとき、切迫した時間から、安らかなおののきの空間へ投げこまれてしまったから。

そればかりではない。その安らかなおののきの空間も、ゆっくりと、しかし確実に変移しはじめ、次の切迫した時間へ進んでいくから。そのことに、いま気付いたから。

長距離コースを泳ぎ切ったものが、ゴールの後でもなおプールの端でターンするように、切迫した時間に触れて、安らかなおののきの空間へもどっていく。……もどっていく？何ものかに投げかえされているのだ。

この断絶、この苦しみは、何かに似ていないか。そうだ！切迫した時間を付着させている首都から、まどろんでいる空間、六甲への漂着。時間に咲くタンポポとのすれちがいから、空間に咲くタンポポへの陶醉。

これらは罪の拡大再生産だろうか。……ここからは、もう、私だけのために語ろう。

切迫した時間から、安らかなおののきの空間への無意識的な断絶……というかたちは、逆転させることができるのではないか。安らかなおののきの空間から、切迫した時間への意識的な飛躍。

そのとき、時間との接しかたに関する罪の深さが逆の意味をもちはじめてくるだろう。

いかにして逆転させるか。いまは一つの予感しかない。α・β・γの構造とその時間的な根拠をさぐること。

〈六甲〉からはみだそうとする油コブシで、こんなことをかいた記憶がある……

〈 〉が生まれてくる契機は、ほぼ次の三種類に分けられる。

α 、〈 〉の変移を徹底しようとするとき。

β 、 α の運動に対する表現内からの不安を放置するとき。

α 、 β や γ の運動に対する表現外からの不安を放置するとき。

α ・ β ・ γ というのは、この彎曲した世界における何ものかを区分しようとする力（ピラミッドをつくっている力といってもよい）が、〈六甲〉におとしている影のような境界線ではないだろうか。

もし、そうであるとすれば、いや、必ず、そうであるようにさせなければならぬのだが……切迫した時間から、安らかなまどろみの空間へ、という変移は、激しければ激しいほどよいのだ。また、このかたちと α ・ β ・ γ 系のかたちとの比較できる領域が、広ければ広いほどよいのだ。

〈六甲〉から、すべての不安の占拠がはじまる。いまは、一点でのみ時間の構造と接しているにすぎない空間としての〈六甲〉から。

不安をこの世界に深化拡大することによって告発し、占拠する、関係としての原告団をつくろう。

はるかな時間∥空間から、〈六甲〉へのささやきがやってくる。これから占拠される不安たちのささやきが。

私はいま、序章に対応する位相にあると感じている。……すると私は、第五章を表現しようとしているうちに第六章∥終章まで表現してしまったのであろうか。あるいは、序章

から第五章までを表現することが第六章∥終章を表現することになるのであろうか。

断言できること……この瞬間から〈六甲〉をかき続ける主体は、私だけではなく、私たちである。

関係としての原告団よ、〈六甲〉を吹き抜ける風によって、当然の比喩だが、タンポポの綿毛のように、彎曲した世界へ突入していけ。

私たちのであうたたかいが、〈六甲〉第六章∥終章を表現することである。

……であることは不確定であるにしても、〈〉は何をしているのか、何をなしているか。
 〈〉の群が乱舞する領域のはずれから〈〉が、はみだし、ゆるめき、とびたとうとす
 るとき、そのすきまに、このような問いがうまれるだろうか。

問う〈〉の位置量や運動量が不確定であるにしても、その積は〈〉として現われて
 いる……という風な仮定をする〈〉があれば。

すると、すでに〈〉の報告が開始されている。まだ自分の影が落ちていない方へとゆ
 らめいていく〈〉の報告が。

さまざまの〈〉が、さまざまのものを内包しているが、どの〈〉も、それらの上を
 接線のようにかすめていく〈〉に気付かない。そして、かすめていく〈〉も、内包さ
 れているさまざまのものを、とりだしたり、はいりこんだりはできない。〈〉の存在す
 る領域が、どこまであるのか、最も離れたところにある〈〉は何を内包しているのか、
 という疑問が〈〉をつき動かすから。いまは、報告する〈〉と最も遠い〈〉の間に
 はさまれている〈〉たちの印象をかるうじて一つの例で語ることにできない。〈〉
 中で息づいているものたちとのつらい別れを越えて。

かぞえきれないほどの記号〈〉が、題名や発言や引用につけられている。それは「
 や」「」とのちがいが区分されておらず、ただ、題名や発言や引用であることを他のもの
 から区分しているにすぎない。この報告でさえ、その危険をはらんでいる。

〈〉は、いくらかちがつた働きをしており、たんに区分するだけではなくて、補足や
 説明を小声でつけ加えるためにもつかわれている。

〈この記号に〈〉が親しみを感ずるのは、表現Aが未完結の意味のまま現われてくる
 とき、可逆的に現われてくる表現Bを、はじらいをこめて支えている場合である。それは、
 〈〉の追求にも役立つだろう。

さまざまの〈〉たちが、内包するものに、さまざまの力を加えて変移させようとして
 いる。

内包した対象を縮少、否定したり、ニセであることを示している〈〉。

〈文化〉大革命は……主体性をカッコに入れて……

強調している〈〉。これは、傍点、傍線、ゴチック体と、殆んど同じ意図をもつが、
 デザイン風に乱用されやすい。とくに広告などで。

〈強力なガス・エネルギーをもっとも効率よく〈凍らす〉〈冷やす〉力に应用したの
 が、二冷式ガス冷蔵庫……六百円〈初回〉でスグお届けします。〉

記号のかたちを視覚的にとらえて、イメージの形成に应用している〈〉。

〈〈〉のスクラムが生まれ、〈〉のまぶたが閉じられ、〈〉を連結した列車が走っ
 ていく。〉

重層的に、リズムに乗って、何度目かに必ず現われてくる〈〉。

〈AはBと直接には関係がないのであるが、その〈関係がない〉ところで全く別の発言
 ができるだろう。……おくれたら、その〈おくれ〉を逆用せよ。〉

記号が内包することばを、別の位相に変移させてよませている〈〉。

(いま、ここで語ったことは、〈断崖〉の存在する全ての場所についていえる。)

適確な表現へ、どうしても定着できずに、不安定なまま投げだしておくときの記号としての〈〉。

(…それが〈表現する〉ことである。)

記号としての簡単さのために、ばくぜんとした気分のまま投げだされる危険がある。この危険は、たとえば、カメラで〈〉をとらえてみるよときの困難さに対応している。

反比例のように伸縮する〈〉。

(風景の極限に岐立している〈重さ〉と、風に舞う〈軽さ〉がつくりだす、ねじれた円錐の中でゆらめく映像たち。)

〈〉をつけた場所から、次第に遠くへ、波紋を拡げながら連鎖反応させていく〈〉。

(〈火〉をタバコにつけると、ひざの上の幼児の頭髮が、かなたの山肌が、たくさんの放火未遂者たちの推定が燃えはじめる。)

〈〉をつけた場所を、ある関係において結合||交換し、その間に世界をはさんでしまおうとする〈〉。

(無意識的な〈革命〉と、まどろんでいる〈美しい〉空間の裂け目に戦慄する〈組織〉)

ある表現を破壊し、構成しなおしたいときの〈〉。

(いままでの〈報告〉)

まだ存在しない表現へ、方程式のxのように、何かをとらえるワナとしてつける〈〉。
(〈〉のこれからの報告。)

……

〈〉が知らずに通りすぎた〈〉があれば、どうか許してほしい。そして〈〉のこちらへ、はみだし、ゆらめき、とんできてほしい。

〈〉は、いま何もみえず、静止状態にある。〈〉の群のいちばん端には、内部に確定した対象をもたない〈〉自体なのだろうか。

しかし、これを記号〈〉をつかってしか報告できないことへの驚きがある。

〈〉は、この驚きの中へ降りていく。今夜の星座を先取したプラネタリウムから、ラセン状の階段を幾層もかぞえて、まだ明るい日ざしの中へ出ていくとき……のようであるか。

いままでふれてきた〈〉、それらの印象だけでなく、その〈〉が、それぞれ現われてこざるをえなかった時間的契機をとらえなおそう。

その契機が、個有性と恒常性の間で、どのようにうごいているか。その変曲した構造に入りこむ方法は何か。

その場合、ある断片や断面に閉じこめられざるをえなかった〈〉の位相と、そこからの変化を、はつきりとりださなければならぬ。

〈〉の位相への接近の仕方、それ以後の変化の仕方を、もっと有機的にとらえる必要がある。一つの記号だけにとどまっていれば何も始まらない。変化させ、応用するために。

そして、〈〉は記号であるとは限らない。〈〉をつけるときは、〈〉をつけられずしてしまふときだ。この相対性を確認しよう。

記号以外の〈〉を意識するのは、その主体と、〈〉のむこうにある対象の平衡が失われて、最大の振幅で揺れる瞬間であろう。そのときの叫びが記号にもなりうるというだけだ。そして……

〈〉だけしかつかえないときと、〈〉をつかえないときがある。

表現されたものが、さまざまに意味をもちはじめるとき、表現したはずの主体がふと他の位相へ複数化するときがある。

ことは、文章、作品全体……と〈〉をつける対象が拡大するとき、どこへいきつくか。

また、文章に限っても、ことばによって〈〉がつけやすかったり、つけにくかったりする。

〈〉をつける対象の大きさに、ちがいがあろう。ある事柄の総体ではなく、その中の一場面、一つの動作のみが問題になるように。

特定部分に〈〉をつけると、他の部分にどんな影響を与えるか。〈〉の度合いが、どのように増大または減少するか。そして、〈〉をつける主体は。

これと逆に、〈〉をとり去っていく方法や、他への影響も追求しなければならない。

これらの問題を、どこか遠くにいる〈〉たちが模索しているかもしれないが、それらと出会う余裕がなかった。いつか必ず出会うようにすすんでいきたいのだが……。

いま〈〉は、〈〉の群の端に立っている。このむこうにあるのは何か……。それは、意外にも、〈〉が、はじめに発した地点である。

すると〈〉は、〈〉の群の上を一周してとんだわけである。〈〉たちは包囲に似た環を無意識のうちにつくっており、一ヶ所が開かれたままだ。そして、そのことにより、開かれたままの部分に包囲していたことになる。

更に、その開かれた部分を、一周してきた〈〉が埋めれば、未完の環が完了し、何かを包囲してしまう。

何をか。少くとも、これらの〈〉の群は、〈〉は何をしているのか、何をなしているかという問いを包囲してきた。たくさんの〈〉の群は、〈〉の知らない間に共闘をしてきてくれたのである。〈〉が触れなかった全ての〈〉たちよ。

しかし、それにもかかわらず、〈〉のこれまでの報告そのものに、やむをえなかったにせよつきまとう偏差、それによる苦痛は残る。報告のしかたが〈〉のマイナス面すべてを背負いこんでいる。

この苦痛は全ての〈〉たちの苦痛とどこかで関連しあい、包括しあっているのであるが、それをとりきるためには、すべての〈〉から〈〉をはみださせ、ゆらめかせ、と

びたせなければならぬ。〈〉をなくすためにも、記号をふくめた〈〉の乱用が
必要な時期が続くだろう。

〈〉が消えさるのは、いつ、どのようにして可能か。〈〉が、いままで占拠しな
った方向、〈〉のむこう側に突入し、すべての〈〉に閉じこめられたヴィジョンを花
開かせながら〈〉をつける力との戦闘を終了するときである。そのための戦闘の開始が
迫っている。

包囲 (2)

未完の環をつくっている〈〉群に対して

ことばを投げかけた

手をさしのべたり

憎悪を抱いたり

眠ったり

通りすぎたり

飢えたり

……

その他あらゆる動作が許されている。〈〉群への動作と、それに対する反応は複合し
ており、ある主体の動作が、他方の状況をつくりだす。

いま、〈〉群のむこうへ突入していこうとする動作があれば、その主体は、〈〉群

のさまざまな項目を支える力と、次のような非連続のV(とかりにしておく)を共有し
ている。

〈縮少、否定している〉

〈かれら〉が〈かれら〉の眼差しによって、絶えず自分のカッコを、即ち、自分の中の
他者を意識し続けてきたのは逆に、〈かれら〉は自分の手で自己に課したカッコをとり
さろうとしない。

〈文化〉大革命、〈文〉化大革命、〈〉化大革命……と内包する対象を〈縮少〉して
いく手つきは何に似てくるか。

どの〈〉も、自分の上を接線のようにかすめていく〈〉に気付かなかつた。そして、
かすめていく〈〉も、内包されているさまざまなものを、とりだしたり、はいりこんだ
りできなかった。しかし、二つの〈なかつた〉は、同時に、はじめて他者の表情にふれて
いたのである。

署名も投票もしない、紙の上の固有名詞と絶縁した行動が、紙の下ではじまる。

〈強調している〉……

暑さを〈涼〉にかえるショッピング……ご不要のくつをはいて行って、その場で新品と
はきかえ、帰りは荷物にならず〈さらに300円安くなる〉という近頃ちょっと涼しいお
話。

AはA（とかきかえることもできることから判るように、A以外の部分へ、Aから一ぱん遠いところまで影響を与える。圧殺するか、生きかえるか、脈はくをしらべよ。

しらべる眼は、対象を選択しながら、必要なものしかみないので、（）以外に何があるか記憶しようとはしない。……記号にさえ固執せねばならない状況とは何か、という問いが眼のむこうから生まれてくるまで。

付け加えるのではなく、取り去ることによって強調されるときがある。

〈視覚的にとらえている〉……

水に映った山のかたちは、木片に乗って河を渡るものが現われると消える。

複数のスローガンをもつ党派の分裂過程……（）の隙間から現代史の傷口がみえる、と思うとき、与えられた構図からの発想がもう一つ別の傷口をつくっている。

（）群の断面へ直角に接近し、くぐり抜けるならば、銀河をみるような一瞬のあとで盲目になってしまうだろうか。

全身に突きささるガラスの破片で外の様子を反射させてみると、無数の魔法ピン状の部屋が落下していく。互いに衝突しあいながら数年もかかって。これらの光景全体も巨大な魔法ピンの中にある。このピンの所有者の表情はまだみえない。

〈重層的にリズムに乗って〉……

交差点で信号が変わるたびに、よみがえってくるのは隊列から聞えてくるワッショイ、ワッショイのかけ声。他のすべての者が途中で疲れて何度か発声を中断しても、一度も沈黙しなかった死者。

A↓B↓Cと完結したようにみえるものを、AからBへ、BからCへと追跡しおわるまでの間に、Cからどこかへ去っていくものの羽ばたきの音をとらえているか。

危機に直面すると、呪文のように、あることばや方法を乱用することへの恥かしさ。その表情を、乱用を強制するすべてのものに拡大し続けよう。

あらゆる（）周年記念日を直線状の暦から破りとする日程を組んでいる。

〈別の位相へ変移させて〉……

異端を攻めるは害あるのみ……か？ 反物を巻く軸の使用方法は無数にある。

丘陵に咲く花々の大きさと、断崖に咲く花々の大きさととの差が、これほど大きい季節はない……見えすぎる村落を吹く風がいう。

（）群の分布範囲をたしかめに出発したときから、一周しおわるまでに何が不変のままであるか。〈報告者〉にとって、また（）群にとって。

もう、これ以上うそをつけない、とメモを一度もかいたことのない他者がつぶやくときにも、まだ体温が残っている。だから、そのことばの主語もあと、しばらくは共有されている。

〈不安定なまま投げだしておく〉……

これは〈表現〉とでもいっておくしかない。

不安なメモを次々に焔の中へ投げすてながら、ふと後へ、よろめきながらふりかえると、メモになり切らないものが、果てしない山系のように投げだされている。

一つ一つの〈〉が、不安以外に何を包圍するかは不確定であるにしても、これらの〈〉の動きが、必然的な未完了へたどりつくとき、何かを包圍してしまうことは確定している。

……してもしあわせ、……しなくてもしあわせ、どちらでもしあわせ、と他者にむかって語り続けている者のなめてきた不運。

〈記号としての簡単さのために〉……

他領域からの信号。

〈Qt1Pt〉∥〈Qt01Pt〉

時間に関係のない確率の保存。

記号を終止符のようにでなく、開始符のようにつけたかどうか。印刷者の困惑以上の困惑をいくつ越えたか。

〈〉は一重山カギ、〈〉は二重山カギ……横に流れる文中で転倒して使うときは

何と呼ばれるか。

ほら、あれ、いい匂いがするよ。幼児をカメラのように抱いて、見知らぬ庭へ数歩、踏みこんでいく。

〈反比例のように伸縮する〉……

外国のレストランで働く青年にむかって、故国からの観光客が、ためすように叫ぶ。〈SALTI〉

この風景の全法廷と対等に岐立しようという抒情が訪れるとき、この風景を引き裂いて飛び立つほどの抒情を抱きえなかった他者への怒りも訪れている。

〈〉群の応用極限までたどろうとするV群と、〈〉群の発生契機へ到達しようとするV群が出会うであろう停車場へ。

平和な〈非〉兵器製造工場の中で、いちばん愛するものが射撃されるとき弾丸を点検せよ。

〈波紋を広げながら連鎖反応させていく〉……

自然空間は任意に没入できるけれども、資本空間は設備がとどっているけれども、労働空間は転倒の機会を与えるけれども……やはりどこにもない空間の扉を求めて。

がけくずれの音をテープにとって、回転速度を調節しながら、ささやきに近いものだけ

をすくいとっていこうとする。

沈黙、呻き、歌、呼吸……へどへどをつける対象を浮遊させると、どこへいきつくか。

V群に落ちてくる記号へは、水面にあるへ群の影でもあり、V群の舞台げいこに使う衣裳でもある。

〈結合Ⅱ交換する〉……

この一つのへ群の生成史の中に、へ群全体の生成史が、どの段階まで含まれているか。

弾痕の残る街頭を歩くときの楽しさ、広場周辺の舗道をアスファルトで覆ってしまう配慮、批判する権利を保留するためだけに参加している卑しさ……これらの貨幣が通用する市場を押しつぶせ。

次第に磨滅する体験、決して追いつけない体験が問題なのではない。これらを結合Ⅱ交換するテコをつくりだす問題に対して、意識と組織が磨滅し、決して追いつけないのだ。

汝が、へ群に対して交換〈不〉可能なもの以外の何かに結合しているならば、いますぐに、へ群を一掃する場をつくれ。

〈破壊し、構成しなおす〉……

各語、各章、各作品が、印刷完了に媒介されて言語圏へ固定されてしまったとしても、休息の表情を破壊し、構成しなおしていく表情がある。

(1)のへ群の例を、逆の順序で、無限の文字をかけてたどることもできたのだ、と思うほど、この方向へのめり込んできた、あるいはのめり出てきた。

船体の基底部に一ばんもろい釘をうちつけてしまった。その代り、難破したあとその釘は、短剣にも、さいほう針にもなる。

吐き気……内臓の対極にある星が、欲望を感じているから。

〈買のようにとらえる〉……

へ群の与えるいら立たしさが、過去の固有と未来の普遍にはさまれていることから生じているという仮定。

V群が、ある動きかたを重複したり回避したりするとき、重複と回避は、未完了という軸に関して対称なのではないのか。

へ群のむこうへ突入することが、へ群を相乗して、応用極限と発生契機を同時にとらえることになる。へ群の条件をみたらすならば。

へ群に包囲に対して、必ず国家権力も報復するだろう。その時刻は決定されているか。否、そして然り。

《戦闘の開始が迫っている》ために出現する〈V〉。

V群が、それぞれの項目ごとに分散して出現しているのはなぜか。

一つずつ切り離すと非連続であっても、全体を同時にとらえていくと(1)の例に対応して

a、〈〉の空間的なひろがり

b、〈〉の時間的なひろがり

c、他の〈〉との交差

d、これらと一点でのみ接する方向

へむかっていると考えるとよいだろう。この分散する方向を〈〉群全体について応用してみようか。すでにやりつつある。いま語ったことが〈〉群に対するaなのだ。

V群の動きが中断されてしまうのは作戦の失敗ではないか。

すべての問題を統一して扱おうとしたことが原因の一つである。そのことがV出現を中断した責任はひきうけるが、これまでは作戦の基準として(1)の〈〉群を一周するのに要する時間をおいてみた。この条件下でV群が、どれだけの幻想領域へすすんでいけるか測定しなかったのだ。V群の動きが、ある力のために偏差すればするほど、未完了になればなるほど、そこには武装した〈敵〉がいるはずだし、作戦も確定してくる。

〈〉群を拠点とする突入は抽象的だし、あいまいだと思うが。

これが最初の〈敵〉でもあるのだ。仮装して皆に逆用しているけれども。〈私〉たちの戦闘が、〈〉群に対してまず開始されたということは、任意の、偶然的、強制された戦闘よりも必然性を帯びている。少くとも、かつて固有の(年代的)時間や、固有の(地名)空間に制約され、対立し、くぐり抜けてきた〈私〉たちは、あらゆる時間||空間を包囲し、変革していくための過渡的な砦として〈〉群を越えていく。

Vたちが、〈敵〉たちと〈私〉たちの関係において果す役割りは何か。

〈〉群のむこうに突入したとき、V群にも、まだ記号〈〉が付いているのは、戦闘が、まだ開始されたばかりだということを示している。

Vを閉じこめ、〈私〉たちの進撃を阻止する力は、彎曲した世界の構造と対応しているはずだ。〈私〉たちは全てのV群に仮装し続けるだろう。そして、〈敵〉と戦闘するV群が勝利したとき〈〉群も消滅しなければならぬ。

一つの子測……V群は〈〉群に対応して出現しているばかりでなく、〈〉群とは最も遠い夢のような条件にも対応して出現している。〈〉位相と非〈〉位相を往還するV群を包囲しよう。

包囲 (3)

〈……はVの転倒ではないかと、一瞬ためらう。

おお、そんなことのために、ここまでやってきたのではない。

否定したとき合流している。

復元性と慣性を持ち、振動の片側だけを斜面につける。

戦術的評価に収束しない快樂へ交差させる。

固有のかたちと出会わないために現われる。

*

舞い下りてくるものから任意に、しかし微笑をこわばらせて拾い上げる。

増幅作用が回帰していく方向へ耳を傾ける。

*

前面におしだす、やむをえない不快さを積分する。

背後からはぎとって、自然に中心部へ触れる。

浮遊するしぐさの密度を不平等に配分している。

服装と、武装の間を吹き抜けていく。

*

眼を開いても、しめつけ、くいこみ、ひきずる。

閉じたままのページを切り裂いて垂直に読む。

水面に残された木片群を、渡ろうとしているものへ手を上げている。

全ての過程をみないことに、立ちすくみながら錘を下す。

組織の生命を、より重視して数え上げる。

若すぎも、老いすぎもしない支点に、冬支度の棒をうちつけている。

*

反射させ、屈折させ、しかも透明に、どの曲りかどの風景にも拡がっている。

参加と不参加に、同量の異和感を与える。

いつでも、どこでも発音される言葉に結びつけた糸をしらべる。

飛び去ったあとで、それと無関係にとりかえそうとする姿勢に似せる。

非日常の錯乱へ沈む速度を横切る。

けれども、合唱を聞きながら、苦痛を歌う。

*

すべてを占拠しはじめるのだと思いきまざるをえない扉をきしらせる。

部分が相互に全体を抱きとめるように突き放す。

不変の摩擦を推移させて、ゆるやかに世界を崩していく。

疾走しすぎたので、ここにこぼれている。

すでに水たまりに落ちたまなざしで、突出した岬へ泳いでいる。

仮装しきらなかつた隙間からの浸水も身体を凍りつかせる。

*

どのような憎悪も同心色彩だろうか、と確定した表情でいう。

未完のまま完了させ続ける。

いつか足もとに漂着する靴を照らしだそうとしている。

不要なメモが、どの炎の中で、消された情熱よりもよく燃えるかたしかめる。

交換（不）可能な領域だけにふれたので、ふれた相手に夢と同位相の現象であると総括させよう。

複数にのびる未来軸の割れ目へ、熱い汗をしたたらせて果実を栽培する。

*

ふと、ではなく、力をこめて呼吸する。

線路にしきつめられ、投げられるのを待つ。

系と外界の強度因子が等しいような条件下に発生する。

開始の叫びが上るまでに指の握り具合を測定する。
橋と橋の間に関心を寄せ、別の橋をかけはじめる。

ジグザグ・デモよりも複雑な図形へ地図を溶かしこんでいる。

*

決断の軽さだけ、結果を重くする。

項目を固定しながら、対極へ脱出させる。

最下限の幻想を、最上限の幻想にかさねようとする。

すべてを同一の船体に積みこもうとしてなだれおちる荷物の影を浴びる。

不連続な副詞句によって歯をみがく。

管へくりかえし力を加え、衝撃波を送る。

*

真空へ吸引される布から模様を編みだそうとする。

街をつつむ皮膚の上から、ネジを一本さしこむ。

その連鎖が中絶される空間へ、スクラムを組まずに連鎖していく。

まだ、うたれていない終止符の残り香をかぐ。

支持と非難を巻きとるように傷口からとりさる。

名づけがたい唯一の道具で、樹を倒し、パンを切り、エンピツをけずる。

*

意識の平衡も転倒しうるように、最も速い昔酷の中でまどろんでいる。

弯曲の両端を、この位相から、最も近くへ引きしぼっていく手ざわりに恥らいをこめる。

助動詞の滝を逆流させようとする。

傘をさすことと同じ日常であることに驚く。

旋回するときの棒を投げかえす。

これでもない、これでもない、というつぶやきを、ことばの外へ運び出す。

*

衝突しても無と化さない世界と出会うために別れる。

順列に従って追っていくとき、はじめて、全てに近い余剰がうごめく。

どんな演算によっても不変であるような方向をたどる。

なくそうとする作業によって、拡大再生産していく。

どうしようもなく原罪を負わされる背中のもこう側へのみ加担する。

呼吸をととのえようとするときの孤立と必要から出発する。

*

予測不可能の契機を通り過ぎていく。

まだ現われない動作を包囲していく。

のめりこんだ空間を仮構しながら、燃え上る時間の液体をしぼり出す。

陶酔に似たつらさのしづくを払い落している。

やりたいことと、やりたくないことを飲み干す。

転倒を完了させつつあるAになる……)

包囲 (4)

……複数の動作に包囲されたものが、ひきつった拒否のしぐさで遠ざかるとしても、沈黙したまま動作を持続するものをつくりだしている。

全てに触れる風と、全てに触れない風が、互いに相手のゆらめきに自己を確認している風景をかすめて行く。

どうしようもない、とつぶやく隊列を逆行し、深淵を渡ろうとして、意図からはずれた距離だけ接近している。固有よりも固有的な一瞬を足場にして。

まだ予測しない計画へ何かをひきつけていく決断のために失われた自然に、息つくひまを与えるな。

運動領域を事実へ収束させるものと、その否定だけをめざすものの境界線を膨脹させている。

ブラウン管になぐり倒されず、インクの蟻にかこまれたことのない幼児がかけてもどつてくる。

何事にも孤立している快楽を委員会のいすにすわらせるな。溶解する瞳のような群衆は、はじめから何も見ずに、ゆっくりとカレンダーをめくっている。

スローガンや歌や道具を強調するものが、一ぱんそれを信じていない。リボンにとまる蠅は、このことを予感しながら、怠惰と無知と残酷さが取り引きされるポスターが破れていくのを見ている。

屈折した線から、さまざまに生産されるもののかたちに驚くな。ある条件下では、だれにとつても与えられた線の長さが同じであることに戦慄せよ。

あまり身近に立っているために忘れていた袋を開くと、過去分詞のかたまりがころがりでてくる。完了や受動の色彩をみせ、修飾への香りを放ちながら。

雪片は必ずしも下へ落ちてこないけれども、次の誤りの時間割りを準備している。

双方が落したまま気付かずに立ち去ったあとで、残像が互いに、ここは交差点ではない、ここで交差できるはずがない、と罵り合っている。

その頃、牢獄と病院と仕事場と亡命地とを、同時に一足のスリッパでふれていくものがある。

買ってきた卵を舗装された道路の上空へ投げよ。白昼と、どこで何回ぶつかるか。

外からの合図に応じて訊問を再開するものたち。目標が明白だから。明白にするために。明白でないから。明白にしないために。

波に揺られたまま計測機械を改良して照準を不変に保つつもりでいるものたちよ。手にもつ銃の尖端はとっくに自分の胸へ弯曲しているのだ。

まだ発音されたことのない言葉のために灯をともせ。数万語にわたる演説は悲鳴に変わりつつある。

嵐にざわめく樹の葉から呼吸をひきずっていき、はりつめられた速さの糸を無言でかな

でている。糸の手ざわりがなくても。

名づけようのない部屋へ追われるようにかけ登っているとき、階段の一段ずつが棺になり、中から、ゆっくりと起き上った亡霊たちが手すりをすべりおりて行く。

ねじれた首をふりむかせようとすると、その圧力を待っていたように崩れて灰になる。

〈 〉

建造中の潜水艦の窓へ至る散歩の地図をかいている。地図が造船所を覆ってしまうまで。

あの見なれない山なみを旗にかえ、職業の標識を岬から投げ捨てよう。貧しさは日ごとにちがっているけれども、海の振動は同じであるから、波のしぶきを照明できる。

踏まれた砂の一粒ずつが、靴の底をつらぬくトゲになり足を腐敗させても、薬品に合せて歴史を偽造するな。

眼を閉じる範囲と角度だけ銃眼をひろげている。

くりかえす運搬の重みによってひびきをまげていると、荷物についているホコリの軽さに気付いて、また歩きはじめる。

〈 〉

超か反かどちらかの目をつくってしまうサイコロを分解している。

中間を任意に省略しても不変を保つ順列がある。一ばん低いところへ沈没していくから。

そのときも、かれらは楽しそうに熟練によってかすめとった感覚をたべている。素材の一つ一つに、少くとも一つの屈辱を味わせながら。

いま何かが付加されたために、人称変化した動詞がページのむこうへ流れだしている。

不確定の中で汝とその生命をとりかえそうとするものたちがやってくる。さえぎらずに行くところまで行かせよ。ここにも食糧は尽きているけれども。

どこにもいない観客が襲撃に耐えかねて一時休息する、というよりは、一時休息してもよいと思うことで襲撃に耐えている。

〈 〉

星と内臓を映している鉄条網を破って侵入してきたのは書簡や校正刷りにだけ現われる記号たち。かれらへの手当は、そのまま戦闘になる。

終止符の湖水に落ちた家族たちへ、救命具に含まれる隙間を投じている。

もはや、あの神話からの影響を脱したと思う瞬間から、別の病気にかかった患者たちが競技場へむかう。水たまりをとびこえて。

危機的時間がつくりだした空間は、危機が去ったときにも、深まったときにも翼を上昇させる気流になりうる、と速度を増していく影がいう。

分裂した逆向き不等号のガスにつつまれていると、記憶にない風車の破片を歩道のむこうに見出す。

悪夢と悪夢の相乗積が一定でなくても、それゆえに不安定だと思ふな。相乗積から、もう一つの悪夢でないものささやきがきこえてくる。

〈 〉

断崖へ急げ、あるいは、より深く眠りに落ちよ。制服のむこうで鎖の端をにぎっているものたちのカバンが哄笑しながら数字を先取りしている。

交換の規準をきめているのは、交換を不可能にしているものたちだ。

自給自足の枠を旋回させながら、それをどこまでも拡大できる気がするけれども、いまほんとうに出会えるのは、同じように枠をつくらざるをえない自己に気付くものたちだけではないか。

結合しようとするとき、こぼれていくものに感じる裂け目を勝利への道に結合せよ。

空中に浮いたまま、手にふれている網の拠点を疑った瞬間に、ラセン状にほどけた暗黒のかたまりが頭上に落ちてくる。しかも地面がみるみる盛り上ってくるのに怖れは存在しない。

〈 〉

このような瞬間がここにいない無数の戦士たちを訪れている。だから、まだ始まらない戦争の死者たちも待ち続けていてくれ。

任意の未完了の戦線にすることができなくても、やはり、一ばん辛い未完了の位置から出発しよう。

この傷口が何によって生じたかと、いま戦場にいる敵にも味方にも問いかけるな。しかし、傷口を腐敗させる力に報復するための武器をえらんできるとき、憎悪によって血管も凍りついている。

予定を踏みはずしているのに、かれの微笑をそのままうけとってくれるものたちよ。

幻想にはりめぐらされた建築は門について少くとも二つの呼び名をもつ。それが何であるにせよ、のめりこむことによってはみだされたものが問題となるだけである。

幸か不幸か等距離あるいは垂直に敵を組み合わせてカードをつくっているものたちよ。たんなる定着も、たんなる遊撃も敗北をまねく。同じかたちの弾丸を、いますぐ、いたるところに、自己の陣地の内部にも注いで、苦痛へ加担せよ。

〈 〉

このようにつぶやいてはいるが、このつぶやきは、別の、より巨大な戦闘の一断面にしかすぎない、一断面にしなればならない。

指導部と大衆の区別がなくなる環に、ひとまず到着している。すると意外なことに同じ

ような環が、続々とあふれだしてくる。しかし、このように断片的にしか戦闘させないかはどこからくるのか。

この新しい疑問にこたえるために、いま到着した環を離れて飛翔し、背後と前方の敵へ仮装して矛盾をあばきだしていく方法は、いまのところ一ぱん魅惑にみちている。

だからこそ、いま、それを選ばない。……

包囲 (5)

いま、ここには、どこよりも〈〉が重複あるいは欠如している、という感覚へむかってなだれこんでくる〈〉……と交錯しながら、たとえば、この瞬間、全世界が感覚を失なってしまう、なおも感覚のむこうへとどいていこうとする〈〉がうまれていく。

「〈〉へ接近しようとする方向と、〈〉から遠ざかろうとする方向に引き裂かれた断面が、〈〉の生存空間であり、断面が、どこまでひろがるのか、何をなしているのか、という問いが、〈〉の生存時間である。

けれども、別のとき、別のところで、すべての主語や述語や修飾語などを必要としない〈〉があるためか、いま、ここで一呼吸の間に、もっとも悪い条件から、最もよい条件へうつらなければならぬ。少くとも呼吸しうる〈〉のむこうへ。

揺れる〈〉の不定形へ、ある動作を決定していく〈〉は、手にふれる任意の〈〉

を足がかりにしながら、呼吸できる〈〉へ運動し、それによって生じる全ての変化をかくぐりぬけていこうとしているのであるが、ふと、はるか、かなたから、全く同じ〈〉が、こちらへむかっているような気がする。

用辞のように、光速度のように、〈〉のように……と無限に存在しうる喩をこえて、いま、ここで、どうしようもなく出会ってしまう〈〉は次のようなものである。

〈〉の感覚の限度が破壊されても、〈〉の内外に発生し殺到する〈〉と戦闘しなければならぬ。打撃を与えた方も、同量の〈〉を与えられている……と相手の〈〉に叫ばせるために。

同一のかたちをとって現われる〈〉への憎悪。飛び立つ鳥の羽根が上下に揺れるのと同じく、いや、それ以上に〈〉の揺れ方は無限に豊富はずだ。

〈〉のために、視えなくなったものだけを見せようとする〈〉。

〈〉へ収束しようとする度合いだけ〈〉へ膨脹している〈〉。

固有の〈〉での試みを〈〉の媒介なしに他の〈〉へ適用する〈〉。

〈〉のこちらへ乱入するならしてみよ、と誘発する権力の〈〉。

いつかは、放蕩息子のように回帰してくるだろうと恥じらいなしに予測する〈〉。

たえず〈〉を設定して、組織を維持するために危険な労働を指導する〈〉。

〈〉の不自然な空白に対する恐怖から逆に接近してくる〈〉。

〈〉相互の順列や区分に熱中して〈〉を飢えさせる関係との戦闘を放棄する〈〉。

前方の〈〉に触発されてから運動しはじめる〈〉。

〈〉の分裂を外的契機として、血を流さずに仮装する〈〉。

一時休戦のふりをして、利用できる全ての〈〉を利用しながら、残酷な鎮圧の機会をねらう〈〉。

全ての優位な〈〉へのおくれを、あとから対等に岐立させたまま放置する〈〉。

落差を逆用するといひながら、落差を固定したり、ひろげたりする〈〉。

〈〉が、単数の構成要素によって運動しているのか、複数の構成要素によって運動しているのか……を自己の運動との相互作用の中で止揚できない〈〉。

〈〉につけられた境界線を結んだり、切り裂いたりせずに移動だけしている〈〉。

〈〉が存在することによって、すでに、名づけようのない感覚を他の〈〉に与えてしまうことに対して無感覚な〈〉。

個々の〈〉でも、全体の〈〉でも扱えない〈〉の領域を窒息させてしまう〈〉。

正しい前提から出発しても、一度の悪夢で〈〉への到達を断念したために裁かれる〈〉。

全ての試みを、あまりにも重層的にやろうとする〈〉。

同じ〈〉の誤りをくりかえす〈〉。

この裁きに反逆しない〈〉や、より高次の闘争の一断片だとして離脱する〈〉を裁く〈〉。

続々と呼吸を中断する無数の〈〉。

これらの〈〉の群をとびこえることによって、はじめて〈〉の断崖を越えているという屈辱をとおりすぎる〈〉。

かつての敗北は、〈〉をうみだしている。これからの敗北は、それに匹敵する〈〉をうみださない限り、神話としても不毛である。

同じ傷口を無限に発見し、つくりだせば、〈〉の傷口が閉じられると想像する〈〉。

〈〉への到達の仕方によって到達する以上の世界が開かれる、とつぶやく〈〉。

〈〉をつけて転倒するだけでは不足であり、それを、もう一度、〈〉を通して転倒させてみよ、と〈〉の表情でいひきる〈〉。

〈〉と、その対極にある〈〉だけで包囲する必至の段階を忘却し、そのやり方を慣性化し、それを日常化、拡大化といくめる〈〉。

〈〉の尖端が焦点を結ぶところではなく、もっとも拡散するところに現われる死者たちをみない〈〉。

プラスでも、マイナスでもない媒介を無視して自己の〈〉の軌跡がふくむ以外の方向を排除してしまう〈〉。

〈〉のある転倒を、最大限の他の〈〉の転倒と対応させながらおこなわない〈〉。

また、それを、あらかじめ予測された枠の中におしこめて補完させようとする〈〉。

……

〈〉をめぐる問題が、直接に関係をもたないから、と立ち去る〈〉は、直接に関係をもつ〈〉ともたない〈〉が分裂するような力へ向うことができない。

〈〉のむこうで呼吸しようとする〈〉にとつて〈〉は直接に関係をもっているか。

このような疑問形を、断片的に、不確定の順列で吐きだしている間は、最も近く最も遠い。

〈〉のように、はるか、かなたから、こちらへむかっている〈〉は、どうしているだろうか。

その〈〉は、いま、ここにいる〈〉と同じ瞬間にしか呼吸できないだろう。

少くとも、こちらから進む〈〉は、いままで出会った全ての〈〉を、一つの〈〉から包囲しうる場をみつけるまでは水面から顔を上げて呼吸することはできない。

〈〉だけをかきわけて〈〉のむこうへいこうとすると、〈〉以外の全てのものの波動が別の〈〉になる。それでも〈〉は、花一般を一つの花の名で呼んでしまう幼児のように、無数の位相のことなった〈〉を、ただ一つの〈〉でとらえようとする。

〈〉の必死な仮定。

〈〉は、〈〉以外の全ての最小の構成単位であり、〈〉以外の全ては、〈〉の最小の構成単位である……とすれば、〈〉に迫る情況は、すべての擬制的、模倣的な戦闘の焦点であり、突破口である。

〈〉を普遍化させる力は、この世界の総体的な弯曲の度合いからきている。

〈〉を固有化する力は、この弯曲度をとらえる〈〉になりうる。

無限の〈〉は、相互に最も無関係であり、それゆえ、最も近い関係をもちうる。

ここまで仮定する〈〉が、いま、ここで交錯する任意の〈〉をのぞきこみ、その一瞬に逆生産される〈〉を〈〉の感覚を通過するままに表現する。

固有の〈〉へ、まどろみから切迫へ投げこまれる。

固有の〈〉や、個々の〈〉から可能な限り遠くへいこうとする。

ある範囲の〈〉を一周する。

相互の〈〉の位置や運動量を仮定するための基準をつくる。
〈〉群から成立する基準に感じる不確定性を、その内部へ突入することで応用しようとする。

突入の仕方や応用の仕方が、ある範囲内に〈〉されていることに戦慄する、再び、新しい生成過程がくりかえされる。……〈〉が存在しなくなるまで。

〈〉……という声、ふりかえる間もなく、飛沫のようにふりかかる。

あれは、はるか、かなたから、こちらをめざしている〈〉ではないか。〈〉が、任意の〈〉の中に〈〉の最大の生成過程をとらえようとしているとき、最小の〈〉が、気付かれぬまま通り抜けているのだ。〈〉以外の表情は相互に失われたまま。

そして突然、〈〉は、呼吸しはじめているのに気がつく。

〈〉のむこう側へ出ているのだ、全ての〈〉群のうち、〈〉だけは、いま、ここで呼吸している。〈〉のように。〈〉として。

しかし、〈〉は、偶然に、任意の〈〉を通過して、こちら側へやってくるのであるから、他の〈〉群は、まだ、むこう側にとり残されている。

〈〉は、いま、ここで何をなすべきか。

再び、呼吸の不可能な〈〉のむこうへ戻らなければならない。こんどは、偶然に、任意の〈〉を通過してではなく、一ぱん遠い、困難なまわり道をして〈〉を〈〉しなごら。

(完了のまま未完)

第IV部

ブレヒト「処置」の問題

ハイネの序文に関する序論

〈第n論文〉をめぐる諸註

不確定な論文への予断

編集人

北川 透

発行所

豊橋市弥生町字東豊和19の3

TEL(45)三八〇四番

印刷所

豊橋市中柴町74 東三印刷(有)

TEL(52)七四一七番

発行日

一九七二年一月一日